

『四条大橋東詰』

高野 澄（たかの・きよし）

kuupachi@jade.plala.or.jp

<http://takanoki-yoshi.com/>

第1章「エツちゃんの脚が停まった」	2
第2章「クメノヘイナイ」	24
第3章「出雲の国は神在月」	40
第4章「イズモと いづも」	60
第5章「四条河原の田楽棧敷が崩れた」	80
第6章「出羽の庄内の清河八郎」	111
第7章「あのひとも、このひとも」	133
第8章「オクニ総員、江戸へゆく」	155
終章「江戸城で踊るオクニ」	175

第1章「エツちゃんの脚が停まった」

エツちゃんが停まった、いきなり。

南座の楽屋口を背にして川端通を西へわたり、右に――
四条大橋の南の歩道から北の歩道へ――わたるうとした、そのとき、エツちゃんがいきなり停まった。

かなりのスピードの自転車に急ブレーキをかけた、そんなふうな停まりかた。

「あぶないよ、そんな、いきなり停まっちゃって！」

あたしとしてはふつうじゃない、けわしい言い方、のんびりしている場合じゃない、そんな切迫感。

「ごめん、ごめん。でもね、停まるつもりで停まったんじゃない。あたしはなんにもかんがえないのに、脚が停まった。あたしがあたしの脚を停めたんじゃない、脚が停まった。あたしが自分で勝手に停まった」

エツちゃん、ふつうじゃない。

15歳の女の子――女性 というべきなんだろうけど、まだ慣れないから 女の子――は脚が自分で勝手に停まったぐらいで、 停まるつもり があったのか、なかったのか、なんてめんどくさいこと、ふつうはかんがえない。

「それ、ふつうじゃないよ、エツちゃん」

「そう、いえば、ねえー」

エツちゃん自身が 自分はふつうじゃない と感じ、
クラスメイトで親友のあたしも エツちゃんはふつうじゃない と感じているんだから、まちがいなく、ふつうじゃない。

「ほっといちゃ、いけないよ、ね」

「ランランも、そうおもっ？」

あたしを「ランラン」と呼ぶのは――呼んでいいのは

——エツちゃんだけ。

むかしの映画女優の花井蘭子、あたしのひいおばあさんが大好きだった。あたしに「蘭子」の名をつけ、おばあさんも、とうちゃんもおつかさんも気づかないうちに役場に届けちゃった。

このいきさつ、知ってるのはエツちゃんだけ、あたしを「ランラン」て呼ぶのもエツちゃんだけ。

エツちゃんの言い方、不安な気分そのもの。

「ほっといちゃ、いけないよ」

右手でエツちゃんの左の肘をつかんで、

「むこうへわたるときめたんだから、なにがなんでも、わたる。さつきはね、あんたも、あたしも、何気なしにわたろうとした、それがいけなかったんだ」

「えーと、むこうへわたるって、正式にというか、本格的にっていうか、あたしたち、きめたんだよね、よくおぼえていないんだけど……」

エツちゃんの、こういう姿勢の気持ち、抑揚悠揚迫らぬ態

度、大好き。

でもね、悠揚迫らないエツちゃんを誉めてる場合じゃないの、いまは。

「感じない……?」

「なにを?」

右手でエツちゃんの左の肘をうしろむけにねじって、

「ウシロ、ウシロ」

ささやいた。

ゆっくりとうしろをふりむいたエツちゃん、

「キヤーッ!」

あたしにだけ聞こえる超低音の絶叫でエツちゃんは反応してくれた。

やれやれ、安心。

なぜ安心かというと、六メートルぐらいしろで、みたくはないんだけど、エツちゃんとあたしに気づかれまいと無理して視線を爪先に集中している中年の男、こいつがあたしたちを追跡しているんだとエツちゃんが気づいてくれたから。

男の怪しい雰囲気気づく余裕がエツちゃんにあって、彼女の余裕があたしを安心にしてくれた。

埼玉県の坂戸市の住人のあたしたちが、なぜ、京都の四条大橋でウロウロしているのかというと、はじまりはこんなふうだった。

「家出、しない？」

「しっちゃおうか！」

家出したのは昨日。

朝の七時ちょうど、あたしがエツちゃんの家格子戸を叩いて、

「行くよーっ」

「いま、行くー」

出てきたエツちゃんと視線のサイン交換、ここまではいつもとおなじ。

大きめのリュックを背負っているのがいつもとはちがうけど、鈍感なおとな——エツちゃんの両親と姉さん——が気づくはずはない。

東武鉄道の東上線、川越で降りればいつもとおなじだけど、今日は特別の日、家出の初日だから川越では降りずに池袋まで乗り、乗り越し料金を払っていったん駅を出て、東京メトロのチケットを買って丸の内線に乗ったときには 家出した女子中学生 としてのあたし自身の存在意識——存在の重さっていつのかな——をつくづく

と堪能した。エツちゃんも、たぶんおなじ。

修学旅行で京都にきた姉のみやげばなしをきいて、先^{ほん}

斗町^{とまち}の舞妓^{まいし}さんになるってきめた。

学校で、どんなことがあっても舞妓になるんだって宣言したら、

「どうして、あたしに相談しないのよ！」

わざと怒って、ふくれっ面であたしを詰問したのがエッちゃん。

「あたしもおなじ計画をたててたの、気づかなかった？」

「ごめん、ごめん」

すなおにあやまり、すなおに共感して、舞妓になるにはどうすればいいか、ああでもない、こうでもないというプランづくり突っ走ったころは、まだ、これは半分は遊びなんだ、目の前にモヤがかかっているだけなんだと醒^さめた心境だったが、

「そんな計画、やめないと、ほんとうに舞妓になっちゃうよー！」

無神経な母親のムードいっぱいにおっかさんが叱ったから、あたしに火がついた。なれるものなら、なってみな！なんていう冷淡な叱り方なら、その瞬間に熱気が冷め、肩をすくめて畏^{おそ}れ入ったかもしれないけど、そうじゃないから火がついた。おっかさんがいる場ではママ おかあさん と呼ぶけど、いない場ではおっかさん。

場に応じて呼び方を変えるテクニクがあるのを知ったとき、二歩か三歩、おとなの女に近づいた。

そうか、おとなの女が 女性 なんだ、うちのおっかさんを別にして。

エツちゃんの家の母と娘の関係もおなじようだとわかり、ふたり一度に火がついて、消えない。

新幹線で京都に着いて正面通りの旅館に泊まって、つぎの日——今日——いよいよ舞妓作戦の第一日。

新幹線のチケットを買うオカネや旅館代はどうしたか、なんて問わないでもらいたい。あるときにはある、ないときにはない、それがオカネだっていうぐらい、知っている。

正面通りの宿から八坂神社や円山公園、青蓮院や平安神宮を散歩。

散歩したいわけじゃない。散歩しなけりゃ夕方にならない、夕方にならなければ舞妓さんは出てこない、ちゃんとして調べる。

四条大橋を北にわたり、西に歩いて、先斗町ほんとうちやうの入口の

KOBANこおばんのまえであたしがつまずいてヒョロヒョロっ

とよろけ、両手を地についたところへ舞妓さん登場、あたしの肩を抱いて起してくれ、

「あぶのおしたなア。どもない、どすか？」

「ありがとうございます。このひと、今朝から具合が悪いのに、どうしてもって……」

エツちゃんが舞妓さんにペコペコ頭をさげ、KOBANから巡查さんが飛び出してきて——その先の展開は出たとこ勝負、その舞妓さんと知り合いになり、彼女の紹介で舞妓さんになるレッスンを始める、これが筋書。

エツちゃんとあたしは、いま、四条大橋東詰の南の歩道に立っている。

ここまで筋書どおりだが、北の歩道にわたろうとし

た、その瞬間、トラブル発生、エツちゃんの脚が停まった。

自分で脚を停めたんじゃない、脚が自分で勝手に停まったんだって、エツちゃんはいう。

そのつぎ、あたしたちのうしろに、地面をみつめて立っている怪しい雰囲気的中年男を発見。

中年男なら中年男らしくあたしたちの腰やお尻をみればいいのに、わざと地面をみているのが怪しい証拠だ。それとこれとをあわせれば、この男、あたしたちを追跡してるにきまってる。

あたしが「ウシロ」とささやいたからエツちゃんは気がつき、気づいたから、なぜ脚が自分勝手に停まったのか、理由がわかった。

「あいつの怪しい雰囲気が伝染して、脚が停まったんだ」

「雰囲気汚染？」

「まちがいない」

これ、ぜんぶささやき声。

そのあと、エツちゃんがぶつうの音量——中年男にき

こえる——の声で、

「どうする？」

エツちゃん、センスがいい、気が利いてる。あたしたち、あなたの怪しい雰囲気に気がついてるんだからね、バカにするんじゃないよ。と男につたえるにはどうすればいいか、ちゃんとかわかってる。

「むこうへわたる、計画どおり」

「そうだよね、あたしの脚が停まったぐらいで計画変更するのは、ダメ」

ズズッ——

うしろで、つまらない音がした。男が、古いスタイルの靴をすべらせた音だ。

追跡者はイキでなくちゃいけないのに、硬い革底の靴なんか履いて、それがつまらない、くだらない。

「勇気を出して、さ、わたろ」

エツちゃんにいつてから、あたし、おかしな気になつた。

なにがおかしいかっていうと、「わたろう」「じゃなくて「わたろ」といった。

これ、関東弁じゃない。完全とまではいえないけど、京都弁なんだもの。

家出して京都について、たったひと晩で、なんという気もなしに京都弁を話してる、これは吉兆。

「わたろや、ないの」

エツちゃんも調子に乗って京都弁。

ほんものの京都弁のニュアンスにはほど遠いけど、いいぞ、いいぞ。

あたしたちはサツサ、サツサの女子中学生リズムで橋をわたる。

男は跡をつけてくる、ズツズ、ズツズと中年男のつまらないリズム。

北の歩道にわたり、男にからだを拘束されなかったのを確認し、まずは成功と気をゆるした隙間に魔がさしたのか、ふたり同時に、

「なあに、あれっ？」

「なによ あれ？」

追跡役の男を警戒しなければならぬ。

だから、この場合、ささやき声でなければいけないのに、掟をわすれてすなおな大声で叫んじゃった。

あたしたちが叫ぶのを待ってたみたいに、

「イズモノオクニ、知らないのか？」

声の主は、うしろの怪しい中年男。

「イズモノオクニ？」

「ランラン、知らなかったの？」

「エッちゃんは？」

きくだけ無駄。あたしが知らないのをエッちゃんが知ってるわけ、ない。

四条大橋の東詰の北、高い台のうえの女の銅像が東を向いている。

男は、これ、イズモノオクニだっていう。

イズモノオクニがどんな女か知らないけど、

「いいね、これ！」

「胸を張って、カッコいいな！」

「あれ、ほんものの刀だね。女が刀を持ってる、カッ

「いいー！」

「読める、だろう。漢字が多いからぜんぶは無理としても、だいたいのところは、わかるんじゃない……」

あたしたちにたいする男の態度は、いくら割り引いても 哀れみ または 軽蔑 でしかない。

おまえたち、威勢はいいけど肩肘張かたひじはってるだけ、自信がないんだろう

キメテルみたい。

男が「読める、だろう」とあたしたちを挑発したたのは銅像の台座の正面と横にきざまれた説明文だ。

正面の説明文に指でさわって、「かぶき」は平仮名だからすすらと読んで得意になったけど、そのつぎの漢字の「踊」が読めない。

「おどり、だよ」

「じゃあ、かぶきおどり？」

おどりの漢字のつきは平仮名の「の」、そのつぎの漢字は読めた、「祖先」の「祖」だ。

「か・ぶ・き・お・ど・り・の・そ」

「うん、うん」

男がうなずく、国語の授業みたい。

つきも漢字だけど、さっき「イズモノオクニ」ってきいたから、たぶんこれがそうなんだろうと見当つけて、

「イズモノオクニ」って声に出した。

おじさん、すっかり頬をゆるめちゃって、

「阿国オクニをオクニって読めずに、アクニって読んじゃうひとが多いんだ」

男は「オ」と「ア」のところをでっかくあけ、ちからを入れた。国語の授業みたい。あ、でっかくは標準語の おおきく の意味の関東方言。

「イズモって、知ってる？ むかしのクニの名前なんだけど」

地理の問題らしいから、エツちゃんの出番、あたしはこういうの、だめ。

「ヨナゴがある、あのあたり……？」

「ヨナゴはホウキノクニ、イズモはそのまた西」

「島根県、そうだねッ」

「県庁所在地は？」

「松江……？」

「当たり前！」

当たり前、なんていうのは地理の授業じゃなくて宝くじみたいだけど、エツちゃんもあたしもおじさんも宝くじの気分だから、これでいい。

「イズモノクニって、遠いんでしょう？」

男の印象が 怪しい から ふつう にランクアップした。もう 男 じゃなく、おじさん の印象。打ち

合わせたわけじゃないのに、まるで打ち合わせたみたい
に、こうなった。

「遠いよ、ずいぶん遠い」

「遠いところから出てきて、それだけでも偉い！」

「つぎ、この字は？」

「京都の 都 だからって、ト って読んじゃ、ダメ、

だまされちゃいけない」

「ミヤコじゃないかな？」

「正解」

つぎが「に」だから「ミヤコニ」、そのつぎの漢字は

「来る」の「来」だけど、つぎの平仮名の「りて」をく

つつければ「来るりて」となるわけだけど、これ、おか

しい。おかしいから、まちがい。

「教えてよ、おじさん」

「これはカタリテと読む。意味は 来て とおなじだけ

ど、擬古文ぎこぶんだから」

イズモノオクニが京都に出てきて「かぶき踊」を見せ

て京都のひとを酔わせた、これが説明文の中身。京都府

知事の荒巻禎一さんが平安遷都千二百年へいあんせんとうを記念して書い

た。

台座の右横には、京都洛中ライオンズクラブが結成二

十周年の記念事業として平成六年に寄付したと書いてあ

る。

「平成六年は一九九四年。平安遷都は七九四年、これに

一二〇〇年を足すと一九九四年、合ってる」

エツちゃんとは永いつきあい。ときどき——いつもっ

てわけじゃないけど——キラキラ光る言葉をいって、あ

たしを怖がらせる。

あたしは そんなの怖くない と気持ちをひきしめ、

わざとボヤーンとした表情で対抗するけど、エッちゃん、わかってるかもしれないな。

わかってて知らない顔をしているんなら、エッちゃんの気の使い方、おとな顔負けに、すごい。

台座の左に金属製の大きな説明板、知事さんの説明文とおなじようなことが、ちょっと長い文章で書いてある。

おわりのところは、「歌舞伎発祥四〇〇年 二〇〇三年」に、京都洛中ライオンズクラブが結成三〇周年の記念として寄付したと書いてある。

「結成二〇周年に銅像を寄付、十年後の結成三〇周年記念に銅像の説明文の看板を寄付した。京都洛中ライオンズクラブって、ていねいだなあ！」

これといった意味もなしにいったただけなのに、おじさん、フィツと上を向いて、

「ていねいすぎるよ！」

くやしい！ の気分をこめていい、「フン」と付け足した。

京都洛中ライオンズクラブにたいする恨みとか妬み、

おじさん、それがある。

恨みや妬みはイキじゃない感情だと、これといった理由もなしにおもっていたけど、そうときまつたものでもないな。好ましい感情の発露はつろでもありうるんじゃないかな。

エッちゃんは黙っている。

あたしも、気がついたら、口を閉めている。

エッちゃんが黙っている理由を、あたしは知ってるつもり。

だから、あたしが、なぜ口を閉めてるか、エッちゃん

は知っている。たぶん、まちがっていない。

いつまでも黙ってはいられない。

あたしが先に勇気を出して、

「変更、する？」

「あたしが先に気づいたんだけど、黙ってた」

あんたに先をゆずってあげた、エツちゃんはこついいたいわけ。

勝って威張りたかったんじゃない、あたしに先をゆずることで、変更の重要性を強調したかった。こついうのがエツちゃんのいいところ、あたしには真似できない。

「変更して、いい？」

あたしの無言はOKのサイン。

「変更とか、なんだとか、それ、なんのこと？」

おじさんが質問したから、めんどろになった。

先斗町のKOBANのまえで、あたしがヒヨロヒヨロとつまずいて、ころび、そこへ舞妓さんが登場、あたしを介抱してくれ、つきにお巡りさんが——と、舞妓計画のぜんぶとはいわないまでも、あらすじを説明しなくちゃならないのが、めんどろくさい。

あらすじをたてるのは簡単なのに、他人に説明する困難には気がまわらなかった。

「舞妓さんになる計画はやめて、イズモノオクニになる計画に変更するのはどうかっていうこと」

「ふたりで一緒にイズモノオクニになるわけ？」

とんでもないミスをしているのに、あんたたち、気がつかないのか——そう質問しているみたいなおじさんの言葉づかい。

そういえば、どこかに大きな落とし穴があいてるんじゃないかと、不気味な予感。

不気味な予感の中身を先に悟ったのはエツちゃんだ。

「あたしたちはふたり、イズモノオクニはひとり、数字が合わないって、おじさん、いいたいんだろ？」

「合わないっていうか、足りないっていうか……」

「さーで、ここで出ないと、この先ずーっとあたしの出番はない。」

「どうせ幻想なのよ。数字なんか合っても合わなくてもかまわない。合わないほうが幻想らしくって、美しいんだから！」

幻想——この熟語の使い方、知ってて、よかった！

「気持ちわかるけど、どうすればイズモノオクニになれるか、知ってるの？」

「おじさん、あたしたちをからかっている。からかって楽しんでるつもり。」

「現実には、っていう意味なら知らないけど、あたしたちは幻想を信じているから、現実のオクニじゃなくて、幻想のオクニになれば、それでいいの、十分」

「だから、オクニなる方法、テクニクも幻想でいいのよ。むしろ……」

むしろなんて品格の高い副詞を使ったものだから、エツちゃん、照^てれてる。坂戸や川越ならどっちかてーとだから。

照れてる場合じゃないんだよ、勇気をふるって、そこ、突っこまなくっちゃ！

あたしの無言の激励、効いたみたい。エツちゃん、頬にうつすらと紅色が差してる。

「うわーっ、きれい、エツちゃん！」

「やっぱり、わかる？」

「なに、が？」

「オクニになる方法の第一歩がわかったの。わかった興奮で、顔がポーツと熱っぽくなってる。ランランも気がついたかなと……」

ドサツ——野蛮な調子の音がした。

おじさんの足音にきまっている。

野蛮な調子の足音の原因は、われを忘れてあたしたちに接触しようところみだからだ。

いや、接触よりすこしやわらかい接近をこころみただと甘く解釈してやってもいいんだが、接近も度を越せばいやらしい接触になるのを中年男の典型のおじさんが知らぬはずはない。

おじさん、ちゅうちゅう躑躅してる。

躑躅の原因はわかる。

幻想のオクニになる方法をあたしたちが開発したと知り、成人男性の義務としてあたしたちを ウソツキとして叱責すべきだと判断した。

そこまではいいんだけど、そのすぐあとで自分の判断を疑う気持ちが湧いた。判断に疑問があるのに、疑問の箱に蓋をして叱責するのは義務遂行に名を借りた過剰行為の疑いがかかるんじゃないかと——

おじさん、なぜ、自分の判断を疑ったのか？

平成の世に生きる、みたところ、さほど聡明ではなさそうな女子中学生ふたりが舞妓になりたくて、わざわざ家出して埼玉県から京都にきて、四条大橋東詰のオクニの銅像のまえに立っただけで舞妓志望がイズモノオクニ志望に変わり、オクニになる方法を発見したといって歓喜、興奮している、それが信じられないからだ、たぶん。

「おれよりハイレベル、こんなことがあっていいものか！」

声に出しちゃダメとわかってるのに、出さずにはいられない。おじさんの切迫した心境がすなおにあらわれている。

おじさんは切迫しているらしいけど、こっちは興奮、はりきっている。つきあっちゃいけない。

「さーて、いきますか！」

「いきましよう、元気一杯、コーラ三杯！」

がつしりタイプのあたしが銅像の石造りの台座の側面に両手をかけ、しっかりと支える体勢、ほっそりタイプのエツちゃんがあたしの背中にとびついて腰に脚をかけ、肩に乗った。

「ベルト、足りる？」

「足りるよ、紐があるからね」

舞妓さんの衣装には何本もの紐が必要と知ったので、十本ぐらいの紐を持ってきてる。紐とパンツのベルトをつないだロープを銅像のオクニの足元にまわして、エツちゃんがウーンと引っ張るとエツちゃんの華奢やしやなからだがおクニと並んだ。

名詞の 華奢、発音はやわらかいの字は重々しくって近寄りがたい感じだけど、いざ使ってみると、そうでもない。表現力はゆたか、やわらかい。

「つかまって、ランラン」

エツちゃんが投げおろしたロープにつかまり、台座の側面を脚をかけて、あたしも登る。

スニーカーの生ゴム底がうまい具合に石の側面に吸いついてくれ、ツルツルすべるおそれは感じない。もともとあたし、恐怖の感情はうすっぺら。

「いいねえ、このながめ！」

「日記に書いとくべきじゃないかな、2012年2月20日の日暮れちかく、四条大橋東詰から西の眺望は素晴らしかった、と」

「太陽暦、陰暦？」

「こだわらない」

「あたしたち、鴨川をこのポイントから眺めた最初の間かも……」

「そうはいかない。最初はここにオクニの銅像を乗せた工事のひとつ、そのつぎがオクニさん、あたしたちは八番目、九番目あたりじゃないかな」

「それだって、たいしたもの。孫娘ができたら、ゆっくり教えてやりたい。あーあ、孫娘、産みたい！」

「孫を産むのはあなたの娘さんか息子さんのご夫人、あなたは孫は産めないの。でもさ、お孫さんが、あたしもオクニになりたいっていったら、どうする？」

「さすが、あたしの孫、うーんと誉めてから手伝ってやる！」

うっとり夕方をながめていると、下から声がかかった。おじさんだ。

「孫のはなしなんか、してる場合じゃない。先斗町のKOBANからおまわりさんがくるまえに、降りなくちゃ」

「おまわりさんに捕まるつもりはないの」

「捕まらない決意はご立派だけど、おまわりさんが警察官としての義務に目ざめれば、否応なしに捕まっちゃうんだ」

それがそうはいかないのよと、あたしはおじさんに説明する。

先斗町KOBANのおまりわさんが頬ひきつらせて走

って四条大橋の真ん中にきたら、それを合図にあたしたちのからだはオクニの銅像のがらんどう——がらんどうの漢字がわからない——をストーンと落下して過去にむかう、これがあたしたちが発見した オクニ没後のお弟子になる方法 なんだが、おじさん、さっぱり理解できない顔。

「オクニがどういう女性か知らないけど、むかしのひとなのはわかっている。銅像になってるんだから、かなり有名、尊敬されるべきキャラクターの女性だってことも」

説明役、あたしからエツちゃんに交代する。

「オクニの生涯はこの銅像で完結している、これ以上は成長しない、変化がない。だからね、銅像から下へ降りてゆけばオクニの生涯をさかのぼって出発点にもどれるのよ、わかる、おじさん？」

「マジックなんだろ。マジックでオクニになれるんならば、わざわざオクニの生涯の出発点にもどらなくても、いますぐ、サツサとオクニになればいいじゃないか、マジックで」

「マジックじゃないの、幻想。マジックじゃ本物のオクニにはなれないの。なぜかっていうと、あたしたちはマジックは嫌いだけど幻想は好きだから」

「マジックと幻想と、えーと、なんていえばいいのかわからないが、どっちが上等？」

「比較しても意味はないの、好き嫌いの問題だから」

おじさん、かんがえた。

かんがえたから、姿勢に隙ができた。

いまのうち、はやく！

サーッと素早く！

目くばせで打ち合わせ、ふたりいっしょにオクニの銅像のなかに滑り落ちた。

のこされたおじさん、姓は橋本、名はヒサシ。

京都ラビットクラブの逆転事業専任。

逆転事業なんて奇妙な名称だが、ラビットクラブの歴史、由緒を知れば納得できる。

1905年にアメリカのシカゴでライオンズクラブが結成された。

昭和二十八年（1953）に誕生した京都ライオンズクラブを第一号として、京都にライオンズクラブがつぎに登場、洛中ライオンズクラブもそのひとつ。

ライオンズクラブのつぎに登場したのがラビットクラブだ。

後発で小規模だから、ライオンズが上位、ラビットが下位の印象になるのはやむをえない。

優劣なんか競っても意味も価値もないが、ライオンズ優勢、ラビット劣勢の印象は否定できない。

洛中ライオンズが結成二十周年を記念して建てたイズモノオクニの銅像、これが大好評となり、ラビットは劣勢感になやまされる。

ライオンズに対するラビットの劣勢を如何にして優位に変えるか、運営委員会の結論が出た。

——逆転事業部を新設し、橋本ヒサシを専任に任命する！

給料はそのままと、こ丁寧にも添書てんしょつきの辞令がわたされ、橋本ヒサシは大役を拝受した。

どうすればいいのか——

好意をよせてくれる会員はいるが、かれらにも名案はない。会員に名案がないから、非会員の庶務掛にすぎないヒサシに大役が投げられた。

わからない。わからないから、指で頭皮を掻きむしつて、なやむ。頭皮掻きむしりは困惑したときの橋本ヒサシの癖だ。

ちからまかせに掻きむしり、頭皮が破れて血が出たのを知った。手をおろし、顔にちかよせ、血まみれの指先をみる――

「掻きむしれど、掻きむしれど、わが思索、名案を産まず、じっと指をみる」

古今東西の有名なセリフを駄洒落たじゃれにしてブツブツとつぶやく、これ、ヒサシが長年愛用して成功率の高い苦境脱出の常套作戦だ。駄洒落が出さえすれば、たいていの場合、先は明るい。

「とりあえず、ともかく、なんとかなる……これしかない」

とりあえず、ともかく、橋本ヒサシはなにをすればいいか、わかった。

「イズモノオクニ！」

壬生川みぶがわ通仏光寺とつこうじの西、クラブの事務所から四条通へ出てそのまま東、堀川↓烏丸↓河原町から四条大橋の東詰の歩道をわたると、目の前にオクニの銅像。

ライオンズクラブにたいするラビットクラブの恨みと嫉妬のシンボルはイズモノオクニの銅像、そのオクニの銅像のまえに立てば名案がうかぶ――と信じて壬生川通仏光寺から歩いてきたわけじゃない。

信じているのは とりあえず やともかく なんとななる の、キマグレのシステムだ。

オクニの像のまえに立てば、なんとかなる――甘い幻想をふところに、橋本ヒサシはやってきた。

北の歩道へわたろうとした、そのとき、前に行く中学
生ぐらいの女の子ふたり、そのひとりがいきなり立ち停
まったから、ぶつつかりそうになった。

危ないじゃないか！——叱る姿勢をかまえた、その寸
前、連れの女の子が、

「あぶないよ、そんな、いきなり停まっちゃって！」

彼女はヒサシの 叱る権利と勇気 を奪ったのだ。

ヒサシは叱らなかった。

女の子に先取りされたからではない、女の子の声の凜
としたパワーに圧倒されたのだ。

——あの声を持たぬおれには、叱る権利がない。

敗北感ではない、倫理をふまえて自制した誇りの感覚
である。

叱られた連れの女の子にも好感を持った。叱ったのが
ランラン、叱られたのがエツちゃん。

ふたりの女子にどんな人生が待っているのか、それを
知りたくなった。

ふたりのあとから北の歩道にわたった、そのとき、

「なあに、あれっ！」

「なによ、あれ？」

驚愕の声に刺激され、ヒサシのからだ^みが震えた、ピク
リ。

オクニの銅像、まさに偉容。

オクニの銅像はいつも、なんという気もなく、みてい
る。

だが、こんなにも凄いオクニの銅像をみた記憶がない。

屹立^{きつじつ}している。

屹立と表現するのはまちがいかもしれないが、いま、

ほかの表現を知らない。

女の子のうしろから声をかけた。

「イズモノオクニ、知らないの？」

四条大橋の東詰で中年男が、見知らぬ、中学生らしい女の子に声をかければ、痴漢行為予備の容疑で先斗町K O B A Nのおまりわさんに身柄を拘束されるおそれがある。

橋本ヒサシが 歴史知識に乏しい女子中学生にモノゴトを教えてあげる中年男 の立場を装ったのは賢明だ。

ランランこと竹田蘭子と、エツちゃんこと土佐林悦子はヒサシのみているまえでオクニの銅像のなかに没入して消えた。

消えたが、この世から去ったはずはない。

オクニの生涯の出発点にもどる、なんていつてたから、その出発点めざして突進しているんだろう。

意外ではない。

大橋の南歩道から北歩道へわたって声をかけたときから、どうやら、こんなふうな展開になるんじゃないかと予感があった。

蘭子と悦子が消えたのを確認して、橋本ヒサシはニンマリ、微笑した。

いやいや、ニンマリ と 微笑 は合わないから、

足して二で割って、^{かんじ}莞爾として笑った と言い換える。

—— オクニに優るライバルの像を造って東詰の南側に建てればいい。じつに、まったく、簡単なはなしじゃないか！

この瞬間にヒサシを襲った興奮があるとすれば、オクニのライバルは簡単に発見され、ライバルの銅像が铸造

されて橋詰南側に建立され、あつというまにオクニ像を
圧迫して、ラビットクラブの対ライオンズクラブ逆転事
業は成功のうち完了、橋本ヒサシは逆転事業選任から
事務職 No.1 に昇任する歓喜の予感でもある。

キマジメな人間ならば誰でも避けられない宿命の淵に、
いまこそヒサシは立たされた。

(第1章・終)

第2章「クメノヘイナイ」

橋本ヒサシはラビットクラブの事務所にもどる。

いつもなら、壬生川^{みぶがわぶつこうじ}仏光寺の事務所に帰るのは楽しくない。

帰って報告できるほどの仕事をした自信がない。

汗をかき、脚を棒にしてうごくだけの毎日、仕事をしていないはずはないのに自信がない、事務所にもどるのが苦痛だ。

だが、

——今日はちがうぞ、ばかにするな！

胸をぐーんと張った姿勢を意識して事務所にもどり、ドアを蹴っ飛ばして、

「総務部長は、どこだ！」

逆転事業のヒラの専任でしかない立場にはゆるされない大声。

「そんな大声で、橋本さん！」

橋本に味方する女性事務員が存在する。世のなか、捨てたものではない。

「カヨコさん、心配してくれて嬉しいが、橋本ヒサシ、いつまで弱虫の逆転事業専任じゃない。事務職No.1に昇任する日がちかづいたのさ、よろこんでもらいたい！」

岩本カヨコは下向きで、

「またー、橋本さん、いつもとおなじ……」

橋本さん、いつもとおなじのあとでカヨコが口をつぐんだのは橋本ヒサシの空威張りは^{からいは}毎度おなじみ、めずらしくもなるともない。

「総務部長さんは総務部室、あたりまえでしょう」

「そう、あたりまえ」

庶務掛の部屋に あたりまえ の声が二度もあがって、
重なった。

重なったから、パワーが出た。 あたりまえ のパワ
ーにおされ、勢いをつけて総務部室にとびこみ、

「四条大橋です！」

「四条大橋……そうかつ、壬生川仏光寺から東だな。北
でも南でもない、西でもない、ズバリ東か！」

総務部室にいたのは部長をふくめて六人、ヒサシが四
条大橋 と報告したのをいまや遅しと、部長を除く五人
の男が腰のベルトをギューツと締めなおし、飛び出そう
とした、そのとき、

「ゆるさん！」

部長の怒声。

うちの部長は、なんとというか、まあ、エネルギーが少
ないひとだねと、つねづねの評判だが、たったひとつの
取り柄が怒声の音量の高さと突き刺さる方向の正確さ、
これは部下のだれもが認めるところ。

叱るべき—— 然るべき でもいい—— 相手の額のあ
たりに焦点をさだめ、口をひらいて発する怒声はまっす
ぐに走って突き刺さる。

「逆転事業専任の橋本ヒサシを出しぬいて功績をあげよ
うとしても、わしは許さん、断じてダメだ！」

部屋から飛び出そうとした五人の足はリノリウムを
敷いた床に貼りついて、一步も動けない。

新しい敷物、それも化学繊維なんかじゃなく、天然素
材の奥ゆかしい敷物に替えなくてはお客さんの信用が落
ちてしまうと敬遠的のリノリウムが どうかわたし
を捨てないで と懇願しているから、五人の足の底が貼
りついたのか。

「ものども、よっく、聴け……」

このキメゼリフで、部長さんはテレビの時代劇に興味を集中して、いや、手みじかにいえば、「水戸黄門漫遊記」のファンとして生涯の大半を送ったのがわかる。

「逆転事業専任の橋本は、たったいま、事業の成否を決定する聖なる舞台は四条大橋東詰の南側であると確信してもどつてきた。であるからには、聖なる舞台の四条大橋東詰で展開する作戦は如何にあるべきか、然るべき構想を得てもどつてきたにちがいない……そうだな、橋本くん？」

部長の語尾の勢いが弱くなったのは、べらべらと気持ちよくしゃべるうちに、ひよつとすると、わしは橋本を過大評価しているんじゃないかな？ の疑念が湧いたからだろう。

だから、もう一度、

「……だな、橋本くん？」

念をおし、中身はなんでもかまわない、表面だけでも威勢よく、四条大橋東詰の南で展開すべき作戦構想を披露してくれよとサインを送ったつもり。

「部長の支持によって橋本ヒサシ、強い味方をいただきました」

「オレにゃー、生涯……」

調子っぱずれの声をかけたのが剽軽者ナンバーワンの評価が高い海原五三郎、橋本ヒサシを赤城山の国定忠次に見立てる。

「おめえという、強い味方があったんだ！」

海原の声援はありがたいが、まともにつきあつと、いわんとするところのセリフを忘れるおそれがある。海原への謝辞は後日にまわすことにして、ヒサシ、

「われらのライバル、オクニの像は東詰の北にある。だから、我らが建立すべきライバルの像は東詰の南に建て

ればよろしい！」

「北に対抗するんだから南に……そりゃあんまりお粗末ではないでしょうか？」

海原が首をねじったのは嫉妬のこころから、である。視線を部長に当てる、部長の賛同を得たい。

しかし、部長は、

「海原さんの疑問を全面否定するつもりはないが、北に対抗するんだから南に……これ、すなおで上等なんじゃないかな」

「いますぐ、きめちゃうんですか？」

まだ議論は尽くされていない、海原はそういいたいわけだが、いつもなら味方してくれる巨理雄一郎、どういうわけか、視線を海原の顔からはずした。

糸川益五郎は視線を床に落とし、内々のうちに巨理に同意の意志をしめす。

「橋本さんの提案を部長が支持し、われわれに同意をもとめておられる。海原さん、なにか異論でも？」

曰ころからまとめ役を自任している新門友三郎の断定的な言葉は海原の異論の火に水をかけた。

「さあて、それでは橋本さん、東詰の南に建立すべきわれらのライバルの候補はきまっているんだね」

ひと息おいて、橋本ヒサシ、

「クメノヘイナイ！」

「なあに、それ？」

疑惑と不信と軽蔑をこめて問いの言葉を発したのは海

原五三郎。

「人物を問題にしているんだから、疑問語はなあに？
じゃなくて、だあれ？ が正しい」

噛んで含める橋本ヒサシ、ここ数分のうちに貫禄が出

てきた。

「疑問語については橋本くんの見解が正しいが、しかし、その、クメノヘイナイっていうのが何者なのか、さっぱり見当がつかないのはおれだけじゃなさそうだな」

部長は橋本を軽蔑してはいないが、とって尊敬もしていない。あえていうと、橋本の存在をさほどには尊重していない。

四条大橋東詰の 南 を提案する姿勢に自信を感じたので、こりゃ耳を傾げるだけの価値はあるなと判断しただけだ。

だがしかし、クメノヘイナイ、そりゃいつたい、何者なのか！

「みなさん、知らない？ クメノヘイナイ、だれもご存じない……？」

橋本ヒサシ、総務部室の真ん中に立ち往生、茫然自失の姿勢をもてあましている。

「橋本くん、どうした、よっぽど困っている、かのようにみえるけど……」

「部長さんにもうしあげます」

「糸川くん、いつてくれ」

「専任の橋本が困惑しています。そして、橋本の困惑の状況は橋本のほかの、われら全員の困惑でもあります。

この先をもうしあげるのは心ぐるしいのですが、ご命令ならば仕方がない、の心境でもうしあげます、橋本の困惑を解消するのは部長の責任、そしてまた部長にのみ遂行可能であります、以上」

一瞬おいて、糸川、

「ああ、橋本くん、いいね、これで？」

「ありがとうございます。これでうまくゆきそうですね」

を感じます」

橋本ヒサシは視線を部長にむける、部長さんさえ決意なされば、この場はすべてまるく収まるのです と提案したい想いをこめて。

全員の視線を浴びて、部長は決意を表明する。

「おれは決意したよ。決意はしたが、どうすれば決意を実行に移せるか、については確信がない。確信がないままに決意を披露していいものだろうか。全員で検討してもらいたい」

糸川がみんなを代表して、

「どうぞ、部長」

「幹部がヒラ社員にたいし、腰を低くして 頼む というのは異例である。その異例をあえて決行するときめたのを、おれは異例と表現している、つまり、その……」

部長がぐるぐるめぐりの苦境におちいったのを察知した糸川、一步ふみだし、

「部長さん、苦境からの脱出を可能にする途はただひとつ、簡単明瞭、そして勇氣、それに加えて、ともかくも 第一步をふみだすこと！」

厭味もない、過剰な謙虚もない糸川ヒラ社員の助言にちからづけられた部長、

「そうなんだ、勇氣ある第一歩だ……橋本専任さん、クメノヘイナイを知ってるのはきみだけだ。そこでお願いである、クメノヘイナイとは何者か、わかりやすく、短い言葉で説明してもらえないだろうか、まあ、部長命令といってもいいんだが」

こんどは橋本が苦しい。

「むずかしいですよ、部長、これは」

「だって、あんた、知ってるんだろ、クメノヘイナイ？」

「もちろん知ってます。なぜ知ってるかっていえば、クメノヘイナイは有名人だから」

「有名人だからって、すべての人間が知ってるわけじゃない。はいはなし、われらが戦いを挑むイズモノオク二にしても、知らないひとはうじゃうじゃいるはずだ。

だから……」

「だから まではいいんです。その先が苦しい、むずかしい」

「有名人なら人名辞典に出ている、人名辞典をみればいいんだ！」

「でも、ここに人名辞典はないんです」

ドアに近い、いうならばこの場では一番気楽な地点から控えめな発言は岩本カヨコ。

「ここ っていうのは？」

「ラビットクラブの事務所」

「ラビットクラブに人名辞典は無用だろう。われら庶務担当部門から人名辞典購入費を請求しようものなら、株主総会で叱責処分が決議される」

岩本カヨコは控えめな見解表明をつづける。

「人名辞典はないんです。でも、わけは知りませんが、

『こうじえん広辞苑』はあるんです」

「コウジエンって、酒や醤油をつくる麴を栽培する薬草園のこと？」

声の主にたいする軽蔑の気分が一本の矢となって突き刺さった。ご本人の名誉と人権にかかわる深刻な問題だから、その職員の名は伏せる。

「ふつうの人名辞典には人名しか書いてないけど、『広辞苑』はいつてみれば日本語辞書、一般項目は溢れるほど多いが人名項目は少ない。その『広辞苑』に出ているなら、クメノヘイナイ、相当の有名人ですよ。おおげさ

にいうなら、クメノヘイナイを知らないのはハジだ、と
いったような」

「ハジやコウジはともかく、格の高い、その『広辞苑』、
あるの、ここに？」

「あるんですよ」

カヨコはばたばた走って備品棚から『広辞苑』をぬき
だし、誇らしげに胸にかかえて走って、部長のデスクに
置く。

「ラビットクラブのメンバーさんの大多数は、ご自分は
インテリだと自任しています。だから事務所に『広辞苑』
がなければインテリの自意識がくずれてしまうって、あ
たし、入社した日にもうしあげたんです。そしたら、ま
えの部長さん、サラサラッて伝票書いて、買ってくれた
んです。あんなに勇気のあるインテリ部長さん、みたこ
とがないなあ！」

部長はカヨコの額のあたりに視線の焦点をあて、オ
イ、そりゃ、おれの前任のインテリ部長さまを引き合い
にしておれにたいする皮肉、もしくは当てこすりをやっ
ているんじゃないか？ の気分を濃厚に発信したが、カ
よコには通じない。『広辞苑』の本体を箱力バーからひ
きだす作業に熱中しているからだ。

「あーあ、やっと出た。あれっ、なによ、これ！」

ちよつとだけ顔を出している紙切れを親指と人指し指
ではさみ、ひきだし、目の前にあげて、

「スリップ、そのままじゃないの。ということは……」

口を 呆れた！ のかたちひらくまですこし時間を
かけて、

「買ってから今日まで、だれも『広辞苑』使ったことが
ないんだ！」

「その、スリップっていうのは……」

「イヤですねえ、部長さん。部長さんもやっぱり……」
「なにが、やっぱり、なんだ？」

「そのようにお出になるんじゃないかと、予想どおりの反応ですね」

部長と岩本カヨコのあいだを割って顔を出したのは新門友三郎、

「岩本さん、いつまでもその調子じゃドラマが進展しないから飽きられちゃうよ。状況を見計らって……」

わかっているのよ新門さんと、カヨコが口ではいわずに目でいって部長のスリッパ執着感を挑発すると、はたして部長、挑発に乗った。

「スリッパって女性の下着だろ、それが『広辞苑』に挟まっただけで、うちの事務所では『広辞苑』が一度も使われなかった証拠になるっていうのは」

「おとなの女がドレスを着るときの下着をスリッパっていうんですけど、書籍に挟まれて出版社から小売書店にとどく、この紙切れもスリッパっていうんです。業界では補充注文伝票なんて呼びます」

「ドレスのときの下着？」

部長は下着にこだわる、下着から離れられない。

「小売店で売れば、売れたしるしに抜くんですけど、必要がなければ抜かずに、書籍本体といっしょにお客さまに渡ります。お客さまは邪魔だから抜くのがふつうだけど、今日はここまで読んだ、の柔おしがわりにするひともいます」

「ふーん。スリッパはあやふやな存在だけど、あやふやだからといって無視すべきものではない。おもしろいなあ！」

総務部長は悪人でない、それはこの一言であきらか。

総務部の部屋に部長と六人のヒラ職員がいる。

岩本カヨコが備品棚からとってきた『広辞苑』が部長のデスクの上にある。

部長はデスクの椅子に坐っている。

部長デスクに面して前にふたり、うしろに三人、あわせて五人のヒラのデスクがあり、五人のデスクとは別列、部長に斜めに対面する位置に逆転事業専任の橋本ヒサシのデスクがある。

これだけ条件が揃っているのに、なかなか『広辞苑』があけられない。

総務部室の雰囲気、空気が妙な具合に凍結した感じなのだ。

なにがなんだかわからない、わからないから凍結した感じ というしかない。

部長は微動だにしない。

『広辞苑』をあけ、クメノヘイナイ、クメノヘイナイ とつぶやきながらページをめくる低レベルの作業は部長相当の仕事ではないから、その気にならない。その気にならないから微動だにせず、事態の推移を自然なりゆきに任せていられる、さすがである。

微動だにしない部長と対照的に、六人のヒラ職員の姿勢を擬音語で表現すれば ウウウツ または ヒョイツである。それぞれのかたち、方向にむかって動こうとしたその瞬間、出所不明のブレーキが掛かったから ウウツ ヒョイツ で停まって凍結した。

六人に共通の心理は、いまこの時点で『広辞苑』をひらいてクメノヘイナイの氏素性を調べる役を買って出ると、とんでもない災難がふりかかると予知した恐怖の感覚だ。

災難がふりかかると知って手を出すのは愚かである、

愚行は他人に任せればよろしい。

だれも動こうとしない、無限に長い時間が過ぎたようだが、じつは、せいぜい七秒である。

八秒すぎて部長が叫んだ。

「そうだ、久次米くんくじめだ、こりゃ、久次米くんの仕事にふさわしい。久次米くんの宿命なんだ、輝かしい宿命なんだよ。おめでとう、久次米くん！」

完全な自信に裏付けされているわけではないから、部長、一瞬おいて久次米純一を軟化させる作戦に転じる。

「知ってるんだろ、これ、あんたに課せられたきびしい宿命なんだ、ってこと」

「わかってもらえたんですね！」

「感激の気分に溢れた対応だ。ということは、つまり、事実なんだね」

「もちろんですよ、部長」

部長と久次米、ふたりだけで「宿命の確認」の快感を味わっているけれど、第三者には、なにをやっているのか、ぜんぜんわからない。わからないままでは面白くないから、適当に解釈してつぎにすすむ。

われら第三者の適当な解釈

クメノヘイナイの「クメ」と久次米純一の「クジメ」の類似に部長は気がついた。類似している複数のモ

ノヤ コトガラ は相互に繫累けいらいの関係にあると認

定してよろしいと部長は自説に都合よく、強引に解

釈し、久次米純一はクメノヘイナイの末裔であり、

クメノヘイナイを現代において名誉回復、再評価、

幻影として蘇生させる任務がある、これがすなわち

自分の部下の久次米純一の宿命なりと確認した。

「おれの早トチリかもしれないが、そこに顔を出しているわれら第三者の適当な解釈を、そっくりそのままわれらの解釈 といつか、共通認識といつか、それに採用していいわけだよ、ね？」

「よろしいのです、部長。ただし、二件のわれらがおなじ次元に顔を出しているので混乱の恐れがあり、これは整理しなければなりません」

「手っとり早くいえば、われらのわれら は第三者じゃなく、そのものずばり、純粹なわれら なんだけどなあ……」

部長の不満を、久次米が救う。

「部長さんと久次米純一のあいだではヘイナイ事案とい、ラビットクラブの事務部ではこれまでどおりに逆転事業と呼ぶ、これでいいじゃありませんか。おれたちが先なんだ、と意地を張るとろくなことにはならない、これがこの世の定則なのです」

久次米の提案をうけとめた部長、

「さーで、どこまでもどればいいのかな、久次米くん？」

「この……」

久次米は部長のデスクに乗っている『広辞苑』を指さし、

「『広辞苑』にクメノヘイナイの項目があるか、ないかを探し、あったら、この場でみなさんのために読み上げる、そして後日のためにコピーをとっておく」

「その役をやるのは久次米純一である、こうきまつたわけだ」

部長と久次米のほかのメンバー、きまるべきことがき

まっつて凍結解除、『広辞苑』を手にとる久次米に視線が集中する。

「クジメ、じゃなくて、クメノ、クメノ……………」

「ありました！」

「『広辞苑』に出ているんだから、クジメヘイナイ、いやちがう、クメノヘイナイ、よほどの有名人なんだな。じゃ、読んでくれ」

久次米が読み上げ、コピーして全員に配布したのを掲載する。

くめーのーへいない【久米平内・桑平内】

江戸前期の伝説的武者。本名、兵藤長守。通称、平

内兵衛。九州出身の浪人で、剛勇の名があり、江戸赤

坂に住して千人斬りの素願を起したが、悔い改めて鈴

木正三の門に入り、二王禅の法を修めた。その罪業の

つくないに自らの石像を刻んで浅草寺仁王門外に置き、

通行人に踏み付けさせたという。のち踏付を文付と解

し、願掛の文を奉納する者が多くなり、縁結びともさ

れ、平内堂に祠られた（1615?～1683）

「浅草寺仁王門の外……………これはつまり東京の浅草の金龍山浅草寺のことだな。しかし、『広辞苑』によると、ヘイナイの石像は江戸時代に造られ、平成年間の現在ただいまも浅草寺の境内の平内堂に祠られている。となると、浅草寺の了解を得て……………カネはかかるだろうがたいした額ではなから……………四条大橋東詰の南の空地に移せばあっさりと目的達成、われらが大汗かいて逆転事業をやるまでもない。困っちゃうな」

部長は苦境におちいった。

組織の苦境を部下に告げるリーダーと、ひた隠しに隠して苦境脱出の秘策を探すリーダーがいる。

ラビットクラブの総務部長が前者のタイプ、つまり善人であるのはわかるが、苦境に陥ったいきさつを検証しなければ脱出の途はみつからない。

善人は、つまり部長のタイプのリーダーは、得てして過去の検証を嫌う。

「困ったな」

くりかえして、フッと気づいた。

「久次米くん、きみ、これ、知らなかったの？」

「知ってますよ」

一瞬おいて、

「もちろん」と付け足したのは部長の問いのレベルの低さを指摘し、かつ抗議する気分を込めているようだ。

「久次米くん……」

これは部長ではなく、逆転事業の主役としてクメノヘイナイなるものの名をあげた橋本ヒサシ。

「きみのお父さん、お祖父さんは、きみに、なんて伝えたの？ 浅草寺の平内堂のヘイナイ像について、ああしるとか、こうしるとか指示した、あるいは命令した。それがきみの宿命となったわけだから」

「ちがうんです」

久次米純一は冷静を保っている。

落ち着かないのは部長、橋本ヒサシ、岸本カヨコ、亘理友五郎など、久次米をのぞく全員。

冷静な久次米がくりかえした。

「ちがうんです」

「ちがうって、なにが、どういうふうがちがうの？」

「平内堂にあるヘイナイの石像はレプリカ、再製品なんです。昭和二十年（1945）三月の東京大空襲で平内

堂も平内の石像も焼けてしまい、昭和五十三年に浅草の有志の方々の手によって再建されたレプリカ」

「そうかあ。レプリカじゃ、われらが大騒ぎする代物じゃないな」

「レプリカでもいいじゃありませんか。レプリカが造られたのはヘイナイの人気の高さのしるしでしょう。浅草寺からレプリカを頂戴するんじゃなくて、われらはレプリカの、そのまたレプリカを造って四条大橋東詰の南に建立する、恋人たち殺到、まちがいなし！」

「恋人が、どうして、なぜ？」

「『広辞苑』に書いてあるように、ヘイナイは自分の石像を踏付けてくれと遺言した。踏付が文付に転じて……」

「それで、どうなる？」

部長は海原五三郎を急かす。

「恋文を石像にむすびつけると、恋心が相手に通じて恋愛成就。合理的でしょ」

「石像の傍に恋文を書く用紙の……ヘイナイグッズですな……自動販売機を置いて……」

「そりゃ艶消しだ。京都洛中ライオンスクラブのイズモノオクニに軽蔑され、とても勝負にならない」

部長と海原が意気消沈の首を垂れた。

それを励まして久次米、

「あの、ですね。わたしの曾祖父さんか祖父さんあたり、昭和二十年三月の東京大空襲のころの久次米家の主は、ヘイナイの石像が焼けたといわれても信じなかつたんだそうです。石づくりの像が焼けるはずはない、だれかが

「……」
「そうか。そりゃそうだ、そのとおり、石像が焼けるわ

けはない。火炎をあびて真っ黒にはなるだろうが、焼けて粉々になるはずはない」

「だれかが平内堂から取り出して、どこかに疎開させたんだ。疎開させたひとが亡くなったかなにかして、石像の安置所がわからなくなった。浅草寺参詣のひとに大切にされた石像だから草の根を分けても……むかしのひとだからおおげさんです……さがして浅草の観音さまの傍にもどすのがおれの子孫の義務だぞと遺言して死んだ。まあ、わたしは会ったこともない曾祖父さん祖父さんあたりですから遺言の件は忘れていましたが、橋本さんがヘイナイを持ち出してくれたおかげで思い出しました。

ありがとうございます、橋本さん」

「いやあ、お礼なんて」

そこで橋本ヒサシ、とつぜん思い出したのは四条大橋東詰の北、イズモノオクニの銅像のなかへ没入した二名の女子中学生。

「埼玉県から来たっていったな、あのふたり、どうしてるかなあ？」

「ふたり、って、だれ？」

「ええっ、いや、なんてことはないんです。気にしないでください」

お礼といえば、ぼくが、だれより先にあのふたりの女子中学生にお礼をいわなければならぬんだと橋本ヒサシ。

「そもそもは、あのふたりから始まったんだから」

「ええっ、なーに？」

「いや、なにがなんだか、ぼく自身でさえわからないんです」

第3章「出雲の国は神在月」

埼玉県の坂戸市から京都、京都から出雲^{いすも}まで、ずいぶん遠かった。

出雲がちかづくにつれてエツちゃんの脚がどんどん速くなって、あたし、並んで歩くのが苦痛。

「そっだっ、思い出した！」

「思い出す、って、あんた、出雲ははじめてなんだよ。はじめての出雲に思い出があるわけ、ない」

「思い出はないけど、知識はある」

知識　なんて似合わない言葉づかって、エツちゃん、ヒトが変わったみたい。

やさしく説明してってあたしが頼まないうちに、エツちゃんは自分から口をひらいた。

自信たっぷりの態度、やっぱりエツちゃん、ヒトが変わったんだ。でなければ別人と入れ替わった、とか。

エツちゃんが説明してくれたのを、あたしの言葉に翻訳する。

恥ずかしい気がして、足の裏から熱気があがってくるのはなぜなんだろう？

出雲には八百^{やあひやひや}万——数えきれないほどたくさん——

の神さまがいらっしやって、日本じゅう、あっちこちへ手分けして出張し、神社に泊まって仕事をする。

神さま派遣事業会社の営業方式はフランチャイズシステムなんだといえ、わかりやすいかな。

神さまの仕事って、じつをいうと、ふつうの人間がやってるのほとんどおなじ。だから神さまの仕事な

のか、人間の仕事なのか、区別はつかないの。

八百万の神さまは一年に一度、陰曆の十月に出雲にお帰りになる。出雲のほかの土地では神さまがいなく

なるから神無月^{かんなづき}、出雲では神さまがたくさんいらっし

やるから神在月^{かみありしき}。

出雲がちかづくにつれてあたしの脚が速くなり、並んで歩くのに苦勞したってランランはいうから、説明してあげないとまずいね。

あたしが自分で自分の歩きを速くしたんじゃない、うしろから押される感じで、いくら速く歩いても疲れないの。楽しいから、いくらでも速く歩ける。

ランランはそうではないのがわかるから、これでもあたし、気をつかって自分の脚にブレーキかけた。あたしはあたしで気をつかった事実、ランラン、わかってくれるかな？

ハイハイ、わかるよ。わかるけど、自分のことを他人からいわれ、他人の音声言葉^{おんせいごとは}を自分の読み書き文字に換えるのは恥ずかしいものなんだよ……ランランからエッちゃんへ

エッちゃんがいうのがほんとなら、彼女は神さまと、神さまのひとりと親戚関係みたいな特別のつきあいがあるとかんがえなければ理屈が通らない。

エッちゃんとちがい、あたしは神さまとはなんのつきあいもないとかんがえなければ、これまた理屈は通らない。

「坂戸を出てからたった一週間だけど、エッちゃん、あたしからどんどん遠くなっちゃうみたい」

「あのね、ランラン、いつもおなじこといってるけど、

自分で自分をランランから遠い存在にしている感覚はゼ口。悪い気にさせてるんなら謝るけど、もしかすると、これ、謝ってすむ問題じゃない、かもね」

家出しようと先にいったのはあたしだった——いおうとして、こりゃいかんと気づき、あわてて口をギューッと閉じる。先に言葉に出したのはどっち、なんてことで争ってる場合じゃない、いまは。

なぜかっていうと、先に思ったのはエッチちゃんかもしれない、いや、その可能性は高い。

「あのね……」

いおうとしたあたしをさえぎって、エッチちゃん、

「あたしが寂しくないなんて、ランラン、おもわないでね。きのうあたりから、寂しくって、こころぼそくって、ほんとうに辛いのに」

いいんだ、これで。

——こちへた畑電車大社線の終点「出雲大社前」で下車、疲れていたけど休まず、出雲オクニの道を脇目もふらずに突進してオクニの墓へ。

オクニの墓にお参りして、ぼっしどうかあなたの没後のお弟子にしてください。ってお願いすれば、あとはなんとかなる、これが京都を出たときのエツちゃんとおたしの計画。

没後のお弟子の言い方はあたしが考案してエツちゃんに伝え、賛同をうけて、きめた。

四条大橋東詰の北のオクニの銅像に「歌舞伎発祥四〇〇年」で刻んであった。

四〇〇年とは生半なまはんか可な年月じゃない、ジキデシ——直弟子になるのは無理だなと判断したので頭をしぼり、没

後のお弟子 を考案した。

この方法なら、オクニさんが あんたなんか、ダメ！
といって追いかえすわけにはいかないから、彼女が気が
つかないうちに彼女の没後の弟子の座にすわるのは不可
能ではないと計算した。

お師匠さんにたいして無礼なやりかただけど、いまさ
ら坂戸の家にはもどれない切羽つまつたあたしたちの難
関突破作戦なの。
かんとうばさくせん

あ、突破作戦なんて戦争用語、去年まで子供だったあ
たしとエツちゃんが使うのはまちがっているんだろうけ
れど、坂戸のあたしの家では戦争に行った曾祖父さんの
口癖っていつて、誰でも、みんな 難関突破 っていつ
てたの。で、これ、便利な言葉だな と認識したわけ。
センスは愚劣だけど、愚劣と便利の併存は可能とするの
があたしの美意識。

こんな低レベルの美意識しかもてないのがあたしの現
況かとおもえばこころは冷えるけど、エツちゃんが「時
間の薬は口に苦し、だけど、我慢して飲んでれば効果は
かならずある！」と決意表明してくれたので、時間の薬
を飲んで明るいあしたを待ちながら、今日の一日を生き
てる。

出雲のオクニの墓がみえてきた。

「来たね！」

「わりと簡単だった」

「意外にも、ね」

それから十五歩ぐらいちかづいたら、わりと簡単

どころか 意外にも どころか、肝っ玉がキューンと冷
えた。

エツちゃんもたぶん、そう。

「どこから湧いて現れたのかね、この少女たち！」

「五年まえの少女たちもいるよ。恥ずかしさを意識しながらも耐えてるのはたいしたものだけど、これ、勇気じやなくて……」

声をあわせて、

「蛮勇！」
「蛮勇！」

オクニの墓のまわりに多色刷りのチラシ（ピラ）が風に吹かれて飛び散って、お墓の雰囲気は台無し。

チラシのデザインはさまざまだが、少女たちが手にとって見入る様子は単一だ。

ということとは、

「ランラン、みて！」

エツちゃんが束にしてつきだしたチラシの数枚、

「地方予選に勝利して、めざせ、京都へ！」

「勝てば陸路の日和あり、出雲から京都へ……あなたを待つのはオクニの座！」

エツちゃんの呆然の表情に負けじと、あたしもおもいきって大口をあけた。エツちゃんの興奮につきあう手としてはこれが一番。

チラシの文言から推測するに、オクニコンクール出雲地方選抜大会 といったふうの催しらしい。

出雲予選で勝ちぬぎ、全国大会で優勝すると 第 代

イズモオクニ の称号がもらえ、あっちこっちでオクニもどきの踊りを披露してカネをかせぎ、やがては松竹か東宝、でなければ日活の映画に出演、有名男性俳優と結婚して引退、公的年金はないけれど、有名スターとしての蓄えで悠々と生きる筋書どおりの華やかな人生。

オクニに憧れるの、あたしたちだけじゃ、なかった。

有象無象うそうむそうといつては失礼と知ったうえでもうしあげれば、この少女たちがオクニさんの弟子になって天下の芸

能を牛耳うしつかる幻想をもったについては神さまのいたずらどころが多分に作用しているのはまちがいない。

「出雲の神さまって、残酷だな」

「地方の神社へ派遣される一年のうちの十一月は神妙静肅せいじゆにしているけど、出雲へもどる神無月は日ひころの鬱うづ

憤がんを晴らすと、おもいきって残酷の心境になるんだ、

きつと」

「この少女たちは愚劣かもしれないけど、純真なのはまちがいないからねえ。それを残虐行為の対象にして嬉しがるなんて、許せない！」

神さまが人間の言動の善悪を判定するのは神さまの専せん権けんだ。

その神さまの専権行使を、百パーセント人間のあたしとエツちゃんが許せる、許せないなんていえるのか、どうか、疑問だから、発言者はエツちゃんか、あたしか、特定できないように名は隠す。

オクニの墓のまえに、ケチくさい雰囲気ふんきのデスク——
というしかない——があつて、

「オクニ選抜出雲地方区予選 出場申込み受付！」
だとき。

「本籍は埼玉県だから埼玉県予選に出たい、埼玉県予選の受付デスクはどこでしょう？ ってたずねても相手にしてもらえないね、たぶん」

たぶん なんていうのがエツちゃんの、パンダの子供みために愛くるしくもあり、頼りない所以。 所以をユエンで読むのは知ってるけど、なにが、どうなればユエンなのか、もしも坂戸の家と川越の学校にもどったら、まっさきに調べる。

屋台ラーメンみたいな受付のデスクに、若い男がふたり、座っている。

ダメでモトモトのつもりで、

「本籍は埼玉県の坂戸市ですけど、出雲地方区の予選に出られ……ます……ませんよ、ね？」

「エエツ、いやー、よかった。他府県からの応募者はゼ口にきまつてるって親戚そろって反対するものだから、ぼくとしても弱気になっちゃって、デスク疊んで、もう帰ろうかと……」

背の高いほうが、意気消沈を絵にしたような表情でいった。

「そんな、もつたいない！」

背の低いのが背の高いのに同調して、

「いやー、よかった！」

エツちもちゃんも、あたしも、疑問をもった。

ふたりは他府県からの応募者を地元出雲の応募者よりも上質として扱うらしいが、こりゃいったい、どういうわけなんだろう。

こういう場合、ふつうなら、地元関係者が優遇され、よその土地のひとは冷遇とはいかないまでも、余計者あつかいされる。

それが、いま、ここでは逆になっている。なぜなのかな？

——遠慮せず、おもいきって質問したほうがいいんじ

やない？

——そう思うよ、あたしも。

二本の視線がからまって同意し、まず、あたし、

「他府県からの応募者のほうが優秀にきまっている、とか、なんとか？」

「去年までは他府県からの応募者、お断りしていたんです。だからコンクールに優勝するのは出雲の少女ときまっていた」

「それが、ダメ？」

「ダメ、なんです」

「なぜ？」

「優勝するのが目的、優勝すると芸人の修業をやめてしまつて、ただもう、ひたすら、カネ稼ぎ」

「カネ稼ぎ、悪いんですか？」

「カネ稼ぎが悪いとはいいません。ぼくたちも、そもそも目的はカネ稼ぎなんですから」

「ならば……」

「カネ稼ぎだけが目標になったとき、芸のちからは劣化の一途をたどります。となると、旅巡業に出ても客は集まらない、カネは稼げない、客が来ない、の悪循環で一年がすぎる」

「芸の劣化、その原因は出雲で生まれ育ったことにあるんですか？」

「ほかには考えられない」

「出雲出身と芸の劣化、どこで、どういうふうにつながるの？」

あたしの言葉、きつくなった。きつくしようとして自分で計算したからだ。

「他府県のひとにはわからないだろうけど、出雲ではオクニは特別の存在ではない。生まれたときから オクニ、

オクニ って耳に吹きこまれ、感動を体験しないまま育つから、オクニコンクールで入賞しても、どうってことはない」

ふたりの理屈がわかってきた、わかる気分になった。

「とすると、ですね、あたしたちがコンクールに応募すると、入賞できる可能性が高いってことになりましたが、いいんですか、それで？」

いいんですか、それで？ の声はひきつって、へんな調子。

ひきつる は顔の表情の異変を表現する言葉だけでも、いまの、あたしの場合、声の調子の異変表現に使ってもエラーじゃないと思う。

「じつは、ですね……」

背の低いほうが、秘密をうちあけるみたいな深刻な表情で、

「今年のコンクールは中止しようかと、たったいま、思いついたんです」

「おれも、そう。たったいま、思いついた」

「中止して、そのあとは？」

「おふたりにオクニになってもらいます」

「コンクールに出ないのに、オクニになれる、ん、ですか？」

「なれますよ、シンプルそのもの」

これはふたり同時。

背の高いほうが、

「選ぶんじゃないくて、ぼく……あ、ぼくは成瀬タツンド、タツンドはリュウのヒトって書きます。リュウのヒトなんてアイルランドのウィスキーに餅菓子みたいな取り合わせだけど、奇妙な名だからこそ親には感謝すべきじゃないかなと」

背の低いほうは、

「今川です、今川泰彦。タツンドくんにくらべると面白くもなんともない、印象も弱い、平凡そのもの」

「イマガワさん?!」

エツちゃんの驚愕の声、なんとまあ、色っぽい!

「今川ですが、それが、なにか?」

あたしだって、そういいたい。

「お気の毒に」

「はあ?」

「だって、駿河の今川義元よしもとの末裔おひはなんでしょう、桶狭間まで織田信長に殺された」

「そんな噂があるんだって、去年死んだおじいさん、いつてましたけど、両親もぼくも、気にしない」

「いつも、どこも、そうなのよねー」

「らしい、ですね」

「ここにおじいさんがいれば、というときになると、きまって、おじいさん、去年死んじゃった、ていうふうの話の筋が行き止まるの。ほんと、偶然」

「はあ?」

エツちゃんの天然素てんねんすつとんきようつ頓狂とんきやうに付き合いきれなくて息が

苦しいのはあたしだけじゃ、ない。

今川泰彦さんも、閉口して横むいた。

タツンドさんはどうなのか、いまのところ、判断できない。

「つまり、ですね……」

ふたりの自己紹介で中断したオクニコンクールのドラマを、龍人が再開する。

「選ぶんじゃなくて、ぼくと今川くんが、おふたりをオクニに指名する、これで完璧」

晴々と胸を張る龍人につづいて、今川泰彦が、

「あのー、まさか、お断りになるとか……」

「と、と、と、とんでもない、断るなんて」

エツちゃんとあたし、こういういきさつでイズモノオクニの没後に弟子になっちゃった。

龍人と今川は「オクニコンクールは中止！」の張紙を地面に置いて重石をのせ、折り畳みのデスクをばたばたと片づけ、エツちゃんとあたしと四人でオクニの墓の裏、海辺にむかう。

大社に縁のあるひとたちが経営している民宿、安くて安全だと今川さん、タツンドさんが紹介してくれたから、きめた。

みちすがら——ああ、そうかつ、こういう状況描写で使うんだ、みちすがら、エレガント、いい感じの言葉だな——四人の会談または検討がはじまる。

出雲大社関係のグッズ製造販売会社を、なんの予告もなしに解雇された今川さんがせめてもの救済をもとめて大社に参詣した。

グッズ会社と大社の神々とは直接の関係はないにしても、苦境に落とされた地元の住民の恨みと願いに、まさか出雲の神々が耳を貸さぬはずはない。

だが、神在月の出雲の神々は今川さんの訴えに耳を貸さなかった。

「訴えがとどけば、神さまが鈴を鳴らすんです、爽やかさわに、やさしく、サラサラッと鳴らすんです。第三者にはきこえないが、本人にはきこえる」

だが、今川さんの場合、神は鈴を鳴らしてくれなかった。

これは、今川さんがグッズ会社から雇用打ち切りを宣

告されたときの精神の苦痛の何倍も強烈な苦痛、そのうえに不安も加わっていたそうだ。

「となりにはいたばくでさえ、今川さんの精神的苦境はわかりました」

「どうなふうに？」

「今川さんのからだの震えが、地面を通じて伝わった」
わかりやすい。

「ていうことは、タツンドさんも……？」

「柔道の練習で倒され、かすり傷、手当てをしないで放つておいたら化膿した」

大社にお参りして傷や病気をなおしてもらうのは出雲のひとなら、だれでもやること。

「手遅れだった。外科で切開してもらったけど、治るまでに時間がかかった」

「でも、直ったんでしょ」

「そのあいだに県の予選が終わってしまい、出られるはずの全国大会に出られなかった」

大社の神さまに恨みをいおうと参詣して、解雇の苦境のどん底の今川泰彦と隣あわせの出会い。

「神さまも大変ね。願いやら、恨みやら、いろんなひとが、いろんなことをいってくるんだもの！」

「あなたに同情する女子中学生がいますよと知らせてやったら、神さま、大喜びだな」

今川と成瀬、おなじようなことをいって笑い、「おやすみ」と挨拶して消えた。

大社ゆかりの民宿の名は「サンザ」だって。

「サンザ、って、字に書けば……？」

受付と風呂を沸かす薪を割るのと外に出て客を呼び込

む三役を兼任するおじさん、黙って天井の欄間を指さし

た。

筆太ひでびとの字で「名古屋山三郎」と書いた額がかかってい

て、その下に「ナント力登録証」、赤い判子はんこがバーンと

捺おしてある。

「名古屋ヤマサプロウ……それがサンザと、どんな関係に？」

「富士山のサンとおなじだからサンザプロウ、終りのロウは邪魔だから削ってサンザ」

民宿としてその筋にとどけた名称は「名古屋山三郎」だが、略称として「サンザ」を認めてもらったんだそう
だ。

このあとに「文句、あるか！」が付くとヤクザ言葉だけど、おじさん、なにも付けず、ぶすつと、

「サンザが気に入らなければお泊まりにならなくてもよろしいのです」

家出の女子中学生と知ってか、知らずか、やさしい脅迫のような、強烈な遠慮のような言い方とともに、おじさんはノートを差し出した。

民宿の受付にノートが、なんで？

おなじ想いのエッチャンがおなじ表情であたしを凝視する。鏡の裏表だ。

おなじ境遇に置かれるとおなじ反応しかできないのは、あたしたちふたりが性格の自主性を獲得していないからだな、たぶん。

「宿帳やうちょうへ、どうぞ」

おじさん、つけ加えて、

「宿泊者名簿っていうんだけど、メイボは奥ゆかしくないから、宿帳と呼びます。わたしの趣味」

メイボをどう理解するかで、エツちゃんとあたしの相違が出た。

彼女が口をあけようとした、その口のかたちが「メ」を発音するつもりなのは一目瞭然だから、掌をさーっと出して口を塞ぎ、言葉が出ないようにしてから、

メイボなんて、イヤ。被害者メイボ、容疑者メイボ、選挙人メイボ、みーんな面白くないもん！

宿帳に名前を書いてサンザに泊まる契約をかわし、階段を二度あがって三階の部屋へゆく廊下で、エツちゃん、「メイボってきいて、あたしが、まぶた 瞼の裏にイボイボができる眼疣めいぼだと誤解したのを、ランラン、とつ 咄嗟にわかったんでしょ、あいかわらず早い！」

「相手がエツちゃんだからね。親友でなければ、ああいつぶうに素早くは反応できないものよ」

あたし、エツちゃんの親友であることを確認した嬉しさで、うく 瞼の裏が蕩けてきた。

サンザの朝食は熱くておいしい味噌汁と、か 掻き混ぜて醤油と芥子からしときざみネギで味付けした納豆をのせたトースト、青いトマトの味噌漬けのザク切り、真っ白くないご飯、テーブルに並べて、

「ヘンな具合の取り合わせですが、趣味なんです」

おじさん、自分で自分のユウモア——のつもり——を楽しむ自愛の快感を隠せない。

「キメは真っ白くないご飯。これ、なにか、わかりますか？」

「ご飯だっことは……」

「胚芽米はいがまいです。胚芽米がわからないのは年齢のせい。あなたもたのひいじいさん、ひいばあさんは白米渴望信仰の真っ只中でそだちました。白米のご飯を食べられれば死んでもいい、これが白米渴望信仰、胃袋の芯まで染み込んだから、あなたのじいさん、ばあさんの世代はもちろん、とうさん、かあさんも脱出できない。そこでエ……

「！」
おじさんの声、とつぜん絶叫になる。

当然の反応として、エッちゃとあたし、顔を見合わせる。困ったね、どうしたんだろ、おじさん の当惑の顔合わせにすぎないのに、おじさん、誤解したのはまちがいない。

「こりゃ、悪かった。自己紹介もせずに白米渴望信仰のテーマを持ち出して、ごめん、ごめん、悪意はないんです……わたくし、成瀬トランド、トランドは阪神タイガースの 虎 に巨人ジャインツの人、お客さまに民宿サンザを紹介した……はずの……成瀬タツンドはわたしの息子です」

「たぶん、こういうふうな展開になるんじゃないかって、あたしたち、予想していたんじゃない？」

「まあ、こうなってみれば、ね」
音には出せない打ち合わせの、ふかーい衝撃。

胸が停まりそうな気がしたほどの衝撃だから、溜息つくひまもなかった。

自己紹介は済んだ、 さあ、いよいよ本番 の意気込みでトランドおじさんは白米渴望信仰の歴史と現状について滔々うたかたと演説をはじめ。

長くなるのは予想されたから、自分で自分の頭に 要
点だけ記憶すればいいんだよ と指示しておいて、お説
拝聴の構え。

① 食料としてのコメの本来の姿、理想のかたちのコ
メは胚芽精米である。栄養たっぷりの胚芽精米の状
態で食べるからこそ人間の肉となり骨となる。胚芽
精米の胚芽はたっぷりのビタミンBをふくんている
が、白米にはふくまれていてないから、白米多食の
ひとは脚気かうけになる恐れがある。

② 白米は清酒を醸造する原料として登場した。玄米
の表面には糠ひびがあり、この糠から酸素が侵入して酒
の味を悪くする。そこで精米機を使い、コメの種皮
・外胚乳・膠質層・胚を除去し、ツルツル真っ白の
水晶状態の米粒の芯で醸造すると上質の清酒ができ
る」

「はーい」

元気な声の主は誰かと左をみたら、エッちゃんが手を
あげている。理科の授業、脳に名答が浮かんだから、忘
れないうちに教師に告げてポイントを稼ぐチャンスに見
立てているみたい。

「おおっ、土佐林くん！」

指一本をピョンと立ててやさしく生徒を指名する癖の
理科の教師をおもいだした。

忘れていたけど、エッちゃんの苗字は土佐林、あたし

はなんの変哲へんてつもない竹田、つまらない。

「そうすると、成瀬先生、白米には栄養が少ないんです

か？」

「そのとおり！」

トランド先生、ますます上機嫌。

「ならば、白米はぜんぶ酒の原料にまわして、人間は玄米を食べるべきなんですな」

「玄米は理想的とはいえない。表面の又力の脂肪が消化をさまたげるから」

「でも……」

ここまでではトランド先生と土佐林エツちゃんの二人舞台、ここであたしが「でも……」を投げ入れたからようやく三人舞台になった。

「胚芽はいがせいまい精米がいいんだ。又力は取って胚芽を残すのが胚芽精米。胚芽こそ種子植物の生命のはじまるポイントだから」

「ハイガセイマイって、きいたこと……」

「ないだろ。なぜかっていうとね……」

成瀬さん、舌の先で唇をぬらし、

「玄米を搗精とっせいして白米にするには精米機を高速で回転すればいい、ガガーツとね。電力消費も少ない。だけど胚芽米をつくるには精米機をゆっくり、しかも強力に回転させなければならぬ。こっちは電力消費が多い。戦前はね、ああ、戦前って知ってる？」

こういうところ、いかにも教師そのもののトランドおじさん。

「昭和二十年八月十五日が敗戦なのは知ってる、ここからあとが戦後なんだ。開戦までが戦前なわけだけど、はじまったの、いつだったかなあ？」

あたしの いつだったかなあ？ の語尾がおわらないうちに、エツちゃん、

「昭和十六年十二月八日」

「まあ、そんなに厳密でなくてもいいんだけどね、戦前は胚芽米、けっこう食っていた。戦争がはじまるとそうはいかない、軍事関係の産業に電力をまわさなくてはならないからね。少電力で可能な白米精米をやっているうちに敗戦、戦中にはその白米でさえ貴重品になってしまったから白米渴望信仰がはじまり、いまになっても銀シャリなんて、まあ、懐古趣味も手伝ってはいるが、文化や政治が悪くても白米さえあればいいじゃないかといった雰囲気」

拝聴するのに疲れて、座が白けたのは少女のあたしにもわかる。

すると、トランドおじさん、

「もう一杯、いかが、胚芽精米」

「いただきまーす」

ふたり揃って差し出したお茶碗に、おじさんが丁寧によそってくれた胚芽精米、噛めば噛むほど味が出て、ほんと、おいしい！

二杯の胚芽精米ゴハンで元気がもどって、エッちゃんよりあたしが先に気がついた。

「どうする、今日の予定？」

「予定……なんの予定？」

「成瀬タツンドさんと今川泰彦さんのオクニコンクール予選会、忘れちゃったのオ？」

おじさんが割り込む。

「タツンドはわたしの息子、今川くんともふるい知り合いです。オクニコンクールなんて奇妙な興行に引き込まれて心配ではあるが、まあ、悪いようにはならんでしょう。おひまなら、付き合っちゃってくれませんか」

「ひまといえは……」

「朝から晩までひまで詰まってるんです」

「おひまと伺ったからぶちあけますが、オクニコンクールを誼うたい文句にして出雲―京都四条大橋東詰往復のツアー客を募集する、それだけのことなんです。ええ、ただの旅行の企画」

ダダダツと下品な騒音まじりに灰色の物体、とおもったら物体どころか、人間の成人男性ふたりの民宿サンザへちんにゅう闖入事件のはじまりだ。

「四条大橋！」

「事業の名称、きちんと登録したのか！」

トランドおじさんがゆっくり対応する。

「事業とか、名称とか、登録とか法律の用語を羅列するまえに、このガラス戸を……」

たちあがり、ガラス戸をがらごと引いて開けて体勢を逆転、

「トントンとたた叩いて入室許可をもらうサインなど試みては如何なものですかな」

顔を見あわせたふたり、険しい顔つきから柔和な感じに変わっていた。

「こりゃ、まずい。ぼくたちは出直すべきだ。このままではただの乱暴者、おろかもので生涯が終る」

「わが同志の海原五三郎、たまにやいいこと、おっしやいますな」

「いいことなら御手の物、日常茶飯事。巨理勇一郎よ、みくびつてもらうまい」

ガラス戸をあけて出て、ガラス戸を閉め、体勢逆転し

てガラス戸をあけて敷居を跨いで入室したから、室内の三人——数字に間違いはないだろうな——吹き出した。

「いやあ、まさにお出直しになられましたなア！」

「出直しというか、はいり直しというか。こういう冗談、大好きなんです。冗談好きが嵩じてとんでもない失敗をやるのも日に一度か二度、でなければ食前食後」

「ぼくたち、分裂の片割れなんです」

「京都ラビットクラブの総務部職員だったんだけど、四条大橋東詰の南における逆転事業の展開をめぐって見解の相違から分裂、ぼくたち二名が少数派、ぼくは海原五三郎、冗談好きとしてのセンスはぼくに及ばないが、決して低級ではないこいつが亘理勇一郎」

亘理がひきついで、

「分裂のいきさつにちなんで、ぼたくち片割れのグループ名称をサンザとしました」

「サンザあ……！」

エツちゃん、ランラン、おじさんの三人は口あんぐり、欄間らんまの下に貼られた民宿営業許可証——ていうんだろうな——を見上げる。

「ええ、いいんです、わかってるんです」

「インターネット検索エンジンのグルグルを イズモノ オクニ 民宿 をキーワードにして弄いじっていたらピインとヒットしたんです、民宿サンザに」
「すごいものですよ、グルグルの検索能力」

(第3章・終)

民宿サンザで出合った五人、たがいに自己紹介——竹田蘭子と土佐林悦子、サンザの経営者で支配人の成瀬虎人、京都ラビットクラブ総務部の分派の海原五三郎と巨理勇一郎。

いちばん簡単でわかりやすいのは蘭子と悦子の自己紹介。ある日ある時、とつぜん家出したくなって家出てきたいきさつは明瞭で簡単、疑問は出ない。中学生と家出願望の組合せ、これほど自然なものはない。

成瀬虎人の自己紹介、これもわかりにくいものではない。蘭子と悦子には熱を入れて披露した胚芽精米論の部分を省略し、「この民宿サンザをやってる成瀬虎人」といっただけ。

海原と巨理は新入りだから、説明と理解に手間がかかる。

京都の洛中ライオンズクラブの誕生と重厚な存在感から説きおこし、洛中ライオンズクラブが四条大橋東詰の北にイズモノオクニの銅像を建てたのが評判になって、後発のラビットクラブのメンバー全員は口惜しくて仕方がないと、ここまで自己紹介がすすんだところで悦子が立ちあがり、

「あ、あ、あ、あたしにいわせて！」

「待ってください。ようやく巨理とぼくの自己紹介の番になったんだ、邪魔しないで！」

守る海原より攻める悦子の威勢が強い。グイッと一歩を踏みこみ、海原が怯むひるその隙に、

「名前は知らないけど、厚くて固い革底が自慢の鼠色の革靴、ズルズルツて冴えない音をたてて歩くおじさん、あんたたちの、その、ウサギクラブの職員じゃないかし

ら？」

「ウサギ、クラブ？」

「ウサギクラブ、あ、ちがった、ラビットクラブ」

「でも、ラビットはウサギでしょ、エッチャンはまちがってはいない」

助け船を出したのは竹田蘭子、救済の方法はストレートじゃないが、あたしのエッチャンを苛めたらタダじやすまないんだからねッ の意気を込めた熱い湯気があがっている。

「革底の固い鼠色の革靴で、ズルズルって冴えない音……だれだろうな？」

思案に耽る巨理のポーズは首を傾げるだけの、シンブルタイプ。

海原の思案のポーズは両目を瞑って、低音で唸る念入りのタイプ。

「ハシモト、じゃないかな、たぶん」

「ハシモト……ああ、土佐林さん、その男、ズボンに豎にまっすぐアイロンの折目つけてませんでしたか？」

「ズボンで、あたしたちならパンツっていう、あれのこと？」

「そう、そのパン……」

「冴えないのは革靴だけじゃない、アイロンの折目つけたパンツのせいでもある。そう、海原さん、その橋本さんですよ。下の名前は？」

「橋本ヒサシ、ヒサシはカタカナ」

「四条大橋東詰で、あたしたち、イズモノオクニの銅像をみあげ、感動と衝撃で呆然としていた。そこへ現れた橋本さん、イズモノオクニの何たるかを丁寧に教えてくれた結果として、あたしたちふたり、いま、ここにこう

してるの」

「そうなんです。橋本さんにお会いになったら、竹田蘭子と土佐林悦子が 四条大橋東詰の北、オクニの銅像の前でオクニの何たるかを教えていただき、ありがとうございます」といつてたとお伝えください。ついでに、あたしたちはいま出雲のオクニの墓のそば、民宿サンザにいと付け加えてもらってもいいんです」

「えー、それは、まあ」

梅原が口ごもったのは、橋本ヒサシと喧嘩し、たがいに分派となつたいま、ふたたび橋本に会うチャンスがあるか、どうか、わからないからだ。

橋本に会わずに済むのはむしろありがたいが、竹田蘭子と土佐林悦子、すこぶる快活、気つぷのいいふたりの女子中学生と昵懇昵懇の関係になりそうな状況を橋本に知らせて自慢するチャンスを失うのはもつたいない。

自己紹介が済むと、どういうわけか、五人そろって手持ち無沙汰になった。

このままじいーつとしてるわけにもいかないし、いつて、なにを、どうすればこの閉塞状況を破れるのか、見当がつかない。五人が五人、おなじ姿勢で自分の足元をみている。

「おかしい、なー」

「そういえば、あたしも」

悦子がいつて蘭子がつづき、

「あの一、よろしい、でしようか？」

オズオズを絵に描いた音調で口を挟んだ亘理勇一郎、オズオズながらも、ことによると閉塞の状況を一步は前にすすめるのじゃないかと期待を持たせる一言。

「おかしな雰囲気になったのは、ぼくら二名が、どういつ次第、いきさつで京都からここ、出雲に来たのか、そ

れを説明してないからじゃないでしょうか？」

「あっ、そうか！」は蘭子、「でもね」は悦子、「どうして、なぜ、説明しなかったの？」と詰問する。

「そういえば、なあ、巨理よ」

「はあ？」

ラビットクラブの総務部員としての地位は海原が上、巨理が下であるのがわかる。多数主流派との対立抗争に敗れ、少数派に転落して出雲に流れてきたいま、上だ下だといったところで、なんにもならないだろうが。

「おれも、おまえも、説明しないぞって決意していたわけじゃない、な」

「わけじゃ、ない。説明したいのに説明させてもらえなかった、そんな感じ」

「わかった！」

叫んだのは悦子。

「過去のいきさつにこだわっちゃ、ダメ、そうだよね、

蘭子

「エツちゃんのいうとおり。だから、ねえ、海原さん、いいたいこと、さっさと、しかもあっさり、説明してくれませんか。そうじゃないと、このドラマ、行詰まっちゃうもの」

海原と巨理、顔を見合わせ、決意した。決意のしるしだろう、海原が唇を舌で濡らしたのは。

「ドラマが行詰まれば、わたしたち全員、息詰まって窒息しますね。それじゃ困るから」

前置きして、海原が説明をはじめ。

「先斗町KOBANの北隣、料理屋のいづもやです。いづもやの広告看板ていうか、照明広告ていうか」

「なに、それ？」

「看板の いづもや に気づいて、目を離せなくなったんです。しょうがないから見詰めるうちにモヤモヤと興奮してきて……」

「興奮の気分を モヤモヤ と表現しますか？」

「興奮なら カーツ でしょ」

「お嬢さま、邪魔しないで、どうか、お願いだ！」

「しまった、ごめん！」

悦子と蘭子が口を塞いだのをひきとって、海原、

「興奮して、決意したんです、われら二名を出雲に呼び寄せる出雲の神さまの命令、そのしるしが鴨川の四条大橋東詰の対岸、西詰の いづもや の看板なんだ、こりや行かざるまい、と」

行かざるまい、の部分を海原はフン・ウーフフフと民謡「会津磐梯山」のメロディーの鼻唄に置き換えた。民謡「会津磐梯山」は「フン・ウーフフフ、エーまたア、顔見せに」とつづくが、いま、つづきは要らない。

「ウナバラさん……」

亘理が小声でいい、海原の袖を引く。

フン、なに？ と顔を寄せた海原に亘理が、他人はきこえない小声でささやき返した。

きこえないはずの亘理のささやきを無理矢理に文字に変換すると、

「念のためにと確認した、あの件についても忘れずに説明して」

「あの件？ そうだ、あれを忘れちゃいかん」

照れくさそうに頭を掻いて、

「決意を実行に移そうとした、その瞬間」と海原、

「フツと疑問が湧いたのです」と亘理、

「海原さんと亘理さんは疑問を感じたかもしれないけれど、あたしたち、いままでのところ、なんの疑問も湧かないんだけどな」

「いいんです、放つといてください、疑問が湧いたのはこっちなんですから」

海原は焦燥を隠せない。行詰まらないうちに息詰まる恐怖の予感がある。

「東詰北のイズモオクニの像の ひがしつづめきた イズモ と西詰北の料

理屋 いづもや がおなじなら、これはめでたい万々歳」「万々歳、なぜ？」

「イズモノオクニ銅像で イチ、料理屋いづもやで ニイ、イチ、ニイと飛んで サーン で出雲国に着地して、オクニを超越する歴史上の人物を発見できる可能性が強くなるわけです」

「歴史上の人物と出雲の関係についての理屈が、よく理解できないんですけど……」

「オクニは歴史上の人物、そのオクニを産んだ出雲国には、なんとというか、偉大で有名な歴史上の人物を量産する能力があるのではないか……ここまでが理屈で、この先に……ならばオクニ以外の偉大な存在を産んでいないはずはないのに、知られていない。埋もれているから知られていないんだらう。埋もれた偉大な存在を発見し、オクニに匹敵、いや、オクニを超越する存在に仕立てあげ、その銅像を四条大橋東詰の南に建立する。ね、これでラビットクラブが洛中ライオンズクラブの上位に立つ逆転事業は大成功のうちに終了して、と展望がひらけます！」

「面白くないわけでもない、エッちゃん、そうだね」

「悪くはない、その程度かな」

悦子と蘭子の消極的な賛同にもかかわらず、「それがダメになっちゃって」と海原が肩を落として告白する。

「なぜダメになったのかというと、イズモと いうも、もしかすると違うんじゃないかと疑問が湧いたのです」

「疑問なんか発生するはずのない場面だがな」

最年長にふさわしい成瀬虎人の口調、しかし、説得力はない。

「イズモ の ス と いづもの づ、発音はおなじだが、字に書くとあきらかにちがう、この矛盾をどうするかと」

ここで説明役が亘理から海原に代わって、

「字がちがえば、字によって表現される実体あるいは実態もちがうんじゃないかと」

ややっこしく、しかも陰鬱いんうつな空気。

陰鬱を救ったのは悦子だ。

さすがというべきだが、当人にはアヤフヤな思いつきを堂々たる見解だと誤信して唐突に表明する性格の癖がある、油断はできない。

「ランランはおぼえていないの？ オクニの銅像の台座の出雲 に読み仮名が振ってあったか、どうか」

「おぼえて、いない」

「ランランがおぼえていないなら、あたしもそうだ、おぼえていない。橋本ヒサシさんの説明は文字じゃなくて音声だったからね」

陰鬱の空気がますます濃厚になったのが感じられたとき、

「いいでしょうか、発言して？」

口をひらき、挙手したのは亘理、

「台座の下のほうに、英語というか、アルファベットと
いうか、説明があるんですよ。エツちゃん、あ、失礼、
土佐林さんも竹田さんも気がつきませんでしたか？」
「ヒヤー、知らなかった！」

「英文では、なんと？」

「I—D—U—M—O」

「DUならば、ズ、ズ、ズ、じゃない」

「とすると……」

爛漫らんまんと違って間違いではないが、爛漫よりは放漫に近
い性格の悦子でさえ、クシユーンとなって下ばかり向い
ている。

蘭子が勇気を奮ふるうしかない。

「エツちゃん、苦しいだろうけれど、しっかりしてちょ
うだい。四条大橋東詰の北で橋本ヒサシさんから、これ
はイズモノオクニの銅像、ときいたとき、あたしたちが
連想したのは、ズ、だったのか、ズ、だったのか、そ
れがわかると、みなさんの苦しみを和やわらげてあげられる
んだけど、どう？」

悦子、ワーツと泣きだす。

「イズモ、でも、いづも、でも、どっちでもかまわな
い、これでどうですか？」

成瀬が智慧を出した。

「海原さんと亘理さんが出雲国めざして行動を起こすに
支障はないわけだから」

「それは、そうなんだけど、ズ、ズ、ズ、になったの
か、その反対の順序なのか、区別を知っているほうが、
なんというか、とりあえずの行動のパワーがつくとかん

がえたので……」

「あ、そりゃ簡単、はっきりしてますよ。国名の出雲は雲が出る国いづもの意味だろうから 出雲—いづも だった

た。それが昭和二十一年の改正仮名遣かいていかなづかいで 出雲—イヌモとなつた。間違つていたのを正しくしたわけではないんだから、どちらもおなじ、どちらも正しい、つまり、どっちでもかまわない。四条大橋東詰の北のオクニ銅像……わたしはまだ拝見していないんだが……の英文説明は旧制仮名遣のルールに準じたのであり、正しい、正しくないとは次元が別」

「アア—ッ」とメモ用紙を千切つて天井に放りあげたのが亘理、

「あるとき、それ、知ってれば、なあ！」と右足のスニーカーを脱いで左足で蹴りあげたのは海原。

「それで、じつさいは、どうしたの、おふたりは？」

「壬生川仏光寺、ラビットクラブの事務所に飛んでもどつたのですよ！」

「なんの、ために？」

「『広辞苑』で確かめよう」と……」

あれは何時いつのことであつたか、京都の壬生川仏光寺のラビットクラブで起つた『広辞苑』をめぐる騒動を体験したのは海原と亘理の二名だけ、ほかは知らないから、よかつた。

海原と亘理のほかに騒動を体験または見聞したひとがいるとドラマの筋書は途方もない方角に曲がるおそれがあつたが、海原と亘理のほかの体験者も見聞者もないから、よかつた。

「『広辞苑』ていうの、知らないけど、それでどうした

の、調べた結果は？」

「片仮名の イズモ の索引項目はなく、平仮名の いずも で引いたら漢字の「出雲」が出てきて、イツモと注釈が付いていました。旧仮名遣なら イツモ だと教える注釈なんでしょう」

「それで、よかつたんでしょ？」

「よかつたというか、よくはないというか……」

「ラビットクラブって、ゴツチャゴツチャして、ぜんぜんはつきりしないクラブなのね！」

「いや、はつきりと決定は出たんです、総務部の五人全員で出雲に、いや、イズモに、じゃあなかった、いづもに…… あーあ、漢字とカナが使えればぜんぜん困らないのになあ…… 出張し、オクニの生涯を追体験してオクニを超越する歴史上の人物を発見し、四条大橋東詰の南にその人物の銅像を建てて人気をとり、大評判になり、ラビットクラブがライオンズクラブを乗り越えてすべてのクラブ組織の頂点に位置を占める企画が確定したのです」

「海原さんが 確定したのです…… の先をいえないのはつまり、確定したけど実行できなかったからでしょ？」

「そのとおり」

「どうして？」

決定し、岩本カヨコが出張旅費の仮払伝票を書いて部長のデスクに載せ、許可印をもらう手続をしたまではよかったが、そのあとでモメた。

「岸本くん」

「はい」

「念のためにきくが、イズモノオクニの生涯追体験のために出雲に出張の イズモ は イスモ の ス に濁

点、これでいいんだね？」

「『広辞苑』によれば イズモ も いづも もおなじ
だそうですから、わたしの音感と字面の好みで イズモ
を選ばせていただきました」

「AかBか、二者択一となれば個人の好みにしたがつて
よろしい、フンフン」

鼻唄気分で部長が判を押そうとした、そのとき、

「ぼくの好みは違う、 いづも にしてくれ！」

「なにを阿呆なこと、いっとるか。新仮名遣のルールに
したがうべきだ！」

あとは、ただもう、メツチャクチャ。

殴り合いにはならないが、部屋に罵詈雑言が溢れ、息
詰まり寸前の部長が総務部室を這い出したあとで判明し
たのは、海原と亘理が イズモ 派、橋本・糸川・新門
・久次米の四人が いづも 派、岩本カヨは単独でそ
んなこと、あたしの知ったこっちゃない 派を宣言し、
分裂の状況になった深刻と滑稽のゴツチャマゼになった
と知らされた成瀬、

「海原さんと亘理さんはこうして、いま、出雲に……こ
の部分、音声じゃなく、漢字で認識してくださいよ……
いらっしやるわけだが、ほかのご四人、いまごろは、は
んひつつあん、どこにどうして、いざらぶぞ？」

浄瑠璃「艶容女舞衣」の、通称「酒屋」の段のお園の
悲痛なセリフで盛りあげる。

「どうしてるんだろつ、なあ、あいつら」

悪意があつての分裂抗争ではないが、と行って、原因
がなにか、当人でさえわからないトラブルの結果だけに
解決の手がないのが苦しい。

「それは、まあ、ひとまず置くとして、出かけましょ
よ、京都へ」

成瀬が提案した。

悦子と蘭子、パーツと立ちあがって抱き合い、蘭子が
絶叫。

「やったねッ。これで四条河原の全国決勝戦に出られる
んだ！」

歓喜の興奮も束の間、一瞬の間を置いて悦子がしょん
ぼり、

「でもさあ、京都へ行くオカネ、ないんじゃない？」

「オカネの問題を解決しなくっちゃならないんだ。アア、
モウ、あたしこのごろユウウツだわ！」

イチ、ニイ、サンと声には出さず、無言のまま拍子
をあわせて頂垂れる。

人生の拍子が合っているから、打ち合わせもせずに頂
垂れても拍子ひょうしつ外ずはれにならないのがなおさら悲しい。

「カネのことが気になるのはエライ。若いひとは カネ
を気にするのは野暮やぼだ なんていつて意地を張るものだ
けど、そりやまちがい。カネを軽蔑すると、いつかかな
らずカネに縛られる」

歳にふさわしい——六十歳のちよつと前かな——説経
をしておいて、成瀬が、

「おふたりはオクニの没後の弟子だから、京都ゆきの費
用はわれわれが負担します」

「そうかつ、ウラがあるんだ！」

「ウラがあるのは大人の世界」

「っていうことは、あたしたち、大人あつかいされてい
るんだ」

「嬉しい！ なにが嬉しいって、こんなに嬉しいの、はじめて」

蘭子は自分の左右の頬をてのひらでペタペタ叩き、口がうまく動かないから十分な感謝の言葉をいえないのよ、それが口惜しい焦れたいの表情たつぷり。

「旅費は主催者の負担といましたがね……」

「はあ……」

「もともと旅費はタダなんです。だから、なんといえばいいか……」

「旅費はタダって、いうのは？」

「歩いてゆきます、京都まで」

成瀬の説明によると、蘭子と悦子は歌って踊ってカネを稼ぎながら京都にゆく、だから旅費は不要、つまりタダである。

「ということ、あたしたちははじめからイズモノオクニとして唄って踊って出雲から京都へゆくのですか？」

成瀬はウンウンとうなずく。

悦子と蘭子は立ちあがり、左手を上挙げ、右手を腰の位置に置いて、キリリツとポーズをきめた。

「それだつ。悦子さん！」

「そつくり、イズモノオクニ！ 蘭子さん！」

「亘理さん、悦子さんのあの左手は、なにか持ってるつもりなんだろう？」

「太刀ですよ。ひとを斬る太刀に見立てているわけじゃないが、男のサムライの持物の太刀を女が握ってキリリツとポーズをきめる、それが四条大橋東詰の北の洛中ライオンズクラブのオクニの銅像なんです。スサノオノミコトがヤマタノオロチの尾を切り裂いて取り出したクサナギノツルギかもしれない」

「何番目のクサナギノツルギ？」

「エッちゃん、なにいつてるの、クサナギノツルギの何番目、なんて」

蘭子が生来の率直な性格そのものの質問を發した。親友の悦子をかからかって自分ひとりの快感をむさぶろう、なんていうわけじゃない。

「だってね、ヤマタノオロチって股が八つで尾が八本、だから名前がヤマタノオロチ、八本の尾のすべてに太刀が隠されていたとするとクサナギノツルギも八本なければ数が合わない」

「ナルセさん！」

家出女学生の竹田蘭子に抱きつかれ、六十ちかい男の成瀬虎人、大迷惑の段。

「あたしのエッちゃん、こんなふうになっちゃって……」

あたし、エッちゃんのお母さんに合わせる顔がない！」
成瀬の風情に魅力に抗しがたい魅力を感じて、蘭子は抱きついたわけじゃない。連発される悦子の聡明に圧倒され、逃げ場を失って成瀬に助けをもとめたのだ。

「いいんだよ、ランランちゃん。イチをきいてジユウを識^しるっていうのは、まさにエッちゃんのようなタイプの女性を賞賛する言葉だ。あんたはエッちゃんの親友であるのを自慢すればいい。近いうちに、あんたは竹田蘭子の人生の方角を識るようになる。それはまたエッちゃんとの別れの時でもあるからハラワタが千切れるほど辛いけれど、避けちゃ、ダメだよ」

それから成瀬は悦子の正面に向い、

「クサナギノツルギはスサノオノミコトからアマテラスオオミカミに献上されて天皇家の三種の神器のひとつとなる。天皇家の歴史とクサナギノツルギの縁はじつになんとも不思議でね、たとえば、戦争なんかで行方不明になったはずのクサナギが、突然、何の説明なしに現れる

ことがある。神秘で神聖な剣だからそれでよろしいとする解釈もあるんだが、エツちゃんの理論のように八本の尾から一本ずつ、合計八本のクサナギが取りだされたとかんがえれば矛盾はない。三百年に一本のペースで行方不明になると仮定しても、八本ぜんぶがなくなるまでには二千四百年も時間がある」

「いまのクサナギは何本目なのか、なんてかんがえるだけでも楽しくなりますよね、成瀬さん」

「エツちゃん、そこなくっちゃ！」

悦子を「エツちゃん」なんて呼んで成瀬虎人、親近感にちからづけられてか、

「そうだッ」

悦子の肩に右手を置いて、

「オクニが京都に出たのは戦国時代とされているが、ほんとうは、もともともと古いこと、神話の時代にさかのぼるんじゃないかな！」

「オクニが神話時代に？ 女王ヒミコのまちがいじゃないの」

「オクニでもかまわないじゃないか。出雲のヤマタノオオロチの尾から出たクサナギノツルギを持って九州が大和に行き、王国をつくって女王ヒミコと名を変えた」

「出来すぎた話だけど、面白さはじゅうぶん」

蘭子が顔いっぱい笑ったのが伝染し、なんともいえない楽しい雰囲気。民宿サンザ。

「オクニさんの左手は太刀を懸^{かぶ}し、右手は扇。ああ、そうだ、四条大橋東詰のオクニの胸のあいだに、なにか、こう、キラキラと輝いているものがみえたんだけど、なんだらう？」

「胸のあいだなら、キリスト教のクルス、つまり十字だろうな」と成瀬。

まだみたことはないオクニの像の胸の輝きはクルスだと言いつたのは成瀬の深い教養。

「そうか、あれはクルスだったのか。だからといって成瀬さん、オクニがキリスト教徒だったわけでもないんでしょ？」

「ひとむかしまえの輝かしい時代にたいする哀惜のシンボル、そういうものじゃないかな」

「オクニの時代、キリスト教は厳禁されていた、んでしょ？」

「すでに厳禁」

「なのにクルスなんかみせびらかして……危険じゃないの？」

「キリスト教は厳禁だけど、身の飾り、アクセサリーとしてなら許さんでもないということじゃないかな。オクニが来たぞ、カブキ踊りが観られるぞ！となればカネは動く、景気は明るく雇用は盛ん、弾圧を弛めても権力の損にはならない」

「権力とオクニ、それが、どういふふう……？」

海原五三郎の口調には、成瀬の見解は無視ないしは否定すべきだが、いきなり無視または否定すると成瀬の原則提示が理解できない無能力者と誤解される恐れがあるから、愚人の誤解を避けるためには柔らかな疑問のかけで、とりあえずの発言を歴史に残しておくのさとの弁明がふくまれていた。

「最強の権力であることを示すには最高レベルの芸能や芸術を所有し、運営する必要がある……この原則を確認するのに、海原さん、特別の理解力は不要というものでし

よ

「つまり、誰にも理解できる、ということ？」

海原のブスツとした反応には そんなに簡単に念押しするなら、まるで、ほとくの理解力が平均レベル以上のものではないといってるみたいじゃないですか の不満が内蔵されているのだが、いつてる本人、気がつかない。

京都めざして出発する日はいつか、旅のルートはどうするか、などと打ち合わせがはじまるとすぐ、悦子が悩ましい表情になって、そーっと蘭子にささやく。

「ランラン、知ってるの？」

「なにを……」

「京都へもどる道、もどりがた」

「知らないけど、来た道をもどればいいんだから……」

蘭子は 簡単じゃないの とつづけようとしたが、簡単じゃないのを悟って、青ざめた。

オクニの銅像の台座にのぼり、オクニの背や腰のあたりを手でさすって 没後のお弟子 になるちからをいただこうとした、そのあとの記憶がない。

こんな精神状態で オクニの没後のお弟子 になれるのか、たぶんダメだろうと認めるしかないから、両膝から下のちからが抜けて、下半身が地面に吸い込まれる不安。

「ランランちゃんもエツちゃんも心配は要らない。大の男とまではいえないが、ともかくも普通のレベルの男三人がいつしよなんだ、京都まで」

「三人で、だれと、だれと、だれ？」

「成瀬虎人！」

「成瀬達人！」

「さーで、どんじりに控えます今川泰彦！」

悦子が手をたたき、

「お芝居みたい！」

蘭子は、はしゃぐ悦子と男三人に軽度の恨みの視線をかわるがわる投射する。

こういう風景を お芝居みたい と描写できる教養とセンスがない自分を哀れむ気分だ。

だけど蘭子は、これでこそあたしの親友エツちゃんなのだ と恨みから誇りの気分への転換をこころみ、成功した。

蘭子と悦子、それぞれ、たがいちがいにレベルアップをこころみ、人生の坂道を着実にのぼっている。

出雲の空気が効いてきた。

成瀬が説明する。

イズモノオクニには恋人がいた。

伝説の存在らしいが、恋人がいないのはつまらない、恋人がいるほうが筋がふくらんで楽しいから、恋人存在説が有力。

「恋人の名はナゴヤサンザ」

「なーんだ、だから民宿サンザなんだ」

「自分でいうのもヘンなものだが、おれはオクニの恋人なんだぞ と名乗って出るのは気分がいい。始めから終りまでゼーんぶウソだから、責任がない」

「ナゴヤは尾張名古屋の名古屋ですか、味噌カツで有名な」

「理由はわからないんだが、字に書けば名古屋山三、三

山は山三郎さんざんろうの省略だろうが、名古屋山三郎は実在の人物なんだ」

「ゼンブウソ、でもない？」

「山三郎の父は織田信長の……」

「信長の親類、または家来ですか、豪華！」

「信長の家来の名越なごえ因幡守、名越一ナゴエが名古屋になったのかなあ。名護屋、那古野と書いた記録もあるそうだ。母は信長の姪。山三郎は蒲生がもひらねと氏郷の小姓になり、氏郷の奥州攻撃で一番槍の功名をあげた。強い戦士であったが、美貌のヒーローとしてそのころの流行歌はやりうたにも登場した。戦争が終ってから芸能の世界で名がひるまり、オクニは自分の舞台にわたしの恋人として山三を登場させ、二人分の評判をとったらしい」

「オクニの舞台に登場したのは元サムライの名古屋山三郎ではなくて、ニセモノ、俳優の名古屋山三、そういうわけだ」

「山三は俳優であり、興行プロダクションの経営者であり、演出者でもあった」

「オクニプロだ」

「そうだ、エツちゃん、オクニプロといえばわかりやすい。われら三人、成瀬虎人・成瀬龍人・今川泰彦はオクニプロの主宰者、演出家、脇役俳優の三役を兼ねて旅興行をうちながら京都へゆく。主演女優のオクニは土佐林悦子、竹田蘭子の二枚看板」

「ラビットクラブの海原さんと亘理さんは、どうなっちゃうの？」

海原五三郎が頭を掻いて、照れくさそうに、

「ぼくと亘理はオクニを凌駕する歴史上の人物を探す任務があります。ラビットクラブ事務部の多数派と対立して少数派になりましたが、解雇されたわけではない」

「そうだった、忘れてた」とランラン、

「ライバルのメンバーと、こうしていっしょにお茶を呑

んでの、ほんとうはいけないはずなんだけど……ヘンな気分」と悦子。

「こちらには利益がありました。オクニをオクニにしているパワー、そんなものに触れたのです。オクニにナニをプラスすればオクニを超える歴史上の人物になるのか、すこしずつ分かってきたようです。ありがとうございます！」「

「また、会えますね！」

「四条大橋東詰の北と南で、対決！」

(第4章・終)

第5章「四条河原の田楽栈敷が崩れた」

京都めざして出発、その朝、

「まずは大社さまへお参り、だね」

「それはそうだけど、ランちゃん、かたちはお参り、じつは観察」

ランランちゃん は長くて他人行儀にきこえる、エツちゃんに倣^{なら}って ランちゃん はどうだろうと成瀬虎人さんが提案、エツちゃん達人さん泰彦さんも賛成、ちかごろあたしは ランちゃん 。

埼玉県の坂戸を ランラン で出て、京都を通って出雲に来て方向逆転、ふたたび京都をめざすいまは ラン。激動の人生 とか、生まれ変わった気分 ていうの、こういうものなんだろう。

あつたかくて、かるくて、のこりの人生を ランちゃん のままで過ごせたらどんなにいいかとは思っけど、たいていの大人のひとは口をひらくとすぐに「ケーセラ、セラ、先のことーなどわからーない」っていう。ほんと、どうなるのかなあ？

「観察って、なにを？」

「巫女^{みこ}さんの舞^{まい}、五人でじっくりと観察して、特徴を把握する」

エツちゃんがあたしのまえに一步だけ出て、

「巫女さんの舞の特徴……尖^{とが}ったところとか、強いところとか、そういった意味ですね」

成瀬さんは大いに満足の様子。

エツちゃんのいうのと、あたしの思うのと、中身はほ

とんどおなじなんだけど、あたしには、エッチちゃんみたいに上手にはいえない。

表現力の差だな、これ。

エッチちゃんだからいいけど、これが他人なら、許しちゃおかない。

「観察して、そのつぎは？」

エッチちゃんより先に質問するのに成功した。

表現力でエッチちゃんに劣るのは否定できないけど、だからといって、あたしがあたしの表現力を鍛えるのを怠けちゃ、ダメ。

巫女さんの舞を観たのは一時間ぐらい。

エッチちゃんはどうか知らないが、あたしは、成瀬さんの質問に答える準備ができた。

甘酒をいただきながら、

「ランちゃん、感想は？」

「舞のなかに柱が立っている。巫女さんは自分の柱のまわりを右に左に回転しているだけ、上がない、斜めがな^{うえ}い。柱から逃げられない、いや、ちがう、逃げられないんじゃないって逃げないんだ」

ここまでがあたし、エッチちゃんがひきついで、

「鈴の音がずーっとおなじ。たまには調子を変えたほうが……ああ、これ、転調っていうんじゃないかな？」

エッチちゃんがあたしに、まぶたパチパチの視線サインを送ってきた。

エッチちゃんのパチパチは、つぎのように告げている。

——転調で思い出したろ？

——もちろん、咄嗟のうちよ！

過去に放り捨てた中学の音楽女教師^{おんがくおんなきょうし}、一時間の授業の

うちに何度も何度も 転調 を強調する。

強調だけならいいんだけど、 転調 の意味を正解していない自分の低能を認識せず、ただただ生徒に押しつけて快感をむさぼるだけ。

オク二の没後の弟子になれたと仮定して、あの愚かな音楽女教師のまえでモダン歌舞伎を踊ってやったらどんなに楽しいか、エツちゃんに提案したら、「ダメだね、それは」とあっさり却下された。

「あたしたち家出したんだよ、忘れちゃダメ、しっかりして！」

「家出はしたけど、学校は……」

「家出と退学はセットになってるの。退学の手続はしないで家出したんだから、無届退学としてとくに処分されてるはず。音楽女教師の前で踊ってみせて恥をかかせるつもりなら退学取り消しを申請して許可をもらわなくっちゃならないけど、面倒くさいからね」

「面倒くさいのは、あたし、ダメ」

「ね、だから音楽女教師との再会はありえない。絶対ないってわけじゃないけど、再会すればトラブルは避けられないからね」

このままでは引き下がれない気がしたから、

「でも、さ」

「なにが でも、さなの？」

「あたしたちの評判聴いて、あっちから会いにきたら、どうする？」

「あたしたちの評判があつた女教師の耳にはいらぬはずはないから、来年か再来年、来るよ、きっと。そしたら会って踊ってやればいい、それだけのこと」

「タダで踊ってやるの？」

聞き返して劣勢から優勢に逆転したつもりになったが、

ピシヤツとやられた。

「分厚いお祝儀ぶくろを贈ってくれるにきまつてるけど、あとを引くと面倒だから、ふつうの値段でチケット買ってもらって、お祝儀はお返し、文句ないでしょ、ランちゃん」

エツちゃんはもうプロの踊子の気分になってる。

出雲大社の巫女さんの舞をみただけで、レッスンもしないのに、すごいや！

「彼女の処理はともかく、いまここで、さっそくやってみようじゃないか」

「ここって、この、ここ、ですか？」

あたしがパタパタと足を踏んで「ここ」って指したのは一畑電車大社線の終点「出雲大社前」駅の待合室。

乗車券買うひと、電車に乗るひと、降りたひと、待ちあわせの顔が見当たらなくて視線ウロウロのひと、その「ここ」でオクニのヤヤコドリをやってみようじゃないかって、成瀬さんがあたしとエツちゃんを笑顔で促す。「お稽古、いちどもしてないのに」

「駅のひとに 邪魔だ！ って叱られるんじゃないかしら」

成瀬さん、笑顔に笑顔を重ねてニッコ、ニコ。

「口ではそういつても、腹のなかではやりたいんだろ、隠したってダメさ」

見透かみすかされている。

くやしいから、打ち合わせもなにも、なんにもなしにふたりいっしょにピョイって立ち上がり、甘酒のカップを椅子に置いて、背中を合わせた。

エツちゃんの背中の暖かさを感じたから、うまくやれそうな予感がする。

——おーおー、いいぞ！

成瀬さんが音のない口パクパクで誉めてくれて勇氣百倍、トーンと一度だけ、こっちの背中とあっちの背中を合わせ、踊りだした。

「上出来！」と成瀬虎人さん、

「はじめて、なんて思えない！」と龍人さん、

待合室にわきおこった拍手喝采も電車まちの退屈まぎればかりとも思われない。

「オクニさんの没後のお弟子になれる——かもしれないね！」とエツちゃん、

「絶対にダメ、てなものでもないらしいね、あたしたち」と、あたし。

こういつちゃ悪いけど、巫女さんの舞は頭の天辺てっぺんから背骨を通ってお尻の穴までの直線を軸に、右へ三回廻るなら左へも三回廻り、それから本殿、神さまのいらつしやる席に向かって頭を下げる、これの繰り返し。

神さまへの尊敬とお願い、これが巫女さんの舞の基本だから、神さまに「おお、よしよし、おまえたちの願いが実現するように、なんとか工夫してみるよ」の気分になつてもらおう誘いなんだ——成瀬さんがこう説明してくれた理由がよくわかる。

イズモオクニさんのは舞じゃなくて、踊りなんだ——こここのところを成瀬さんは強調して教えてくれた。

「舞の相手は神さま、踊りの相手はひとびと、この一点の相違だけは、お願いだ、忘れちゃ、ダメ」

「神さまを忘れてもいいんですね？」

恐る恐るあたしが尋ねたら、

「神さまを忘れるのが踊りの第一歩。ランちゃん、それ

がわかったのはスゴイ！」

エツちゃんが横にいるのを知らないふりをして、成瀬さん、あたしを誉めてくれた。

でも、誉めるだけじゃ終らないのが成瀬さん、

「神さまを忘れると神さまのご機嫌を損こねてお叱りがあるかもしれない。それは仕方がないけれど、もっと恐ろしいのはひとびとなんだ」

「ひとびとが恐ろしい……？」

「神さまの威厳を借りてランチちゃんやエツちゃん、わしや龍人や今川くんを脅していい気分になるひとびと、そのほうがもっと恐ろしい」

「神さまの威厳を借りてあたしや成瀬さんやエツちゃんを脅しても、なんとというか、その、自分の得点にはならないでしょ。脅すのは、却かえってそういうひとびとの損になるんじゃないか？」

「おカネや利益の計算のうえでは損になるが、気分がいい、悪いの計算は別らしいんだ。損得計算だけで動かないのがもっと怖い」

頭を下げ、かんがえこんでいたエツちゃん、いきなり顔をあげ、

「出たよ、脅しのひとびとを退治する名案！」

「こんなに早く、名案が？」

エツちゃんは龍人さんとあたしの疑問と質問に答えるひまもないほど忙しい——いや、ちがう、時間をかけると名案が消えてしまうから、わざと即答した——親友のあたしとしてはこのように解釈したい。

「虎人さん、オクニさんは、どこでも、いつでも イズモノオクニ って名のつたんでしょ？」

「百パーセントってわけじゃないが、あらたまって名の

るとき、たとえば興行の始め、終りの挨拶の看板では、オクニのうえにかならず イズモ を重ねたらしいね、この目でみたわけじゃないが」

「それだ！」とエツちゃん。

三人がエツちゃんのほうに、エツちゃんが三人のほうに、同時にからだを乗り出したものだから額と額がぶつかりそうになった。

「オクニさんはイズモの神さまをお守りに使ったんだ、脅されないためのお守りに！」

「どんな悪いひとびとでも、イズモの神さまの名には勝てない。名案だ、これは！」

「イズモ出身じゃないのにイズモを名のっても神さまに叱られない」

「イズモの神さま、叱るところか、却ってお悦びになるんじゃないかな。お悦びになり、あれこれの智慧とちからを貸していただける」

前途は明るいぞ！

今川泰彦はサラサラッと軽やかにすばやくスケッチするのが得意。

大社の本殿を背景に悦子と蘭子がオクニのヤヤコラドリ——のつもり——を踊るのをサラサラッとスケッチしたのをノートパソコンに入れて何百枚もプリントし、道々で出会うひとに配りながら京都をめざす。

「エツちゃんとランちゃん！」

「めざすはイズモオクニ没後のお弟子」

「京都で全国コンクール」

「オクニを慕ってヤヤコラドリ再現！」

はじめのうち、オクニ先生はご自分のヲドリを「ヤヤコラドリ」と呼んでいたと、これは成瀬さんが教えてく

れた。

大阪ではどうだか知らないけど、京都では女の子を「ヤコ」って呼ぶらしい。

エツちゃんとおあし、今年はともかく、来年か再来年には「ヤヤコ」を卒業しちゃう。トシは取りたくない、急がなければ。

待ってました！ の大合唱というほどの歓迎ではないが、成瀬トランドがここで踊ろうときめ、悦子と蘭子が木陰で着替えをするうちに思いがけない人数の観客が集まってくる。

トランドは笛が吹ける。

♪ヒヤラヒヤラー ヒヤラリン

わざと調子を崩して笛を吹く。

——なんだ、このおかしな調子の笛の音は？

観客の意外感覚を刺激するのが狙い。

悦子は踊る、斜めのラインを強調する身のこなしで。

蘭子は胸や顔よりは背を多く見せ、いつも飛んで跳ねている。

トランドがいう、「躊躇の気分を隠さずに」と。

「見せる、聴かせるのは大事だが、それよりは自分が観る、自分が聴く、のほうが大切なんだ。いまはむずかしいだろうけど、早くおぼえてもらいたい」

あえていえばトランドは演出者だが、本人にはそのつもりがない。

演出者のつもりはないのに演出者のような口をきかねばならない境遇を意識しているから躊躇の口調になるらしい。

「お客さんが楽しんでいるか、どうかは芝居のざわめき、視線が動くか、動かないかでわかる。芝居のざわめきはお客さんが楽しんでくれて、評判がいい証拠、歓声とお

カネが飛んでくるよ。お客さんの視線が右へ左へ動いて落ち着きがないのはお客さんがこりやつまらないなと、飽きてる証拠。歓声もおカネも飛んでこない、罵声が芝居から湧いてくる」

「あー」

蘭子と悦子がほとんど異口同音に、これまた躊躇の口調でトランドにたずねる。

「芝居っていうのが、よく、わから……」

「わからないんだらう、それはね……」

トランドの口調、突如としてキツパリハツキリに転調する。躊躇の口調はふたりが質問しやすいようにと計算したすえの刺激戦術だった。

「芝居っていうのは、室町時代にはじまったもので、庶民が舞台芸能を鑑賞する下等席。」

芸能の興行スケジュールがきまり、舞台が設営されると、そのつぎに舞台の左の端から右の端までぐるつと半円形に——馬蹄形といってもいいんだが——三十から五十ぐらいの^{なじま}桟敷——もっと多いこともある——が斜め並びにつくられる。貴族や大名が自分で費用を出して、自分だけのための二階や三階に個室の観覧席をつくる、それが桟敷。

だが、このままでは舞台と桟敷のあいだに半円形の空き地、土間ができる」

わかりまーすと蘭子と悦子、虎人の説明が景色になって瞼の裏側に浮かんだようだ。

「せっかくだから、観覧したい庶民のためにタダか、タダ同様の観覧料で観せてやってもいいじゃないかというわけで、半円形の土間を庶民専用の観覧席として開放し、芝居と呼んだ。芝居とはつまり芝生の下等席とか芝生のほかに居る場のない芸能好きの庶民だ。ね。庶民の

芸能愛好者を軽蔑した呼び名なんだが、そのうちに貴族や大名の勢力は弱くなって舞台芸能の観客としては脇役にまわり、庶民が主役になった。劇場が芝居小屋とか芝居とよばれ、舞台上で演じられる芸能も芝居とよばれるようになった」

成瀬虎人はがつくりと肩をおろした。

芝居 の説明に精力を費やした肉体疲労だが、両眼がランランと輝いているのは、説明がすすむにつれて肩を前倒し、膝をすすめ、瞳をひらいて聞き入ってくれた悦子と蘭子に感動した精神の高揚だ。

美作みまさかから備前に抜け、摂津がちかづいたあたりで悦子が成瀬にたずねた。

「この先にあるのは平成時代の京都、それとも室町時代の京都、どちなんですか？」

「わからないんだ、それが」

「わからない、なんて、そんな乱暴な！」

蘭子は困惑している。

「平成の京都から平成の出雲に行つて、トンボがえりて京都へ行くんだから平成の京都にきまっているんじゃないんですか？」

「それがね、そうと決まったわけでもない。時間というものにはガツシリと固定して動じない感じだが、じつはそうでもなくて、意外に脆もろいらしい」

「脆もろいっていうと……？」

「人間が時間に加工すると、ズルズルってズレちゃうらしいんだ。加工の典型が年号とか暦だね。こちら、人間が大正とか昭和とか名を付けて区切つても、あちら、時間はその気にならない場合が多い。人間の勝手で区切つ

「てるだけだから、時間は気を悪くする」

「とすると、たとえば、大正の入口でドアを叩いて、モシモシ、そちらはいま大正ですね、まちがいありませんね。なんて問い合わせて確認しないと、とんでもない間違いがおこるとか……？」

「あたしたち、おかしな世界に住んでいるってどうか……時間は脆い現実を知っちゃったんだからねえ！」

「知らないうちが花なのよ、って、きいたことがある、あたし」これは蘭子。

「時代の前後をわざと入れ換えて混乱させるのは安っぽい歴史ドラマの定石の手法なんだ、気にしてもはじまらない」と成瀬タツンド。

「平成の京都にのりこむつもりでも安心ならぬわい。元禄でも昭和でもかまわない、どうぞお好きなように、こちらも勝手にやりますからって構えないと、やられちゃうね」

歴史に強い悦子の決意表明。

「京都、はじめてじゃないのに、この景色は記憶がないなあ。どこが、どうってはっきりはいえないんだけど、前途は多難みたいだよ」

「このまえは東の埼玉県からきて鴨川にちかづいた。ここなどは西からきて、四条通の大宮、堀川、烏丸、寺町、河原町を横切っついでいよいよ鴨川、進む方向が反対なんだから」

「ワクワクしてきたよ、あたし。蘭子は、どんな具合なの？」

悦子と蘭子がたがいの不安を確かめつつ寺町から河原町へ出ると、

「なあに、これ？」

「集まつてる、騒いでる、興奮してる！」

「このひとたち、生きてる時代は平成じゃないね。平成の前はなんだった？」

「シヨウワ、じゃないかな。シヨウワならおっかさんと同世代、すぐそのまえは石器時代っていうと冗談が過ぎるけど、これ、生半可なまはんかの古さじゃない」

蘭子と悦子、いまはもうイズモノオクニの没後の弟子の意識は濃厚、四条河原でおこなわれるイズモノオクニコンクールでの優勝まちがいなしときめてかかってやってきたが、なにやら不安の気分が消えない。

成瀬父子と今川泰彦も、なんとなく落ち着かない気分らしい。

「あれっ、先斗町がない！」

「先斗町がなければ先斗町KOBANも存在できないわけだけど……ありゃ、やっぱり、先斗町も先斗町KOBANもないよ！」

「先斗町KOBANと舞妓さんは京都の景色としてはセツトなんだけど、いないね、みえないね、舞妓さん」

蘭子が叫んだ、おなじく叫ぼうとした悦子に一歩も二歩も先んじて。

「四条大橋がない、オクニ先生の銅像がない！」

四条の橋がなくても鴨川はわたれる。

流れは浅いんだから、着物の裾をたくしあげ、脛すねを濡ぬらしてバシャバシャとわたれば遊び感覚はたっぷり、むしろ快感。

ではあるが、バシャバシャの快感もオクニ師匠の銅像があつてこそ、あるはずの銅像も四条大橋もない光景は喪失と恐怖の感覚のほかのなにものでもない。

「あたし、きいてみる」

蘭子、本来ならば—— 本来 は使えない場面なのか
な？—— 料理屋いづもやが存在するはずの地点で、おば
さんに近寄り、

「四条通ですよ、ここ？」

「むかしも、いまも四条」

それがどうかしましたか、と追及してくる強い感じの
返答。ふつうのおばさんが むかし を知ってるはずは
ないんだけど、蘭子は先を急いでるから、いまは問題に
しない。

「橋はどうなつたんですか、四条の大橋は？」

「四条の橋は清水きよみずさんの五条橋とは格がちがいます。も
とも造りが粗末やから、洪水で流され、新しいのが架
かったかと思うと洪水で流され、のくりかえし」

「四条大橋がない事情はわかりましたが、東詰のイズモ
ノオクニ先生の銅像は、どうなつたんですか？」

おばさん、 この娘こ、なにいつてるんだらう、まるで
訳がわからない の疑惑の気分を顔いっぱい、蘭子に
背をむけて足早に去る。

鴨の四条河原にひとびとがあふれてきた。

ひとびとが湧いてくる、ザワザワと、春のはじめの地じ
虫むしみたいに。

「なにか始まるんじゃないかな、ふつうじゃないよ、こ
のひとびと人出」

「人出はふつうじゃないけど、ランちゃん、あたしたち、
大切なこと、忘れてるんじゃない？」

「そうそう、そのとおりなんだけど、なにを忘れたのか、

それが思いだせないのよ、あたし。エツちゃんは、どうなの？」

すーっと近寄った成瀬トランド、この男にしては珍しいしかめつ面つらで、

「鴨の河原のイズモノオクニ全国コンクール！」

「それだっ！」

「ぐずぐずしちゃ、いられない」

春のはじめの地虫みいな人出を幸いに今川泰彦と成瀬龍人、虎人の指示にしたがって四条河原の浅瀬に受付のデスクをひろげ、

「資格や条件いつさい問わず、五百人まで出場受付！」

朱色で書いた幕を立てると、デスクはすぐに年齢さまさまの女にとりかこまれた。

とりかこまれたのはいいが、じつは女たち、今川泰彦と成瀬タツンドのからだにさわったり、ひねったり、そこまではまだましなほう、筒袖の下から手を入れて肌にさわったり、ひっかいたり。

タツンド、ヒョイツと気づいて、

「なんだッ、この着物。おれ、こんなの、いつ、どこで着替えたんだらう？」

泰彦も首をかしげ、

「おれのジーンズ、安くはない。安くはないんだから自分で脱ぐはずはない！」

若者の当惑をよそ目に、成瀬トランド、

「着物なんかにこだわってる場合じゃない。ランちゃん、エツちゃん、踊って！」

なーるほど、蘭子と悦子が踊って唄いだすと四条河原の重苦しい雰囲気はガラリ一転、賑やか、華やか、軽やか。

泰彦は女の群のあいだを走りまわってピラを配る。

「あなたも歌舞伎踊子ナンバー1、イズモノオクニ没後の弟子の椅子に挑戦だ！」

これからなにがはじまるか、なにをはじめようというのか、およその次第が四条河原の群集に了解された。

順番、演目、踊り方、唄い方、持ち時間、そんなものはぜんぜん指示されない。

われこそその自信ある女が——そうじゃない女も——勝手に踊って唄って、群のまんなかでおのずから主役として振舞う悦子と蘭子、デスク横の成瀬虎人が審査員となり、ダメと判じた女の肩をトントンと叩く。

叩かれた女、怨み顔もみせず群の端に下がり、こんどは見物役にまわる。

歌舞伎踊子ナンバー1に指名された少女、興奮に背骨をうしろに反らせ、前にかがめ、腹で息をしている。

「まず、名前を……」

「ハットリアヤコ」

「芸名はアヤコ、仲間の呼び名はアヤちゃん、これでいいね」

「名前はきまった。つぎはイズモノオクニさまにお出でいただいて表彰式といきたいんだが……」

成瀬トランドは視線を斜め上、東の方角にあげた。視線の行く先は四条河原の東、北の一郭である。

ここには本来、京都洛中ライオンズクラブが寄進したイブモノオクニの銅像が台座の上に立っていて、

——お帰りなさい、エッちゃん、ランちゃん！

悦子と蘭子を迎えるはずなのに、どういいうわけか、像も台座も消えちゃった。

「ランちゃん、みて、あれっ！」

蘭子の記憶の四条大橋東詰の岸壁は石垣づくりで補強されているが、いま目の前にみる岸壁は崩れて崩壊寸前のありさま。

それはいいとして、崩れかかった岸壁に横たわっているというか、寝かされているというか、あやふやな感じの物体は、

「オクニお師匠さま……じゃ、ない？」

「まさか、ランちゃん、でたらめいわないで！」

あれはニンゲンだといわれれば真っ向から否定はできないが、否定し、ならば対案を出せといわれると困惑する。岸壁に横たわる物体の印象はそれくらい安定感に欠けている。

「ま、行ってみるしかないね」

トランドが先頭、新入りのアヤコも入れて六人、浅瀬を渡って鴨川左岸の岸壁を攀じ登りかけた、そのとき、

「キヤーツ！」

むかしの小説なら、こういう叫びは若い美女特有のものだとされ、衣を裂くようなと形容されるしきたりになっっていた。

だがしかし、新入りのアヤコ、先輩の悦子と蘭子の三人とも、愛くるしくはあるが美女とは言い難いから音声そのまま、「キヤーツ」と表現するしか手はない。

絶叫の主は悦子だ。

蘭子とアヤコは恐怖のあまりに岸壁の石をギューツと掴んだからよかったが、三人の男は逆、石を握る指からちからがぬけ、ズルズルっと落ちて濡れ鼠。

浅瀬の群集は左岸で展開される派手なトラブルを目の当たりにして、口あんぐり。

オクニ没後の弟子コンクールではスマートな演出をみせたのに、優勝者のアヤコを入れて六人、左岸に渡ろうとして厳肅度ゼロのドタバタをやっている。あれも演^だし

物^{もの}なんだといわれれば、なるほどと納得できそうな具合。

「今川さん、濡れ鼠の真似をやめないと面目がつぶれ、人生やりなおしがきかなくなるわ。さ、あたくしの手に縋^{すが}って上がってきなさい」

アヤコの公式の声がはじめてこの世にながれた。

いくぶんか囁^{しやがれこえ}れ声の雰囲気があり、悦子や蘭子よりは熟した女性の印象、語法にも乱れはない。悦子や蘭子が逆立ちしても「あたくし」はいえない。

悦子と蘭子の声は関東弁の標準語訛りのタイプに分類され、対してアヤコ of 言葉は標準語の純粋度が高い。大正から昭和中期まで東京の山手で聴かれたのがこれ、人工語の性質が濃厚。

つづいて蘭子が負けじ魂を發揮、キイキイと高い調子の平成語で、

「トランドさんはあだし、タツンドさんはエツちゃんが引き上げるから、しっかり掴^{つか}まって！」

女が男を引き上げるのは肉体条件の男女差を無視した暴拳だが、この際である、男女差なんかに構^{かま}ってはいられない。

「ヨーイショ」

「ホーラヤ」

まず一尺引き上げ、崖の途中で一休みし、また一尺引き上げてをくりかえし、男三人、ようやく左岸の上に這

いあがつてしばらくはヒーヒーと呼吸の調子を調整している。

最初に息がもどったトランド、

「エツちゃん、そのお、オクニさんの銅像は？」

「あ、そうだった！」

悦子は、鴨川の浅瀬を渡って左岸の崖を攀じ登った。そもそも目的を忘れていた。

蘭子もおなじらしく、口あんぐりになったのは大目的を忘れていた恥隠しなんだろう。

「よかった！」

女子三人、歓喜を絶叫で表現する。

「お師匠さんが、オクニ先生が、生きてる！」

「動いているよ、まちがないよ、生きているよ、よかつたあ！」

今川と成瀬タツンド、トシは若いのに体力というか、精気というか、中年のトランドに及ばぬらしく、ハ―ハ―と苦しい息づかいで、

「オクニさんは銅像なんだから、 生きている じゃなくて、 まるで生きているみたい っていわなければ正しい言い方じゃない」

「そうだよ、銅像に生死は関係ない」

断言した、そのすぐあとで、タツンド、

「いや、待てよ。銅像に生死は関係ないとすれば、オクニさんの銅像についてわれわれが 生きてる とか 死んでる とか いてもオクニさんには通じない」

弱気になった。

弱気になると、人間、真理への近道を走りたがる。

「イズモノオクニは生きてるか、はたまた死か、それは観察者がきめればいい！」

「そうなんですよ、タツンドさん」

むっくり起き上がった物体、それは青銅を人体に似せて加工した銅像ではなく、酸素を吸って炭酸ガスを吐き出す哺乳類としての人間の女、つまりイズモノオクニそのひと。

「あたし、疲れましたよ。銅像になってジーツと動かないでいい、動いてはいけないっていわれ、あーあ、これで楽になるぞと、はじめは嬉しかったけど、とんでもないー！」

「動かないのは却って苦しいんじゃないですか、なにしろからだを思うように動かせないんだから」

「そのとおりよ、エツちゃん」

「キヤーツ。オクニ先生、あたしが悦子だってこと、ご存じなんですね！」

「どういうわけか、いきさつはわからないんだけど、たつたいま、ああ、この賢い娘がエツちゃんなんだって、ピーンとわかったの」

除け者にされたと感じたのが、不貞腐れた様子の蘭子にオクニは、

「あんたがランちゃん」

近寄って蘭子の胸に手を当てた。

一歩さがって黙礼する新入りのアヤコをオクニが微笑で迎える。

蘭子と悦子、たがいに寄り添い、アヤコがしずかに加わって視線の打ち合わせ、手をつないでオクニに近寄り、まず蘭子、

「オクニさまの没後のお弟子になるのがあたしたちの望みだったのですが……」

代わって悦子が、

「オクニさま、まるで生きてるみたいに颯爽となさつて
ますから、あたしたち三人、没後じゃなくて、この世の
直弟子になるのを許していただけます……よね」

別格の品格の持主のイズモノオクニ、蘭子と悦子、そ
して無言のアヤコの率直ではあるが狎れ狎れしすぎて無
礼な申し出を却下するどころか、大歓迎した。

「ランコ、エツコ、アヤコ、三人ともわたしの娘」

感激の涙で溺死しそうな三人に、こんどはオクニの敵
しい激励と叱咤が突き刺さる。

「いますぐ、ここで、鴨の四条の河原で、踊って踊って
踊りなさい。唄って唄って唄いぬきなさい。死んでもか
まわない、それぐらいの覚悟で！」

成瀬トランドがたたずまいをあらため、イズモノオク
ニに自己紹介をする。

「出雲大社のそばで民宿サンザを経営しておりました。

せんえつ
僭越ではありますが、オクニさまのお相手、名古屋サン
ザのつもりなのです。これは息子、タツンド」

「トランドさんの年齢では踊り、唄うのは無理。タツ
ドさんには四人のオクニの相棒、名古屋サンザとなつて
踊り、唄ってもらいます。タツンドと呼ぶのも止め、い
まからは サンザ と呼び捨てにします。そうじゃない
と、タツンドさんはいつになってもサンザになれないか
ら」

四人のオクニ、サンザを我が男にしようと腰を揺らし
て魅惑する。

われこそは、の媚態。

タツンド扮するサンザは目の前に出た第一のオクニに

誘われ、ふらふらと身を寄せせる。

第二のオクニがサンザの後を追ひ、袖を掴んで引き寄せようとす。サンザは言いなり。

第三オクニが第二オクニとサンザのあいだに割つてはいり、サンザに向き合い、胸ぐらを掴んで引き寄せせる。

三人のオクニとサンザが固まりになつて纏れ、浅瀬を右往左往する。

初代オクニはちから芸は演らない。新出来の三才オクニとサンザの固まりのまわりを、しずかに踊り、唄い、サンザの気を惹く。

恋の争いの勝負がきまる。

初代オクニとサンザはたがいの袖に手を差し入れ、四条大橋の夕日を浴びて上流を向き、静止のポーズ。

四条河原の群集、はじめは呆れるばかりだったが、四人のオクニの踊りに魅され、一步また一步と近寄り、踊りを囲んで輪ができる。

腰を揺らす。

真似て唄う声が、真似を通り越して自分の歌になる。

となりの女と手をつないだ女が、手を離し、胸の前で左右の手を交差させ、指を立て、てのひらを真横に向けた。

となりの女が真似をする、そのまたとなりの女が真似をして――

「ひとびとが自分で工夫して自分なりの踊りをする、あたしのおきもそうだった。オクニの踊りはひとびとの真似と工夫で時を越え、場を越えて世にひろがる」

つばやく初代オクニ。

目は爛々として群集と、群集の輪のなかの蘭子、悦子、アヤコを凝視する。

噂が噂を呼び、四条河原に集まる群集——男女老若を問わない——は膨れる。

浅瀬も砂州も立錐の余地なし。

五日目、

「退け！」

「なにすんの、四人オクニの踊りがもうすぐ始まるっていうのに！」

「そうだ、ここは、おまえなんかの出る幕じゃない！」
大工道具を担いだ男たちは足を止めず、強引に河原の群衆のなかへ突っ込んで、

「お公方さまの棧敷を建てるんだ、邪魔するな！」

「お公方さま……？」

「棧敷……？」

「なんのために、棧敷を？」

「お公方さまが田楽をご覧になられる！」

「お公方さまが、田楽を、まさか！」

まさかと叫んだ男、おのれの口が取り返しのつかない言葉を吐いたのに気づき、真っ青になった。

お公方さま、それこそは室町幕府三代將軍の足利義満だ。

平安の芸能の主流は田楽と猿楽（散楽）、格の高い大

規模な神社や寺に隷屬して芸を披露した。もともとは庶民の慰みだから朝廷所屬の楽人は輕蔑した。

だが、鎌倉になると庶民の羸賈を踏み台として田楽と猿楽は権力にちかづき、鎌倉幕府最後の執權の北条高時は忍び寄る政權崩壞の予感の怯えもあつたか、大金を投じて田楽に耽つた。

室町の時代には上層も庶民も争うように田楽、猿楽に熱中した。

いきおい、上層階級は世に名の高い田楽、猿楽の専門芸人を羸賈に抱えて権力の飾りとする。

田楽、猿楽の興行に大金を投じ、庶民の觀覽に供してさすがはナニナニさまの評判をとろうとした。

寺社や橋梁の建築の費用を民間から調達する事業を勧進といつた。

倒壞した四条大橋を再建する計画が生まれ、幕府が音頭をとつて四条大橋再建の勸進を名目に四条河原に舞台と棧敷をたて、田楽の大興行がおこなわれることになつた。

ふつうなら舞台はひとつ、役者が登場する橋懸ももちろん一本だが、四条大橋再建勸進の舞台には東と西から二本の橋懸がつくられ、東西別々の田楽の座が芸を競合して觀客の興奮を煽動する仕掛けになつていた。

足利義満や摂政の二条良基、三千院梶井門跡の觀覽席の棧敷が舞台正面の東西に、貴族と大名の棧敷がそのまた左右に三階重ね、あわせて二百四十間、棧敷と舞台のあいだの芝居席とあわせると四千人の觀客が収容できる。

舞台建設工事の頭らしい男に、成瀬トランドが手揉み足摺りの低姿勢でちかづき、

「イズモノオクニの哀れな一座でございます。お頭の格別のご慈悲をいただき、四条よりずっと三条寄りの浅瀬でかぶき踊を興行させていただきませぬか。おお、もちろん、勸進田楽が始まれば、われらの一座は興行を止めて控えますゆえ、お公方さまの邪魔にはなりません」

勸進田楽の舞台は四条大橋のラインの位置に北面して建てられる。

四条を敬遠し、ずっと北の三条河原に場所を移しますからよろしいではございませぬか——これがトランドの願いの筋だが、逆効果をまねいた。

「三条寄りに？」

「ははーっ」

「汚らわしい！」

「ケガーラワーシイとおっしゃいますと？」

「四条より上流の三条でかぶき踊などという汚らわしいものが興行されれば鴨川の流れが汚れ、四条の勸進田楽が汚れる、その理屈がわからぬか！」

頭は竹の棒で虎人を突いた。

父を庇おうとした籠人は人夫に突き倒され、浅瀬の石に額をぶつつけ、裂傷。

工事がはじまった。

大工頭から、

—— かぶき踊のオクニ一座 なるアヤシゲな一座が徘徊してある。正面からお公方さまに反抗するとはおもわれぬが、コチヨコチヨとつまらぬ悪戯いたづらをやらんともかぎらぬ。嚴重警戒せよ！

なんていう通達があったにちがいない、一座の誰かが

四条河原にちかづくくと頭の配下らしい屈強な若者が後を尾けてくる。

浅瀬に降りるわけじゃない。

岸の上から工事の様子をながめるだけなのに、気がつくくと、いつのまにか身の回りに不快な空気が張りつめている。

舞台と棧敷の建設工事がおわり、六月一日、観客の主役の將軍義満や、摂政の二条良基、梶井門跡ほか、公家大名がそれぞれの棧敷におさまって演技がはじまる。

演目第三は猿楽、猿の面をかぶった男の子役が御幣をさしあげ、赤地金襴あかぢきんらんの打掛うちかけ、虎革とらかわの連貫ついでん、伴奏の小鼓がトトトトンの早打ちになったのに合わせて高欄たかねにピョーンと飛び乗り、左へ回り右へ曲りめく、ピョーンと跳ねあがったかとおもうと宙でグルリとでんぐりかえり、そのまま欄干らんかんに立ち降りてピシッと見得みえを切ってから、なにがそんなに面白いのですか？ と、観客に挑戦することとき表情で——といっても面はかぶったままだから表情は判定しがたいが——うしろを向き、尻のまわりを搔いてみせる。

キャーッとモワァーッととも、なんともいえぬ驚愕と賛嘆と共感の笑いが棧敷と芝居から沸きあがって舞台に跳ねかえり、増幅されて棧敷を揺るがせ、芝居席におおいかぶさる。

「たまらない！」

「くるしい！」

「やめて、もう！」

「死んじやうよ！」

「あのコザル、おかしいの、なんのって！」

興奮の極に達した観客はからだを左右に揺すって、止めようにも止まらない。

にわかづくりの棧敷がユサユサと揺れ、倒壊を予感した客がわれ先にと柱につかまったのがつきつぎに伝わって三階重ね、二百四十間の棧敷を一度に倒した。

建具の下敷きで死んだ女子供、茶釜の熱湯をかぶって大火傷をしたもの、咄嗟に抜いた自分の太刀で傷つく武士、訳がわからないまま取っ組み合い、殴り合いの喧嘩になって怪我をするもの——ある公家の記録によれば死者は百人を超えた。

「あれほどの芸があるんだ。手間隙てまひまかけて公方さまの名やちからを借りずとも、われらのように自分の才覚で、いつでも、どこでも、どのようになでも興行できるじゃないか」

芸で生きる、芸で生きるほかに暮らしの手のない者にたいし、成瀬トランドには熱い親近感がある。

だからこそ、田楽・猿楽の芸人には公的な権威を笠に着ず、自前で芸を披露してもらいたかった。素人同然のおれたちがやってるんだから、あんたたちも出来るはず——こういつてやりたい。

トランドの不満、不平の感情は息子のタツンドや今川泰彦につたわり、

「あの田楽の芸人たちは、われらのことを、どこの馬の骨かわからん田舎の雑芸連中　ぐらみくだいに見下しているんじゃないかな」

「馬の骨、それで結構。しかし、お公方さまの権威を笠に着て、われらを鴨川の浅瀬からムシケラのように追い

払ったのはケシカラン！」

そこへ悦子が割ってはいって、

「公方さまっていうのは室町幕府の將軍でしょ。將軍は大名、大名は武士、武士といえば命を的に戦って榮譽をあげ、民百姓を守る華々しいひとたちだって川越の中学たみやくしやうで教えられたんですけど、田楽の興行の保護者にもなるんですね。知らなかったなあ！」

「戦うのも好き、田楽も好きなら、田楽興行を保護するんじゃないくて、自分で飛んだり跳ねたり唄ったりすればもっとカツコウがいいのに！」

服部アヤコが意見を述べた。遠慮がなく、問題の凶星つぼしを衝いている。

蘭子も負けちゃられない。

「壊れた棧敷が片づけられたら、あたしたちのオクニ一座がデーんと居すわって、一カ月か二カ月の長期連続公演、やりましょう！」

「悪くないな」

成瀬がニンマリ。

そこまではよかったが、崩れた棧敷の残骸の材木を使って、舞台と棧敷の跡地がぐるりと塀で囲まれてしまった。

蟻も出入りできない、というほどではないが、公方の家来が番人に立っていて、隙間から中にはいろいろとでもすれば首筋つかまれ鞭で叩かれ、悪くするとしょっぴかれる。

「壊れかけた棧敷が片づけられたんだから、浅瀬はキレイサッパリ元のかたちにもどすのが筋じゃないの！」

「先斗町KOBANの巡査に訴えて、公方を叱ってもらいたい！」

「エツちゃん、それ、ダメダメ。先斗町もKOBANもずつとずつと先の時代のものだからね、いまはまだ影も形もないんだよ」

「そうだなあ。仮に、だね、先斗町KOBANのお巡りさんに訴えるとしても、お巡りさんと足利公方では権力の強さの桁が違う、月とスッポンの違いを百倍も増幅したくらいに桁が違うんだ」

「あたし、かんがえたんだけど……あ、新参のあたしが偉そうなことって、許されるんですか？」

服部アヤコの正体、それは沈着で聡明で、そのうえに機知に富む。

「許すとか、許さないとか、そんなこと、ぜんぜんないんです、よ、ね、トランドさん？」

「ないない、ぜんぜん、ない。なにをかんがえたのか、アヤちゃん、教えてくれ」

「田楽舞台と棧敷が崩れた場所でオクニ一座の長期興行がやれる、そうおもって喜んだのが、舞台と棧敷の跡地にぐるりと塀ができて、興行どころじゃない。それであたしたちはガツカリしてるわけだけど、これ、おかしいんじゃないのかなと」

「ガツカリがおいしい、まちがってる？」

「おかしい、まちがってる。強い言い方で御免なさい」

「いいんだ、いいんだ。遠慮して、いいたいことをいわないのはオクニ一座全体のマイナスになるんだから、よくないよ」

「じゃ、いいます……舞台と棧敷なんか忘れちゃいましたよー！」

「忘れる……」

「四条河原の浅瀬の一番の場所に舞台と棧敷の跡地があって塀に囲まれているわけだけど、ここじゃなければ踊

れない、唄えないってわけじゃない」

アヤコのほかのメンバー全員、まるで打ち合わせたかのように瞑目、瞑想する。

アヤコの提案の衝撃でビックリ、喉が詰まって驚きの声すら出せない。

声が出せないんだから、瞑目と瞑想で驚愕を表現するしかない。

仲間の動揺を知ってか、知らずか、アヤコは晴れがましい興奮の気味で、

「オクニ一座は輪になって、跡地の外側をグルグル廻りながらかぶき踊を踊って、唄う。神さま、お公方さま、大名ではないふつうのひとびとは、そのまた外側からわたくしたちの演芸を楽しんでいただく……オクニ先生、これ、如何ですか？」

「輪になって廻りながら踊り、唄う……何百年に一度、出るか出ないかの名案です。二重の輪の中心が田楽の舞台の棧敷の跡地だから、聖地巡礼の踊りであるな。こころがけがよろしい、褒めてつかわそう。なんて滑稽なことにもなりそう。アヤちゃん、お手柄！」

遙かな長い時間がすぎたいまだからこそ思い出すんだけど、エツちゃんも、もちろんあたしも、オクニ先生に手放して褒めていただいたことなんて一度もない。

あの場面、先輩として新入りのアヤちゃんに嫉妬するのが許されるはずだけど、たぶんエツちゃんも、もちろんあたしも、嫉妬なんてぜんぜん感じなかった。

嫉妬どころじゃない。

——スゴイね、この女！

——お茶の水とか、津田塾とか、きちんとした大学で芸術を総合的にお稽古して卒業、適当な大学の教授を停

年までつとめ、ヒマとオカネを持って余し、日本芸能史の授業で知ったイズモノオクニのかぶき踊をやってみましようかなというわけで、少女に化けてこの場にお出ましになったんじゃない？

——当たってる、かもね。老女が少女に化けるのは簡単だもの。

初代オクニが両手をひろげ、一同を近寄らせ、抱えるかたち。

「あたしがいなくても大丈夫、ねえ、トランドさん」

「そうおっしゃっていただけるのは嬉しいのですが、となるとオクニ師匠、師匠のこれからの人生は……？」

「わかってるじゃないの、元通りになる、それだけ」

「元通りっていいいますと……？」

オクニが自分で フツ と息をついたのが、一同の空耳なのか、鴨川の四条の浅瀬から フツ と音をたてて飛びあがったオクニは東詰の北、台座の上で東を向いた銅像となったまま、踊らない、唄わない、誘わない。

「ランちゃん！」

「あのとときと……」

ふたり、声を揃えて、

「変わらない！」

「いづもや は？」

蘭子が伸び上がって西を眺めて、

「いづもや、あるよ、橋の西詰に」

「なにもかも変わっていない……いや、そうじゃなくて、すっかり変わったのかなあ？」

他人なら、香気が極まって、このさき仲間のままでいいのかなと深刻に疑わざるをえない場面だが、成瀬父子

や今川泰彦、新入りのアヤコはドラマの展開が筋違いになるのは気にしない、こうでなければ面白くない。

六人が六人、いい気分を飲み込んで満腹したころ、

「エッちゃん、ランちゃん、おひさしぶり」

「おひさしぶりって、あんたは……アレッ!」

「ラビットクラブの橋本ヒサシさん、で、しょ?」

(第5章・終)

第6章「出羽の庄内の清河八郎」

「ランちゃんとエツちゃんは出雲へ行つて オクニの没後の弟子 になり、京都にもどつてオクニ一座の看板をあげた、そうでしょう?」

ラビットクラブの橋本さんは、あたしとエツちゃんが、どこで、いつ、なにをしていたか、知ってる。

「ということは、橋本さん、出雲まで行つて、わざわざ調べたんですか?」

「あれっ、ご存じない?」

「存じも、存じないも……知ってるわけが……あつ、そうか!」

ここまでがあたしで、

「海原さんだ!」

これはエツちゃん。

あたしがエツちゃんの早技に勝てないのはいつものとおり。

仕方がないから、

「海原さんと巨理さんだ」

いまさら手遅れな念押しをやつて、ともかくも足並みはそろえた。

そのあいだのあれこれを説明してよ、といいかけたあたしの機先を制してヒサシさん、「じつをいえばね」と芝居がかつた前置きで説明をはじめた。

前置きが芝居がかつたにしては意外にも味付けあつさり口の調。

あとからかんがえれば、だが、オクニ一座のメンバーと会つたのを予想してセリフを書き、レッスンしていた気配、または容疑が濃厚だ。

容疑なんていつでも犯罪がらみじゃないのはわかつて

いるけど、京都ラビットクラブはあたしたちオクニ一座を包囲し、観察しているんじゃないか。

「だけど、そうだとすると、いったい、なんのために？」

「逆転事業の展開方針をめぐってラビットクラブに内紛がはじまり、おさまりがつかず、多数派と少数派に分裂した。」

「多数派は系川益五郎・新門友三郎・久次米純一の三名、海原五三郎と巨理勇一郎の二名が少数派。」

「橋本ヒサシは態度を保留したから三対二の比率で分裂した。」

「橋本さんは、なぜ、態度をきめなかったの？」

「蘭子の問いに悦子が同調し、問いの二の矢を射ようとした矢先にヒサシが言明した。」

「逆転事業専任はオレ、橋本ヒサシなのだ！」

「それはもう、知ってるの。知りたいのはその先」

「悦子と蘭子は焦るが、橋本ヒサシは悠悠たるもの、微笑さえうかべて、」

「久次米純一がしゃしゃり出やがった、いや、久次米が悪いんじゃない、部長が久次米をそそのかし、その気になった久次米がしゃしゃり出たのが真相かな」

「ししゃり……？」

「成瀬トランドとタツンドの親子がほとんど同時に疑問を投げかけた。」

「ししゃり じゃなくて ししゃり、ししゃり出る、下一段活用しもこちだんの自動詞」

「出雲じゃ使わない言い方だな。言葉の気分はわかるつもりだが、正しい解釈か、どうか、自信はない」

「自分が出る幕じゃないのに、どこを、どうまちがったのか、はりきって出てきてその場を混乱させる、それが」

しゃしゃり出る。単純にまちがうのは罪がないが、まちがったフリしてしゃしゃり出るのは悪意がある、タチが悪い」

「まちがいを装う、それですね」

「そのとおり！」

橋本は気を良くしたらしいが、いまは言語論を展開して嬉しがるときではないと気がついたんだろう、

「逆転事業専任のオレをさしおいて部長と久次米、ふたりがクメノヘイナイの石像探しをはじめた。それだけなら我慢できないこともないが、専任のオレにひとことの断り、あるいは相談もない、まったくオレを無視したやりにかただからハラをたて、どっちの味方にもなるもんか！ と啖呵をきり、派閥員一名の独立派閥をたちあげた」

「部長さんは、どうなった？」

いつもは口数のすくない今川泰彦、焦点をピシリとつく質問。

「部長か、あのひとは内紛がはじまったのを合図に口を噤んで、なんにもいわない。まちがった指示を出して責任を問われるよりは、なにもいわないほうが傷は浅い。無能のレッテルは貼られるけど、責任は問われない。卑怯といえは卑怯だが、サラリーマンの処世術を現実にととって部下に示してくださるのだと解釈すれば、悪いとはいえない」

クメノヘイナイってなんですか？——オクニ一座のメンバーが異口同音に発した問いにたいして橋本は、

「逆転事業のシンボル候補としてクメノヘイナイの名が出たのはオレも知ってる。だから、専任さん、クメノヘイナイの石像探しを逆転事業の第一策に採用してもら

えませんか ぐらいの相談があれば、オレは 即刻OK
と応じるつもりだった。それをそうしないから、怒った
のさ。クメノヘイナイに問題はない、怨みもない、手続
に問題があった」

ていねいな説明を返し、口を窄め、ホーツと息をつい
て、おだやかな顔。

「まあ、ハシモトさんて……！」

甘ったるくて、しかも切ない気分の言葉の主は蘭子か、
悦子か。

♪ 四条河原に夏の陽おちて、

ねぐらへ帰るツバメのころ、

あなた察してちょうだいよ――

早めの酔っぱらいのタミ声を伴奏に、

「成瀬さん、せっかくお知り合いになってすぐにお別れ
するのも野暮なもの、如何でしょうか、壬生川通仏光
寺、ラビットクラブのオフィス、侘しくはありますが、
なにかと設えはございます、あらためて一献などは」

「いいですね、それ！」

橋本ヒサシの提案に飛びついたのは成瀬タツンド、若
いだけに配慮に欠ける。

「ありがとうございます、しかし橋本さん……」

父のトランドが割ってはいり、息子の失態を庇いかた
がた、ヒサシの誘いを拒絶する。

「われらオクニ一座とラビットクラブは敵対の関係、い
かに親睦の儀式とはいえ、やすやすと同室の交歓などは
慎むべきではなからうか」

ヒサシはプーツと頬をふくらませ、誘いを拒絶された

不満の意をあらわしたが、成瀬タツンドよりは年長だけに配慮の姿勢は維持した。

「さようですな。悲しむべきことだが、敵対関係にあるのは真実、ならば、いずれ、また」

撤退をこころみた橋本の上着の裾をうしろから掴んだのは、なんとまあ、いつもは悦子に遅れをとる、あえていえばのんびり屋の蘭子、

「橋本さん、逃げちゃ、ダメ！」

「ダメ、ですか、ランちゃん？」

「ダメにきまつてるでしょ。クメノヘイナイってなんなのか、ぜんぜん説明していないじゃないの！」

「ああッ、そうだ。こりゃ、いかん！」

頭をボリボリ掻きむしるのは、これこのとおり、面目もない恥辱を痛感しております。と前置きし、おもむるに優勢の位置取りをしようと計算しているからだ。

優勢の位置取り——橋本ヒサシは成功——しつっ——あるかにみえた。

なぜなら橋本は、成瀬トランドの顔に視線の焦点をピタリと当て、

「わたくし、ラビットクラブの橋本ヒサシ、敵対関係にあるオクニ一座のみなさまにクメノヘイナイとは如何なる人物、または如何なる塀であるのか、説明するのを許されるのでありましょうか？」

これぞ挑戦 の見本みたいなポーズと声で言い放ったのである。

だが、橋本の強硬姿勢もそこまで。

「いいも、悪いも、ないのよ」

「ランちゃん、なぜ？」

「あたしが命令するの。橋本さんはあたしのいうとおりになればいいの！」

そして下を向き、小声で、しかし、はっきりと、

「面倒くさいな、もーっ。早くしないと日が暮れちゃうよー！」

効いた、これは。

年齢は蘭子の三倍、世間経験は豊富な橋本だが、所詮は気弱な中年男、家出女子中学生の素性を知ってる蘭子にそっぽをむかれ、たったひとこと、面倒くさいと掃き捨てられた、効かないわけがない。

「はいっ。では蘭子さん、わたくしはどうすればいいのでしょうか？」

「クメノヘイナイについて説明しなければならぬけれど、ラビットクラブの事務所じゃなくて、その」

鴨川の流れを見下ろし、

「浅瀬に床を張って、向こう岸の いづもや から仕出し料理を運んでもらい、しずかに優雅にいただきながらクメノヘイナイの説明を聴きましょう」

「すばらしい環境設定！」

「でも、むかしと違って現代の鴨川の納涼床は右岸のみそぎ川 の上に架けなきゃいけない。許可なしに浅瀬に床を張ると、京都府知事に叱られるんじゃないかな」

「京都府知事って、あそこのオクニ先生の銅像に説明文を書いた荒巻さんじゃないの？ あたしたち、まんざら無縁じゃないんだから、特別に頼んだらどうだろ？」

「あのねエツちゃん、荒巻知事が説明文を書いたのはおむかしの平成六年、いまは山田啓二知事だから、たぶんダメ」

モヤモヤしていたら、突如として天空から声、

「わたしの子供のオクニたちよ、そして恋しいサンザさま、ここで怯んじやダメ。勇気をふるって独断し、あな

たたちの生きてる、その時代、その場へ、江戸時代を引き寄せればいいの。シンプルにかんがえ、断固として行動しなさい！」

「わーっ、オクニ先生、ありがとうございまーす！」

オクニの銅像の左手の太刀がキラリ一閃、夏の入り日に輝いた。

先斗町KOBANの北隣りのいづもやへ、これこれしかじかと出前を注文した、そのすぐあと、

「おかしいな、さつきは足利義満の猿楽見物の場だったから、つまり時代は室町、先斗町も先斗町KOBANも存在しないんじゃないかな？」

今川泰彦の疑問を橋本ヒサシが引き取って、

「室町時代ならともかく、いまは平成です。御覧なさいよ、ホーレ、西詰の北に蔵として存在、かつ営業しているじゃありませんか、先斗町も先斗町KOBANも、そしてもちろん いづもや も」

橋本にいわれて今川があらためて西詰をみれば、

「あ、ありますね、 いづもや が。あればいいんだ」

注文すると、応答があった。

「ご贖肩、ありがたい仕合わせではありますが、浅瀬に床を張り、お料理をはこぶのは、その筋の……なにしろすぐお隣が天下に隠れもない有名な先斗町KOBANでございませすし」

「いやいや、東詰のイズモノオクニさんから直々のご承認をいただいている。どうか自信をおもちになり、ご心配なさらず」

「あ、オクニさまの……ならば事情は違います。四条大橋を挟んで東の イズモノオクニ銅像 と西の料理屋 いづもや のイズモノ縁づくし、やりましようー！」

浅瀬に床を張って酒肴^{さけがかな}、祇園から芸舞妓を呼んで張り切るうちに興奮してきたいづもやの主人、

「ほかのお客さまが大勢、わしたちも浅瀬で大涼み^{おおすず}を楽しみたいとおっしゃって……いや、あの方々は東詰のイズモオクニさんの格別の許しをおうけになられとお断りをもうしても、そこをなんとかと、いやもう大変なご執心」

強要されて断れず、つらいのです、なんとかしてくださいの表情の下で嬉しい溜め息。成瀬トランドと橋本ヒサシがならば、かまわんじやないかと承知するのを見越している。

「いいんじゃないですか、ねえ、成瀬さん」

「ラビットさんがOKなら、こちらは異議なし」いうわけで、いづもや主人の期待どおりの展開。

たちまち賑やかな宴がはじまり、たがいを隔てる壁はくずれ、橋本ヒサシのクメノヘイナイとは如何なる人物であるかの講義というか、説明というか、オクニ一座の面々はすんなりと納得した。

「で、ラビットさんの事業計画として、クメノヘイナイはどんなふう処理されたのですか？」

「それが、ですね、ひとことでいえばナカッタコトになったんです」

「ナカッタコト……？」

「ヘイナイの石像のスタイルが、なんというか、あまりにもリアルすぎて、オクニさんに対抗できないんじゃないかと」

「ヘイナイ像のスタイルの、どこが、どういふふうが悪いんですか？」

「オクニさんのようにスックと立っているならいいんだ

けど、ヘイナイさんはペタリと地面に這い蹲つくばっているんです。千人斬りの罪の許しを乞い、ひとびとに背を踏み付けてもらうにはこうするほかにないわけだけど、どうも、ねえ」

いちど疑問が出ると、あとは否定的な意見が溢れて出た。

ヘイナイと京都のあいだに格別の関係がない、これが決定的だ。

京都の歴史にヘイナイの足跡がぎざまれている、というわけで、あっさりとヘイナイの名は消えた。

「名が消えたとなると、どうしてヘイナイが候補になったのか、バカなことをしたものだ……」

「提案者の橋本さんに怒りの矛先がむいて……そうでしょう？」

「わたしと、ヘイナイの子孫だと名のつた久次米純一が悪人に祭り上げられ、それが嵩こまじてラビットクラブの内紛がはじまりました」

酒の酔い、内紛の争点になった悪夢の記憶、それとこゝとで精神疲労の橋本、

「あーあ、逆転事業主任なんかひきつけるんじゃないかった！」

浅瀬の床でゴロリと横になり、星空をみあげる。

オクニ一座の面々、橋本の辛い気持はよくわかる、同情の想いで胸が詰まり、しばしの無言。

とつぜん、

「あー！」

無言の場を引き裂かんばかりの絶叫、絶叫の主は橋本トサシ。

「気をたしかに、ね、橋本さん！」

「からだは疲れてもいいけど、あたまを疲れさせちゃ、ダメよ」

「あたま……いや、おれのあたまは疲れちゃいないよ」

「あたまは疲れちゃいないって、証明できる？ 証明はあたまの作業なのよ」

「ぼくに証明の義務があるとはおもわないけど、アレをご覧よ。アレの素晴らしさに感動して、おもわず大声が出た。これ、あたまが疲れちゃいない証拠になるんじゃないかな」

「アレ、って？」

返辞のかわりに橋本、潤うるんだ色の目ではるかな天空を

見上げ、顎あごをしゃくる。

「アレ……フワー、エッちゃん！」

「ウ・ウ・ウ・ウ……」

肺と気管を感動で締められた悦子、声は出るが言葉にならない。

悦子の感動は蘭子にも伝染、

「ウ・ウ・ウ・ウ……」

感動で発音機能が緊急停止したが、呼吸機能は正常を維持している。

ふたり同時にバツタリと倒れて床の上に大の字、橋本ヒサシに横並び。

なるほど、大の字なら、天空に接するからだの面積は最多になる。

「ギンガだ！」

「アマノガワだ！」

「おホシさまの色って白だとばかりおもってたけど、ちがうんだ。青色、いやいや、緑にちかい青」

「あんまり美しいから、あたし、泣けちゃう！」

服部アヤコが続き、成瀬トランドとタツンド、今川泰彦がバタバタと大の字、

「まあっ、こりゃ、スゴイ！」

スゴイといおうとした気持が胸に呑みこまれて、言葉にならない。

オクニ一座と橋本ヒサシの床のまわり、浅瀬のあつちにもこっちにも先斗町の料理屋いづもやの手をわずらわした納涼床が出てきて、オクニ一座を真似、バタリバタリと床の上で大の字、例外なしに、

「うわー！」

「気がつかなかった！」

「ギンガだねー、お父さん！」

「トインクルだ！」

「トインクルって？」

「星の光がキラキラと瞬またくのを英語でトインクルっていう」

五〜六百人ぐらい、みんな天空を見上げ、感動で胸を詰まらせている。

そこへ、

「橋本さん、そのサインを待っていたんです！」

ボタンと身を起こした橋本ヒサシ、鴨の流れに反射する星の光に照らされた男の顔を睨んで、

「おおっ、新門の友三郎くん！」

「橋本さん、ごめんなさい。でも、お願いです、ぼくを叱らないでください」

「なぜ、どうして、おれが新門くんを叱るんだ？」

「四条大橋の下の浅瀬、いってみればここは、逆転事業専任の橋本さんの持場です。そこへ、専任でもなんでも

ないぼくが出現すれば、叱られて当然。ですから、あらかじめ、叱らないでくださいとお願いするわけです」

「あのねえ、叱る、叱られる、なんていう物騒で野蛮なテーマと訣別して、とつぜんここに……夏の夜の鴨の四条河原に……なぜ出現したのか、理由を説明する義務がきみにはある。いや、簡単にいえば、きみはなにをいいたいのか、なにをやりたいのか！」

新門友三郎の顔が嬉しさで朱色になり、ギンガの星のトインクルに照らされておなじくトインクル。

蘭子が「うー」とだけいって、あとが声にならないのは悦子を出し抜いて新門と格別に親しくなる魂胆こんたんがバレそうになったからだ。

蘭子の標的になった新門、

「お願いです、ランちゃん！」

「あたしが、なにか悪いことでもする、って？」

「だから、それを！」

「それ、って、なーに？」

これじゃ、いつになっても解決の窓はひらかないと状況判断した蘭子、

「新門さん、それでしょ、大切なものというか、大切なことというか」

新門が両手でにぎりしめる四角い紙包を、蘭子は指でさした。

「そうなんです！」

新門友三郎がうやうやしく蘭子の胸にさしだしたちいさな包み、横から引ひつ手たく繰くった今川泰彦、包みから引き出したのは小型の書物。

「カバーのこの色、おぼえがある」

おぼえがあるから引ひつ手たく繰くってもかまわないという理

屈なら乱暴だけど、泰彦本人は気にもかけず、川床の隅の燭台の下に運んで、

「やっぱり、岩波文庫、青四六二―、タイトル文字はニシ・アソブ・クサだから、サイユウソウと読むんだろうな、著者は清河八郎、校注は小山松勝一郎」

一気に読み上げた。

「新門さんとやら、清河八郎が如何なる人物か、『西遊草』を読んでご存じのはず、ひとつ説明してくださるかな」

「そのつもりでここに現われたんです」

友三郎は説明にかかるまえから急ぎこんでいる、自分の熱気に煽動されている。

出羽の庄内の郷士の息子の八郎、幕末の安政三年（1856）に母をつれて半年ほどの関西旅行をやった。

郷士は武士の身分だが、大名に家来として仕える、いわゆる藩士ではない。独立の大規模農業経営者といえればわかりやすい。

真夏の京都に滞在して鴨の河原の大涼みを体験、感動の記録を『西遊草』にのこした。

「ぼくの大好きな一節、読みます。みなさん、お聴きください」

新門友三郎が読む。

「京師の男女、夕暮よりして美を競い、むらがり遊

びくること蟻のごとくにて、おのおの涼店にのぼり

て、あるいは弁当をひらき、あるいは涼店のものに命じて種々のさかなを取り寄せ、酔うて歌うものあ

り、三弦を競つものあり、拳を弄するものあり、舞

うものあり、千種万端、京地のにぎわいは是処に歸し、
祇園町遊女は雲烟のごとき粧いをなし、涼店の中を
あなたごなたに馳せまわり、桜花の春風に乱さるる
に異ならず。

時は六月なり。天色も立秋に近づき、清澄にして
水のごとく、銀河はあわあわとして天中を横切り、
星宿は万鏡をならぶごとくにて、仰ぐにも俯すにも
景色いわんかたなし。

「つぎ、少々略して、続けます」
殊に京、大阪は人情鄙卑にして、東方男児の風あ
らで、何かたの茶店に遊ぶとも物憂きことのみ多か
りけるに、此の涼店に休らうときはことごとく吾が
好みにしたが、あえて俗のすすめもなく、悠然と
して万人と楽しみを共にいたす思いあり。これ京師
第一の奇観、第一の佳勝となすべし。
読み終わって新門が長い溜め息をついたのは、時間が
あればもっともつと先を読みたいからだ。

夏の闇は一段と深く、天空の星のトインクルはますま
す煌めく四条河原、浅瀬の納涼床で新門友三郎が自己紹
介をはじめ。

「ばくの曾祖父さんの父は新門辰五郎、江戸町火消の十
番組の頭。寛永寺の別当覚王院義寛に俠氣をみこまれ、
浅草寺の治安維持を任された。それが縁で浅草寺伝法院
の新門の警固を頼まれ、新門と通称されたのが我が家の
苗字になったそうです」

「シンモンノタツゴロウ……聞いたか、読んだか、ぼんやりと記憶がある」

「幕末維新、尊皇攘夷、上野の山の彰義隊、そんな言葉にからんで出てくる名前だなあ」

「その辰五郎が、どこで、どうして清河八郎や『西遊草』と関係するの？」

「將軍後見職の一橋慶喜……あとで十五代將軍になる慶喜さんですが……に指名され、文久三年、慶喜さんの護衛として二百人の乾児こいごをつれて京都に駐在、河原町通と

御池おいけ通が交わる角の西南の町家に住んだそうです」

「河原町の御池、すぐそこだ」

「市役所の南向い」

「尊皇攘夷の志士たちと斬ったり斬られたり……」

「それはない、武士じゃないんだから。斬ったり斬られたりは京都守護職、守護職の配下の新選組」

「そうだッ、思いだした、新選組の前身の、あれはなんといったかな？」

「浪人組、いや、ちがう」

「浪士組」

「それだッ！」

「清河は 浪士組を組織すべきです と幕府に建言して採用され、浪士組を連れて京都へきたが、とつぜんわれわれは江戸にもどって攘夷をやる！ と爆弾宣言、近藤勇グループと別れて江戸にもどり、麻布で暗殺される」

沈黙、それからおもむるに成瀬タツンド、

「その清河八郎と新門辰五郎さんと、どこで、どうして関係するの？」

「辰五郎と清河が上京したのは文久三年、つまり同年だが、対面の事実はない。いや、ないと断言はできないが、

將軍後見職の護衛と出羽庄内の尊皇攘夷の郷士だ、見知る機会はなかったでしょう。出合ったとしても、たがいの正体は知らないから、会わなかったも同然」

「それなのに、なぜ……？」

「辰五郎が清河に興味をもつのは明治になってから。明治政府は尊皇攘夷派の志士たちの決死の行動の産物、というわけで、命を落とした志士たちは賞賛された。そのなかの清河八郎に、辰五郎は興味を惹かれた」

「そうか、普れ高い志士と同じ時期に在京していた因縁の記憶だな。清河はとつくのむかしに命を落とした。自分には命はあるものの、徳川が凋落したいまは肩を落とし、辛うじて江戸で生きている、おもえば目まぐるしい運命の入れ換わりではあるな、と」

「どうせ落ちぶれるなら、清河のように激しく戦ってから落ちぶれるか、殺されるか、したかったのに、それができない口惜しさ」

辰五郎の交友範囲のうち、清河と接した経験のあるものといえば幕臣、旗本である。

あのひと、このひとを訪ね、清河八郎とはどんな雰囲気なのかなのか、きいているうちに辰五郎なりの清河の面影、イメージが固まった。

「キヨカワ、キヨカワといいながら辰五郎は死んだんだそうです。ぼくはもちろん辰五郎と会ったことはないんですが、清河八郎の名は辰五郎の遺産としてぼくのからだに染みこんでいる」

「わかるよ」

「そのあとは、あたしに、いわせて！」

突っこんだ悦子、蘭子に一步も二歩も先を越された劣勢を挽回しようと、口調は激しい。

「何を、どういふふうにかんがえ、行動するタイプなの

か、つまり辰五郎の現実の姿を可能なかぎり復元する作業が新門友三郎さんの義務となった、そういうわけなんですよ！」

悦子が極めつけた、友三郎さんといえども反論は許さないわよ の強硬姿勢。

だが友三郎、呆れるかともおえば、とんでもない、百万の味方を得たかのように、

「エツちゃんさん、そうなんです。ぼくが気づくべきなのに、うまく表現できないところを、エツちゃんさんはじつになんともうまく表現してくれました」

愛称 エツちゃん に敬称語尾 さん を重ねるのは重く苦しく感じられるはずだが、新門友三郎が口にする、それでもなく、むしろ爽やかな印象、ひとがらの効果なんだろう。

「ですが、ね……」

友三郎のエツちゃん賞賛は条件つき。

「辰五郎の遺言、または遺産がどういういきさつでぼくのからだ、ここに染みこんだのか、それがわからないから不安で仕方がない」

「そうだよね、曾祖父さんのお父さんといったら、ご先祖さまの見本みたいに古いんだもの」

トランドがしみじみとつぶやき、

「偶然でも、なんでもいい、辰五郎が気づいて、すこししてから あっ、これだ！ と叫ばずにはいられなかったモノ、または、コト、それがあるはずだ。ないはずはない、それを探せばいいんだ！」

成瀬虎人、橋本ヒサシ、今川泰彦、悦子と蘭子、服部アヤコの六人は龍人を囲んで肩を寄せた。

「あれっ！」

「どうしたたの、ランちゃん？」

「お師匠さまが、あたしに顔をお向けになったような気がするんだけど……」

オクニ像の正面に位置しているのは蘭子ひとり、ほかはオクニ像に背を向けるか斜めの位置だから、オクニ像が動いても動かなくても、確認しようがない。蘭子が絶対的に有利だ。

「オクニ先生、どんなお顔でランちゃんをご覧になったの？」

「あなたがた、その線、いいわよ。そのまま進みなさいって」

蘭子のほかの五人、それぞれの視線をオクニ像に当てて、「お師匠さま、ランちゃんのいうの、ほんとうですか？」と問いたい気分だが、この質問にたいして、オクニがまともに対応してくださるとはおもえない。まさしく愚問なのだ。

「よっし、きめた。オクニ師匠はわれらにたいし、そのまま進みなさいとおっしゃったのだ。ならば、このまま進むのがわれらの義務」

高らかに宣言したタツンド、途端に弱気表情、

「そのまま進む、って、どっちの方角に？」

「清河八郎について辰五郎さんが気づいたコト、またはモノ……でしょ」

服部アヤコには 新参者だから遠慮しなくては 自肅の気分がいまだに濃厚だが、先輩たちがモタツイて一歩も前進しない事態をみて、我慢できなくなった。

「オクニ先生と新門さんの関係は師と弟子ではない、親と子でもない。だから、オクニ先生が その線、いいわよ。そのまま進みなさい とおっしゃったのは、あたしちには新門さんに提案する義務がある、義務を果たしなさいっていうことではありませんか」

「たぶん、それだ」

トランドのおとなびた言い方にたいして、アヤコが強い調子で反応する。

「たぶんは無用です。オクニ先生は 新門さんに提案しなさい！ と敵命なさったのです」

「たぶん は撤回します」

トランドはいさぎよく言明したが、蘭子と悦子、今川や橋本、タツンどは納得しがたらしく、モジモジしている。

「みなさま、新参者の出過ぎをお許してください！」

アヤコがきつぱりと宣言、一歩だけ進んで、

「ラビットクラブがオクニ先生のライバルとして東詰の南に建てるべきは清河八郎の銅像です。新門さん、これで文句がありますか！」

「服部アヤコさん、ありがとうございます。こうなるんじゃないかと思いつつ、断言する勇気がなかった自分を恥じるばかりです。アヤコさん、ありがとうございます！」

新門友三郎はアヤコの提案をよるこんで受け入れ、まず最初に、橋本ヒサシの同意をとりつける交渉をはじめ

る。

「逆転事業専任の橋本さん……」
いいかけたのを途中でとめ、顔をななめに上げ、鴨の浅瀬の川床からオクニの銅像にキリリツと視線を当てた。たぶん、いや、まちがいでなく、自分の決意をオクニに告げて了承を得ようとしたのだ。

——オクニさん、あなたのライバルとして、われらは清河八郎の銅像を南側に建立しますぞ。お覚悟はよろしいでしょうな、弱音などお吐きにならないでしょうな！

オクニに決意を告げ、からだを半回転、あらためて橋

本ヒサシに、

「橋本さん。ぼくは逆転事業の専任補佐の役であなたに協力するわけですが、異存はないでしょうか」

下位の自分から上位の橋本に上申するには適当ではない言い方ですがと、謙遜の気分をこめたが、橋本は上機嫌、気にしない。

「ぼくに補佐役が付くなんて思いもよらぬ、うれしいよ。ちからを合わせ、やるうじゃないか！」

「そういつていただいて、勇気が出ます」

「まず最初に手をつけるのは、清河八郎の生涯とか、人相とか、そういつたものを調査する」

「出羽の庄内に取材旅行ですね。部長に事業計画を提出して、出張旅費の出金伝票にOKのサインを捺おしていた
だく必要があります」

「まかしておけ！」

「橋本さん、新門さん」

声をかけたのは成瀬虎人、ほがらかに、

「出羽の庄内、わたしたちも行きますよ。近江で留まり越前で稼ぎのかぶき踊の旅巡業だから、おふたりと同行は無理ですが、途中でお会いすることがあるかもしれない」

「面白いな。で、出羽への旅立ちはいつから？」

「本日、ただいま、この場から」

「うらやましい。われらサラリーマンはそうはいかないんだ。上役に計画書を提出、あの役、この役の許可をもらって、それからだから手間がかかる」

「どこかでの再会、楽しみにしています！」

鴨川四条河原の浅瀬で夜をあかしたあたしたちは、出

羽ゆきの旅巡業の準備をした。旅の準備といたところで、これといった荷物もないオクニ一座、バタバタと荷をかたづけ、「さあ出発！」のとき、

「ランさま、あれ、なんの騒ぎでしょう？」

アヤちゃんはあたしを「ランさま」、エッちゃんを「エツさま」とさまづけで呼ぶ。

成瀬のお父さんは強い調子で「アヤちゃん、いいかね。ランちゃんはランちゃん、エッちゃんはエッちゃんと呼びなさい。われらはみな平等で対等、先輩だからといってさまづけで呼ぶのはよくない」と注意し、アヤちゃんも「はい」と率直に従うのだが、それも三日か四日、すぐにさまづけにもどっちゃう。いまはもう成瀬さんも苦笑して黙認するしかない。

「なんだろね？」

三条に近い浅瀬で、おとなの女が叫んでいて、まわりにひとが集かり、やかましい声のやりとり。

「あのひと、関東の言葉だね」

エッちゃんが不審の面持ち、あたしの耳にささやく。

ひとこみがくずれ、ひとこみから身をひきぬいた女がひとり、あたしたちのほうへ小走りに近づいて、

「ランコー！」

おどろいたの、なんのって、埼玉県の坂戸にいるはずのおっかさんの声なんだもの！

あたし、三步、いや五歩かな、うしろへ下がった。

浅瀬の砂利がジャリジャリと音をたてる。

この音は一生かかっても忘れないだろうな、と、そのとき思った。

「逃げなくてもいいんだよ、ランコ、あんたを捕まえよ。うってわけじゃないんだから」

立ち尽くすあたしの手に大きな紙袋を押しつけ、

「急いだから、これしか買えなかった。芸人の旅巡業は食えるか食えないかの境目の細い一本道、これ食べなきゃ飢え死にするっていうときに、みなさんと……」

おかっさんの声は涙で潤うるんでいた。

声が涙で潤むはずはないけど、あのときはまちがいに涙で潤んだおっかさんの声だった。

「……いっしょに食べるんだよ、いいね！」

「ソウカセンベイ！」

あたしの声が涙で潤んだのは母と娘の遺伝の理屈からして当然。

草加煎餅そうかせんべいがあればアイスクリームなんかには目が行かないのがあたし、急いだにちがいないおっかさんがあたしの大好物を忘れなかったのはたいしたもの。

おっかさん、あたしの手には草加煎餅の紙袋を載せ、ほかのひとには挨拶せずうしろを向き、ほんのひと息の間をのこして走って消えた。

「ねえ、ランちゃん」

エッちゃん、なぐさめの言葉をかけてくれるにきまつてる。

こういうふうに優しくて柔らかいエッちゃんに、まともな答えれば、またまた涙、またまた涙だ。

ブスッと応対するしかない。

「ふーん、なによ？」

「ランちゃんのお母さんの声、オクニ先生の声にそっくりに聞こえたよ。娘のランちゃんは、どう思う？」

「知るもんか、そんなこと！」

第7章「あのひとも、このひとも」

近江から越前、新潟の巡業は具合がよく、寒いけれども、身は軽く、こころも暖かい。

一座の評判は巡業予定地を先回りしていて、到着すると、

「あれがオクニ、あんなに若いとは意外」

「オクニが三人とは知らなかったけど、これはこれでいいんだな。三人のうち、どれかひとりを贖戻にするもよし、三人まとめて替めてやるもよし」

舞台の裏側のあれこれをテーマに熱っぽく語られている。

越後の寺泊から佐渡へ、大佐渡、小佐渡をぐるっと巡業して新潟にもどった。

ひどい船酔いにもやられず、出羽路を踏むまえの休みをしていたら、

「タツンドさん！」

「ぼくを タツンド って呼ぶひと、新潟にはいないはずだがなあ……あれえっ、新門さん！」

「おひさしぶり。みなさん、お元気な様子で、なによりでした」

「新門さんも佐渡へ？」

「いやいや、そういうわけじゃ、ない」

「佐渡で有名な歴史上の人物は法華宗の日蓮上人、でなければ承久（じやうきゆう）の乱で鎌倉幕府に敗れ、佐渡に流罪された順徳天皇。まさか四条大橋東詰の南に天皇の銅像を建てるわけにはいかないでしょうから、ラビットクラブの逆転事業課は四条大橋東詰の南に日蓮さんの銅像を建てることと決定したか、でなければクラブの総会に提議すると決定

したか……」

よくいえば快活、わるくいえばペラペラとおしゃべり口調の成瀬タツンドをさえぎって、新門友三郎、

「ちがう、ちがう、そんなじゃない。ぼくは佐渡へは行かないんだ」

「佐渡へは行かない。ならば、なんのために新潟へ？」

新潟は佐渡航路の港だが、だからといって新潟にくるひとすべてが佐渡にわたるわけじゃない。

成瀬龍人の疑問には常識の筋が通っていないが、新門は気にしない。

「お父さんや、タツンドさん、ランちゃん、エツちゃん、そして今川さんに会い、おつたえして、意見をうかがいたい用事がある」

「そのために、わざわざ、壬生川仏光寺から？」

「わざわざ、なんて昂たかぶつた心境じゃない。みなさんに会って、用件をつたえたい」

「とすると……いやいや、ここでぼくが口を挟むと複雑になる。新門さん、早く、その用件というのを」

今川に急せかされ、新門友三郎がオクニ一座につえた用件とはつぎのとおり。

出雲へ出張していた海原五三郎と亘理有一郎がシヨンボリの風情で壬生川通仏光寺のラビットクラブ事務所にもどり、まず海原が報告。

「なにも見つけられませんでした」

亘理が補足説明。

「出雲の精気はゼーんぶオクニに吸い取られたのです。オクニのあと、オクニを超える歴史上の人物を産み出すちからが出雲にはのこらなかつた」

沈滞の気がはりつめ、総務部の内紛は一気に解消、和解合体のはこびとなった。

「分裂がおさまって、よかったねえ、海原さん！」

「悪いけど、邪魔しないで、お願いだ！」

ヒエツと首をすくめる悦子に感謝のまなざしをむけ、海原はつづける。

出雲でモデルが発見できないならば、仕方がない、とりあえず、ということと銅像のモデル候補は清河八郎にきまりかけたが、キマリ！ とはならなかった。

清河八郎は文久二年（1862）四月、京都で尊皇攘夷のクーデターを起こそうと計画し、多くの薩摩藩士が共感して幕府側の要人襲撃隊が編成された。

そうと知った薩摩藩主の父の島津久光はクーデターの本部、伏見の寺田屋に「クーデターに参加してはならん」と命じる使者を送り、「反抗すれば斬ってもかまわん」と示唆した

寺田屋に結集していた薩摩の志士は久光の中止命令を受け入れない。

使者は抜刀して攻撃し、志士も応戦して斬りあいになり、有馬新七や芝山愛次郎など九人が命を落とした。

クーデターを計画し、参加者を集めた首謀者のひとりが清河八郎だが、寺田屋の悲劇の日、清河は伏見に姿をみせなかった。

決起の前日、大坂の安治川で舟遊びをした清河と安積あさか五郎が幕府役人の取調べに反抗し、トラブルとなり、大坂にも京都にもいられなくなり、伊勢に逃れていたのだ。

新門友三郎は、苦しい表情でオクニ一座の面々につげ

た。

「清河は同士の危険を知りながら自分は逃げた、卑怯ではないかと疑問が生じたのです」

「清河八郎は革命家と詩人と、二面を持つてるわけですな」

成瀬虎人が重い口調でいい、今川泰彦がうけた。

「四条河原の大涼みを賞賛した素晴らしい詩人の清河、同志の命が失われるかもしれない危険な場に姿をみせなかつた清河、わたしには別人のようにみえます」

澱まんだ空気のなかで、新門友三郎が結論めいた言葉をならべる。

「そういうわけで、わがラビットクラブの逆転事業として清河八郎の像を四条大橋東詰の南に建てるのは、残念ながら中止になりました」

「わたしたちも残念です。オクニ先生に激励され、ラビットクラブの銅像のモデルは清河八郎さんがいちばん適していると推薦したいきさつもあります」

服部アヤコが唇を噛んでいい、言い足りないのを悟つて、つぶける。

「じゃあ、ラビットのかたがたは出羽には行かないんですね」

「出羽どころじゃない。銅像のモデルをだれにするか、イチからかんがえなおさなければならぬ」

「でもね、橋本ヒサシさんが鴨の四条河原の大涼みの素晴らしい感動した、その現場に新門さんが清河八郎の『西遊草』を持ってあらわれた胸ドキドキの感激、あたしたちはいつまでも忘れません！」

蘭子が先頭をきって新門に感謝。

つぶいて悦子、

「オクニ先生の銅像だけでは四条大橋や四条河原の美し

さを語れません。大涼みがあつてはじめて四条大橋なのです。それをあたし、土佐林悦子のところに叩きこんでいただいたのが、あなた、新門さんなのです。新門さん、いつまでも、あたしのこと、忘れないで！」

「忘れるわけが、わけが、わけが……」

エツちゃんを忘れるわけがあるものですか と新門はいいたいらしかつたが、感動と興奮で胸がふさがれたのだらう、いえなかつた。

悦子も新門も、まだ若い。

いつか、かならず再会して、エツちゃん！、新門さん！ と叫ぶチャンスはある。

越後、新潟の別れ。

「旅芸人のスケジューはきまっているような、きまつていないような。とりあえず出羽の庄内をめざしますが、庄内に着くやら、着かぬやら」

トランドの別れの挨拶に、新門が応じる。

「壬生川仏光寺でみんなが待つてます。ぼくはトンボ返り、われらの逆転事業の計画を練りなおします」

「若くはない成瀬トランドから、お若い新門さんに饞別をさしあげます。おカネじゃなく、助言の饞別を」

「ありがたい！」

「銅像のモデルはだれがいいか、みなさんで討議なさるわけだが、みなさんひとりひとりのお顔がニコニコしているときにきまつた人物、それが最良、おぼえておいてください」

「みんなニコニコ、これできまるのがいちばん……わかりました。忘れません！」

「新門さん、四条大橋東詰のオクニ先生の銅像に、わたしたちオクニ一座は全員元気溼刺です とおつたえく

ださい」

「承知しました、おつたえします」

壬生川仏光寺、ラビットクラブ事務所、モデル選定の
討議が再開された。

新門友三郎が手をあげ、部長に発言許可をもとめる。

「新門くん、意見があるんだね、どうぞ」

やわらかい部長の言い方、明るい前途を予告、そうい
っていい。

「三人ぐらいの候補をあげ、それから選ぶのはどうでし
ょうか」

「賛成。しかしですね、三人のうちのだれか、でなければ
ならないときめてかかるのはよくない。三人がだめな
ら、四人目、五人目を候補にあげて、討議をつづける」

これは橋本ヒサシで、糸川益五郎がヒサシのあとを継
ぐ。

「なにがなんでもラビットクラブの銅像を建てるんだと
きめてかかるのも、よくないんじゃないかな。イズモノ
オクニを超える歴史上の人物はいない、こういう結論に
なってもかまわないじゃないか、これ、どうですか」

「糸川くん、いいね、それ。 洛中ライオンズクラブの
イズモノオクニ像について、われらラビットクラブはあ
らためて敬意を表します。ですからラビット独自の銅像
建立はやめます と宣言するのは恥ずかしくない、むしろ
誇りです。制限といえば、京都にゆかりがあつて、戦
国から江戸初期の人物、それぐらいだ」

「準備完了です！」

部長のとなりのデスクから岩本カヨコが朗らかな声を
あげる。『広辞苑』と『明解・爽快 日本史年表』をデ
スクにならべたのがカヨコの 準備完了 だ。

本阿弥光悦ほんあみこうえつ、吉野太夫、宮本武蔵みやもとぶさ、安楽庵策伝あんらくあんざくでん、露つゆの五郎兵衛ごろうべえの五人の名が候補にあがった。

本阿弥光悦は刀剣の鑑定・浄拭ぬぐい・磨礪とぎが家職で、佐野（灰屋）じょうえき 紹益きすみのくらしあん や角倉素庵たわらやそうたつ、俵屋宗達などと協力して美術印刷の嵯峨本を製作、刊行した。徳川家康から洛外の鷹峯に広大な土地をあたえられ、小川通上立売の本阿弥す 図子し から移住、鷹峯の屋敷は「光悦村」と呼ばれた。

吉野太夫は六条三筋町の遊女、和歌や茶道・香道をまなび、名妓と称された。豪商、文化人の佐野紹益に身請けされ、妻となる。

宮本武蔵は剣術家、美作または播磨の生まれ。京都へ出て、剣法家として名のあつた吉岡一門に挑戦して勝利をおさめた。剣法にてんいちりゆう 「二天一流」を創始、剣法理論書『五輪書』を著述した。彼をモデルとしてたくさんさんの小説が書かれたが、吉川英治の『宮本武蔵』がいちばん有名。

安楽庵策伝は浄土宗の誓願寺の住持。佛教の教理を滑稽話、笑話の手法でひろめようとして多数の作品をつくり、一冊にまとめて『醒睡笑せいすいしやう』と名づけた。安楽庵は策伝の住房の名称。二十世紀の昭和年間のおわりごろ、安楽庵の跡地に「安楽」と名のる天麩羅屋てんぶらがあつた。

露の五郎兵衛は不特定の聴衆を相手に有料で落語を聴かせるプロの落語家として活躍した最初の人物とされている。祇園まへくわがはらの真葛原、四条河原、北野天神などで落語を披露した。北野天神の境内に「人艸ひとくせや 来た野（北野）

の露ろの五郎兵衛ごろうべいゑ」ときざまれた記念碑がある。五郎の落

語は『軽口露かろくちしゆがはなし』などに収録されている。

部長は大満足。

「ウーン、戦国京都の人気者勢ぞろい といったふうになってきたな。ひとりに決めるのは、たいへんだ、こりゃ」

たいへんだ、とはいうものの、楽しむ風情。

そこへ久次米純一が割りこむ。

「名前はわからないんですが、わたしが長年、この人物こそ と入れこんでいる人物があるんです。推薦して、いいでしょうか？」

「いいんじゃない、ですが、ねえ、部長？」

「名前がなければダメ、なんていう掟はない。しかし久次米くん、その男の……女かな……すがた、かたちはわかってるんだろうね。銅像のモデルだ、すがたもなし、かたちもなしでは手に負えない」

「男です。すがた、かたちは、こんなふう」

久次米が書類袋から取り出したA4の紙に彩色がしてある。

「この男が描かれている絵図を展覧会で観て、これこそ と思ったが、ガラスケースに納まって展示されていて、カラーコピーはとれない。色鉛筆でスケッチしただけだから粗末ですが、だいたいのところはわかる」

「おおっ！」

「部長さんじゃなくても、これには驚きます、無理ありません。なにしろ……」

「マッパダカとはいわないが、ハダカだからな！」

「ハダカ……まずいですか？」

「ハダカはダメという掟はない。われら一同、偏見なしに選定討議をかさねるうちに、このハダカの男こそイズモオクニに堂々と対抗できる、いや、オクニを凌駕する存在！ の結果になるかもしれん」

部長に激励され、どういう理由でハダカ男を推薦するのか、について久次米が説明をはじめめる。

「ケイチヨウ・クネン・ハチガツ……」

久次米が最初の十二字を読み上げたのを待ってましたとばかりに、岩本カヨコ、濃い桃色の舌先を唇のあいだにちょいと突き出し、左手の指先を舌先にあてて濡らしてデスクのうえの『明解・爽快 日本史年表』をめくっていたが、スーツと顔をあげ、目を輝かして発言した。

「豊国臨時祭礼ほうこくじらいですね、久次米さん」

「ええっ、ああ、そうですね。でも、岩本さん、どうして、なぜ、こんなに早く……」

「誉めてもらって嬉しいけど、なんということはないんです。イズモノオクニがはじめて京都でかぶき踊を演じたとされるのは慶長八年です。慶長六年から十年までの五年分、見開き二ページをいつもひらいて見ているから、年表を手にとつていいかげんにパラッとひらくだけで、五年分、見開き二ページが自動的にひらくんです。ひらきぐせ っていうのかな。ケイチヨウ・ハチネンがオクニのかぶき踊、ケイチヨウ・クネンは豊国臨時祭礼と、すーっと出てくるんです」

「その五年分を、いつも読んですか？」

「年表だから短い文章だけど、イズモノオクニの七文字をじーっとみていると、なんか、こう、浮かんでくるんです、オクニのまわりの光景が、まるであたし自身がそ

の場にいるみたいに、不思議！」

「慶長八年にオクニが踊ったのは四条大橋東詰、でなければ鴨川の中州とか？」

「小笠原恭子さんの『出雲のおくに』（中公新書734）には『当代記』記事が引用され、場所は書いてない。かぶき踊は評判になり、オクニは伏見城にも参上して、たびたび踊った　そうです」

「伏見城の、だれに？」

「徳川家康です。このときには家康の子で、もうすぐ二代將軍になる秀忠も伏見城にいたんですけど、秀忠は一度もかぶき踊りは観なかったそうです」

「オクニが家康に、　あなたのお城で踊らせてくださいな　って願ったのかな、そうして家康が　ああ、いいよ　って許した？」

「でしよう、ね」

いつのまにか、岩本カヨコが選定会議の主役みたいになってきた。

カヨコの名誉ではあるが、このまますすむと、久次米純一が提案した　ハダカ男　の件は埋没し、　オクニに敵^{かな}うわけがない、逆転事業はやめる！　の結果になりかねない。

これがラビットクラブの運命ならば諦めるしかないけれども、運命を知らないのが久次米の運命ならば、あまりにも残酷じゃないか。

だれか、いないのか、久次米が残酷の熱湯を浴びないように防いでやれるものは？

「岩本くんは、なぜ、どうして、イズモノオクニに熱中するのかな？」

部長の一言で、その場之全体が我われに返った。

その場の全体が我に返る。なんて文法の理屈からい
えばおかしい、まちがってはいるが、じっさいに。その
場の全体が我に返った。んだから、これでいい。

もちろん、岩本カヨコ自身も我に返って、

「ラビットクラブの銅像モデルがいつになってもきまら
ないので、あたし、焦っちゃったらしいんです。それで
ぐんぐんオクニに惹かれ、惹かれれば惹かれるほど魅力
的な女性なんです、イズモノオクニ！」

「そうだ、責任はわたしに、部長にある。ごめん、ごめ
ん、岩本くん、そして久次米くん、一同の諸君、さあ、
もどろうじゃないか、そのハダカ男に」

「ええと、どこまでもどればいいのかな？」

「慶長九年八月、豊国臨時祭礼です。それと、ハダカ
男の関係は久次米さんが説明すれば、わたしたちのモ
デル選定会議はスムーズにすすむはずです」

「では、久次米純一くん」

部長の指名によって久次米が説明した概略は、つぎの
とおり。

豊臣秀吉は慶長三年八月十八日、伏見城で亡く

なり、翌年に「正一位豊国大明神ほうこくだいみょうじん」の神号を贈ら

れ、阿弥陀ヶ峰の秀吉の廟所は「豊国神社とよくに」と呼

ばれることになった。

秀吉の子の秀頼は伏見城から大坂城に移って秀
吉の政権継承者となるが、政治の実権は徳川家康
が掌握する。

慶長五年、関が原合戦で西軍に勝った家康は大

坂城から伏見城に移り、慶長八年二月十二日に征夷大將軍に任じられた。

三月二十七日に親王・公家を伏見城にまねいて祝宴をひらき、四月四日には公家をまねき、三日にわたって能を催した。

伏見城では四月四日に祝賀の能が演じられ、能の付録としてオクニがかぶきを踊ったのではなからうか。

オクニの人気は沸騰、天皇の生母の新上東門院しんじょうとうもんたいの御所にまねかれて「ややこ踊」を披露した。はじめのころ、オクニは自分の踊をややこ踊と呼んでいた。これからさき、新上東門院はオクニの芸の強力な庇護者となる。

そして慶長九年、秀吉の七回忌が盛大におこなわれた。六年後（慶長十五）には十三回忌がおこなわれるが、九年の七回忌の盛況にはおよばない。

「七回忌の臨時祭礼の盛況を描いた『豊国臨時祭礼図屏風』がすくなくとも四種類あり、そのうちの一種が徳川黎明会の所有で重要文化財、徳川黎明会本の呼称があります。そのうちの、ほんの一部分、三人のハダカ男をぼくが色鉛筆でスケッチして、いまここで、こうしておみせするわけです……あーあ、ずいぶん長い説明になっちゃったなあ、お退屈さま」

それでも説明しきれないらしく、久次米は言葉を足した。

「『豊国臨時祭礼図屏風』を印刷し、説明をつけた美術書が出版されているのを知っています。ちかいうちに古書店で手に入れてご覧いただきますが、いまは、とりあ

えず、部分のスケッチで……ああ、部長、美術書の購入費の件、よろしく」
「承知した」

祭礼のクライマックス、それは馬揃・田楽・猿楽がおこなわれた八月十四日と、町々から贅を尽くした風流踊ふりゆうの巨大集団が繰り出した十五日である。

建仁寺から方広寺までの道筋に豪華な装飾の二百頭の馬が勢ぞろいした。前田利長が三十頭、福島正則が二十頭など、秀吉配下の大名の馬揃い。

十四日の馬揃いはおそかな儀式の性質が濃厚だが、それだけに十五日の風流踊ははじめから熱狂が予想されていた。

百人一組の集団が上京は三組、下京は二組、あわせて五百人がそれぞれの町組の巨大な団扇うちわを先頭にして、鼓・太鼓・笛の楽にあわせて踊り狂い、市中の所々に踊りを見物するための桝敷が二千三百もつくられた。

「で、その、三人のハダカ男はどういう資格、立場で登場したのかな？」

部長の問いにこたえて、久次米純一、

「無所属なんです」

「無所属？」

この時期の京都には かぶきもの とか いたずらもの とか呼ばれる——いや、自称した気配が濃厚なんです——が——あふれていた。関が原で敗れた大名の侍はつぎつぎとかくしゆ誠首され、太刀をさした浪人の姿で憂き世の路頭に放りだされた。

やることが、ない。

あつまって仲間をつくり、ことさら異様な服装をし、

ことさら長い太刀を肩にかついで市民を怖がらせ、富裕な町人を見ればイチャモンをつけて困らせて得意になる。徳川家康は厳しく処分したが、それがかえって火に油を注ぐ。

豊臣秀吉が天下を牛耳っていたあいだこそ威勢がよかったが、秀吉が没して政権が徳川へ移行しつつあるこの時期、かれらの前途は不安に満ちている。

ことさらの異様、ことさらの意地っ張りはみずからの手で不安を隠し、みえないようにする神経操作なのだ。

秀吉政権のころの、いつまでも続いて絶えることはないと思われた熱狂の景気、それを体験しただけに、前途に予感される天下の冷気をもとめたくない。「かぶきもの」「いたずらもの」の意地っ張りがそれだ。

「三人のハダカ男は……」

「おれたちは負けんぞ、これを見る！ の意地っ張りのしるしとして、ことさら長い太刀をひっかけ、ハダカになっっているんです」

「意地っ張りはいいが、この先の暮らしの目処は立たないだろう。人間は、ともかくも日々の暮らしを優先させなければ」

「かれらは人生の前途の安泰はあきらめている、長生きしようとも思わない。そのしるしに、ほら、この男の太刀の鞘に、たぶん象嵌の金文字、ぼくのスケッチでは読めませんが、展覧会でできたところでは 生き過ぎたりや 二十三 八まん ひけはとるまい って書いてあるそうです」

「ふーむ。八まん は八幡かな、八幡は軍神とされている」

「極楽か地獄の入口で八幡神に 思いつきり生きたかね？ と問われれば、胸をバーンと叩いて、 思いつきり、たっぶり！ と宣言するつもりだ」

「ハダカで生きて、長太刀ひきずりまわして、それが思いつきり？」

「仕方なくこうなったのなら泣き言ですが、かれらはそうじゃない、 みずから選んだ生き方だ と意地を張る理由がある」

「ふーむ……」

「いいですか、部長、三人のハダカ男は祭礼の神聖を犯す 狼藉者 とみられて、左右から腕をとられて抑止されていますが、抑止している連中…… たぶん祭礼を管理している妙法院の下級僧侶…… の顔をご覧ください、ぜんぜん精気がないでしょう。思いつきり生きてると、人生の百パーセントを管理され、目標もなしに、ただ生きてるだけ、この差なんです！」

ヒラの久次米が部長にたいして いいですか、部長と、まるで詰問の調子で口をきくのは上下の掟にそむいているが、部長自身、なんの不審も感じない。

不審どころか、久次米のほうに膝をのりだして、ウンウン、その先を、もっと早く と、詰問を急^せかしているようにさえある。

部長はハダカ三人男の存在の謎の解明に惹きこまれてしまった。

そう簡単に理解できるものではないとわかったうえで、だがしかし、これが理解できなければ、おれの人生、とんでもない損をする と、難問の壁のまえで立ち尽くし、興奮している。

ヒラの存在にすぎない久次米純一は難問解決にむかって提携する仲間のようみえる。

かぶきもの いたずらものは現代の世界各国の
軍隊組織の小隊長に相当する。

中流自作農レベルの家に生まれ、読み書きソロバン、
田舎剣術師にならった田舎剣法で生きていた。

ゆたかではないが、貧乏でもないから、とりあえずは
生きられる。

とりあえずは生きられる生ぬるい状況に飽きたころ、
飛躍できるチャンスがやってきた。

戦国である。

どこでも、かしこでも領地や特権をめぐる争いが起こ
り、争いはガチャガチャ、ドンドンの戦闘で決着する。

領主が持っている従来の軍隊組織は役に立たなくなっ
て、 かぶきもの いたずらもの におれのところ
の兵隊を使って合戦に勝利してくれんか と声がかかる。
いや、 かぶきもの いたずらもの になるまえの、
ちから自慢、剣術自慢の若者に、だ。

ちかごろ問題ばかり起こしている高等学校スポーツ部
のコーチ、顧問というのがこれに似ている。

生徒のクラブが試合に勝てばコーチの職は維持される
から、ただただ 試合に勝つ だけを目指に生徒を鍛え
る。シヨック療法としての 体罰 は、こういう状況で
はたしかに有効だ。

さて、戦国の争いに決着がついて、武術コーチや顧問
はクビになる。

大名の安泰をきめるのは武術コーチではなく、文官で
あり、商人である。

生きにくい、生きられないが、人生をやりなおすには
手遅れだ。

自分の人生の時間は長くない、こつ知ったとき、どう

するか？

それまでの人生のタイプによって、方向がきまる。

晴れやかな経験のないものは、人生の時間を一瞬でも長くしようとこころみる。健康の増進と維持に智慧を投資する。昨日より十分の一だけ少ない生活費で生きようと節約する。

晴れやかな経験があるもの——かぶきもの いた
ずらもの がこれ——は みてくれ を優先し、自分で
自分を納得させる。

片や、ヒラの久次米、ハダカ三人男の推薦にいよいよ
ちからがはいって、

「そのうえに、ですね、部長」

「おお、フンフン」

「ハダカ男三人とイズモノオクニは人生の場と時間を共通体験してるんですよ！」

「人生の場と時間……そうだ、慶長八年と九年の京都、まさに共通体験！」

ラビットクラブの銅像のモデルになりそうなハダカ三人男はオクニと共通の体験がある、だからモデルとして決定しましょう——これはラビットクラブが採用できない案であるはずだ。

ライバルのモデルと当方のモデルのあいだに共通する部分が濃厚なのは屈辱のはずだが、部長も久次米も屈辱とは感じない、どころか、洛中ライオンズクラブと対等になれそうな状況が嬉しくてたまらない。

「ハダカ三人男は有力な候補として、つぎの候補の検討に移ろう。しかし、だな、ハダカ三人男とはあんまり奇妙な名だ、外聞もよくない。なにかこう、意外であって、しかも印象の強い、とりあえずの呼び名はないかな」

「はちまん、ひけはとるまい と啖呵たんかをきるのを尊敬するしるしとして、どうですか、ハチマン三人男は？」
「いいね！」

つぎはだれかなと部長がきき、久次米が橋本ヒサシの顔をめがけてなにやらサインを送り、橋本の無言の承諾を得て——橋本は依然として逆転事業専任だ——部長におこたえもうしあげる。

「宮本武蔵、やりましょうか」

「いいね、宮本武蔵、巖流島の決闘！」

総務部の熱気もりあがったとき、

「中村錦之助、高橋英樹、三船敏郎、むかしは尾上松之助っていう俳優も武蔵をやったそうですが、松之助なんて、あたしぜんぜん……」

知らなくてもうしわけありませんと、岩本力ヨコがシヨンポリ、肅然の様子で智慧を出した。

「岩本さん、それ、いつのまに？」

橋本ヒサシがいう それ とは、岩本のデスクのうえの全五巻の文庫版『日本映画発達史』、著者は田中純一郎、発行は中央公論社。

「まえの部長さんにお頼みして、古本屋で買っていただけなんです。ずーっと本棚に置いていましたから、どなたの目にも触れているはずなのに、だれもお気づきにならない……第五巻に索引があつて、とても便利なんですよ、これ！」

「錦之助も三船も高橋も観た。片岡千恵蔵は名前は知ってるが、千恵蔵の武蔵は観たことがない」

『日本映画発達史』からひきだした知識を武器にふるまう岩本力ヨコにたいし、部長は最高年齢ゆえに豊かな映画鑑賞体験で対応する。

「三船の武蔵はすごかったそうですね。ざる蕎麦をたべているところへ、八エがブーンと唸^{うな}って飛んでくる。武蔵が箸をサーツと振ると、箸の先に八エが一匹はさまれている。武蔵は めんどくさいな、もー といったふうで箸の八エを捨てて蕎麦をたべつづけた、とか」

「八エって黴菌をうつすんでしょ、伝染病の心配はないのかしら？」

「橋本さん、まさか、武蔵がざる蕎麦を食いながら箸で八エを挟んで捨てる銅像を四条大橋東詰に……」

「とんでもない！」

からだをブルブルと震わして低レベルの疑惑を否定し、すぐに、

「武蔵がオクニを超越、いや、超越しないまでも対等でありうる才能、センス、事業、言動といったものはなにか、これを確認するのが先である……これでいいですね、

部長

「そうだよ。いつまでもざる蕎麦にこだわっちゃ、いかに」

宮本武蔵の美点、長所を整理してレジュメにし、選定討議の参考にする役をきめてはどうかと橋本専任が提案、部長が「そりゃ、いい。合理的だ」と称賛かつ承認したのをうけて、

「ぼくが立候補します！」

押しつけがましいところはぜんぜんなく、ほがらかに糸川益五郎が宣言した。

「諸君、糸川くんの自薦を認めますか？」

部長の提議が可決され、糸川が宮本武蔵の美点、長所を整理し、レジュメに書き出す役をひきうける。

「あ、ちよつと待った」

部長みずから糸川にむかい、

「宮本武蔵の子孫ですか？」

「ちがいます」

「二天一流剣法のお弟子さんですか？」

「ちがいます」

糸川が厳肅な雰囲気です。右手をあげて宣誓、かれのレジ

ユメが出るまで会議はひとまず休会。

宮本武蔵について糸川が考察した結果の箇条書きレジユメが提出された。

① 少年のころ、剣道家として生きる決意をかためた。

② 剣法のほかに生きる途があったか、どうか、わからない。

③ 京都へ出たのは剣道家として名をあげるため。

どのようなジャンルでも、名をあげる可能性の高いのが京都であった。戦国大名が京都へ出ようとしたのも、京都なら名をあげやすいから。つまり天皇の近く、ということ。

④ ライバルと規定したのが吉岡憲法。吉岡は染色（憲法染め）を稼業とするかたわら、剣法をまなんで足利將軍に仕えていた。つまり將軍の御用剣道家。

⑤ 染色業の工場、店舗は西洞院通四条だが、剣法の道場は現在の今出川通に沿う本阿弥光悦の本阿弥^{すし}辻子、能の観世座の観世町など、幕府御用芸能者の住居として指定された地の一郭だろう。

⑥ 武蔵が吉岡と試合して破った年や場所は確定できないうし、必要もないと思われるが、場所につい

ていささか強引な推測をすれば紫野雲林院町の今

宮神社御旅所おたひしよではないか。

⑦ 徳川の御用剣法家になるチャンスはあった。さまざまな術策を弄したと思われるが、大和の柳生家に先を越された。

⑧ 有力大名の御用剣法家の地位を得るために二天一流の理論を編み出し、宣伝材料とした。

⑨ 熊本細川家に雇われたいきさつ、あれこれ。

⑩ 徳川御用になれなかったプラス、マイナスはどうであったか？

⑪ 絵画の技量、「枯木鳴鶴図」こくもくめいげきずは有名。

「糸川くんが提出した材料をもとに、意見を出してください。われわれが、なんのために、このような討議をしているのか、そもそもの発端からかなり時間がすぎているので忘れたひとがあるかもしれない。そのひとたちの記憶を呼び返すためにも……」

依然として逆転事業専任の役の橋本ヒサシが手をあげて、部長が許可し、橋本に発言を促した。

「武蔵はなにをやりたかったのか、糸川さんが出した材料によるかぎりでは、武蔵は吉岡憲法が京都でもっている特権を奪いたい、すくなくとも否定したい、それだけだよですね」

「同感。そして成功したんですよ、かれは」

「勝ったんだから、ね」

「とすると、そのあとの武蔵の人生は、どういうことになるのかな？」

「吉岡を倒したんだから自分が剣法第一人者だと思ったとき、天下の政権は京都から江戸に移った」

「武蔵にとってはまことに気の毒な状態」

「徳川家の剣法指南の地位を手に入れるには江戸へ行かねばならない」

「宮本武蔵の東海道下り旅、これ、映画のタイトルにいいですね」

岩本力三、「あいかわらず、ほがらか、邪念がないからか。」

「ところが、江戸へ行ったら……」

「徳川家剣法指南の役は柳生家に先取りされていた、そうだな、糸川くん？」

「途中のこまかなところを省略すれば、そうです」

「可哀相だな、宮本武蔵、ひとことじゃない」

ああでもない、こうでもない、ないないづくしの堂々巡り。
たまりかねた橋本ヒサシ、

「あーあ、いつそのこと、群像といきましょう！」

「グンゾウ？」

「そうです、群像、複数の大人物の像を山盛りに組合せるわけです」

「ソレは、アレじゃないですか？」と新門友三郎。

「知ってるの？」

「JR鹿兒島中央駅前の広場でしょ？」

「ずばり、ソレ、アレ」

「橋本専任、出張旅費をいまずぐに出させる。いそいでくれよ、鹿兒島へ。明日の朝一番、夜は最終の航空便で日帰り」

(第7章・終)

第8章 「オクニ総員、江戸へゆく」

「おお！」

「こりやまた、なんと！」

「ソロソロと！」

「集めたね！」

橋本ヒサシがJR鹿児島中央駅前広場で撮った写真、約20枚がラビットクラブ会議室のデスクにバラバラと置かれ、総務部メンバーが上半身をのりだし、手にとり、顔に近づけたり、裏返して——裏にはなんにも写っていないけど——みている。

コンクリート製の巨大な果樹の枝に17人の人物像が貼りつけてある、そんな感じのモニュメント。

「モニュメントの名は 若き薩摩の群像、そのものズバリです。鹿児島市が昭和五十七年に 明治百年 を記念して建てた。高さは12・1メートル、台座部分は9・4メートル、作者は中村晋也」

幕末、薩摩藩士の五代友厚（しだいともあつ）が イギリス、フランスに留学生を派遣、最新のヨーロッパの学術知識をまなばせる計画 を藩に上申した。

藩の開成所の学生のうちから留学生を選抜する方針がきまり、市来勘十郎（いちき）など12名が選抜された。

発案者の五代友厚と、薩摩藩ではただひとり渡欧経験のある医師の松木弘安が顧問として同行。

幕府の無許可出国禁止政策は弛（ゆる）んではいるが、形式的には活きている。

一同は変名し、乗船地にいちばん近い甌島（こしきま）へ 出張

のかたちを装って鹿児島を出発、長崎在住のイギリス商人、トマス・グラバーの所有船オースタライエン号で香港にむかった。

病で倒れたもの、アメリカに渡って神秘主義キリスト教徒ハリスに意気投合したもの、農学と農業経営をまなんだもの、さまざまな経験を積んで三々五々に日本にもどり、多くは新政府の官僚になった。

「いちばん有名なひとは？」

「官界の地位の高さなら森有礼ありのり、最初の文部大臣です。

明治十八年（1889）、帝国憲法発布の日に暴漢に襲われ、死にました」

「『広辞苑』には1889年としか書いてありませんが、帝国憲法発布は二月十二日ですから、森有礼が刺されたのも二月十二日です。亡くなったのは翌日、二月十三日です」

補足説明はもちろん岩本カヨ」。

「五代友厚も 若き薩摩の群像 のひとりなのか、知らなかった」

「その五代って？」

「薩摩では西郷隆盛や大久保利通が政治改革の熱風を吹かしていたんだが、実業の風も吹いていた。薩摩の実業の風を吹かしたのが五代友厚」

「土佐なら後藤象二郎や岩崎弥太郎」

「五代ははじめは政府の官僚だった。官僚の経験と人脈を活かしていわゆる 政商 の道をすすんだ。大阪にいろいろの実業組織を設立し、関西実業界の大立者といわれるまでになった」

会議室に冷たい空気が流れた。

遅咲き櫻の季節、春というより初夏の感触があり、部屋の窓はあけてある。

しかし、会議室に流れたのは外気じゃない。

部長のほか七人、全員がほぼ同時に、体内に薄気味わるい冷気が発生したのを感じ、からだを揉みほぐすようにして冷気を体外に放出した、その結果の会議室の冷気なのだ。

部長が率先して冷気を言葉に変換した。

「また、ダメか！」

「ダメ、ですね。申し訳ありません、部長」

「あなたのせいじゃない、あやまることはないさ。こういう絶望は予感していた。諸君もそうだろう、鹿児島城市群像モニメントが京都の四条大橋東詰南に建立すべきわれらの銅像の参考になるはずはない、って」

深刻な不安の表情で質問を發したのは海原五三郎、

「ダメなのがわかっていて、なぜ、部長は……」

橋本ヒサシを鹿児島へ出張させたのか、安くない航空券まで買ってやって——海原の疑問は、その場の、ほかの全員にも共通している。

われらの共通の疑問に部長がなんとこたえるか、みんな、緊張して解答を待つ。

「薩摩に、鹿児島に、深いゆかりがあつて、いちばん有名な銅像といったら、なんだ？」

部長は部下の総員の疑問に直接こたえるのではなく、新たな疑問をかさねて部下の思考を深化させるテクニクを使った。

一階で起つた事件の意味を解けないときには二階にあがつて一階を観察する、このタイプのテクニクだ。視点を変更して新しい眺望が出現するのを期待するテクニ

ツク。

部長自身が意識しているか、どうか、このとき、この場で判断はできないが、ともかくも高度なテクニクだ。組織の人事教育に効果があり、広い意味の人間教育にも役立つから初等、中等学校教育のカリキュラムの支柱として採用されるのが望ましい。

だれも手をあげない。

ズバリ名答を出して、 どうだ！ と胸を張りたいに、みんな、できない。

できないから、総務部室は静寂な空間となった。

ならばと部長、メンバーをひとりずつ、片^{かた}端^{ばじ}から指名する作戦に出た。

「橋本くん」

「わかりません」

「岩本さん」

「ダメです」

「海原くん」

「もうすこし、時間をください」

「巨理くん」

「質問は理解できたつもりですが、解答を言葉で表現できないんです」

「糸川くん」

「胸がムカツクんです、吐きそうです、退室させてください」

「新門くん」

「辰五郎の件は……」

「久次米くん」

「クメノヘイナイ……関係は……ない……ですね」

全員の解答不能を確認し、早くも中腰で退席しようとする

する系川を部長は、「まあ、ちょっと待って」と優しく制し、満面の笑みで、

「東京は上野の山の……」

「そうかつ、西郷隆盛だ！」

全員、一瞬、同語を叫んだ。

やわらかな笑みはそのまま、部長が説明する。

「鹿児島中央駅前広場の 若き薩摩の群像 17名はそれぞれ、東京上野の西郷隆盛の銅像の分身とかがえらる。孫悟空が自分の毛を抜いて息をふきかけると、無数の悟空があらわれる、あれだ」

ひといきおいて、部長、

「西郷が薩摩出身なのを知らんひとはなかるうな？」

17名のうちには西郷と思想信条を別にするひともありうるわけだが、薩摩人を意識して生きるかぎり、西郷の分身とみられるのは避けられない。

反対に、17名を集めて一個にすると西郷隆盛となるのも、これまた避けられない。

「そこでわたしは、結論を出した。いや、結論を出さねばならんと決意した」

結論を出さねばならん と部長は決意した、だから部長の結論はいますぐにも、この場で表明される。そうでなければ部長はウソをついたことになる。

部長は舌先で上と下のくちびるを濡らしている。だれの、どんな場合でも、結論表明はくちびるが乾くものなんだ。

総務部員一同、部長のくちびるを凝視する姿勢をとった。

「やめるよ」

結論表明の気分を文章にするとき、たいていのケース

では語尾に！をつけて強調する、つけないと決意の気分が出ない。

だが、ラビットクラブ総務部長の決意表明はあんまりにも軽快、いや、むしろ、お粗末レベルだから、！をつけるのと針小棒大の滑稽、過剰表現のミスを犯してしまふ。！はつけないのが無難だ。

それにたいし、部長の決意表明を拝聴した部員の意外感、とつぜん襲われた脱力感のレベルは相当に高いから、これはもちろん？をつけるなければならない。

だから、

「はあ……？」が正しい。

総務部員のうち、岩本カヨコだけは部長の決意の内容の、およそのところを察していたのかもしれない。

部長の やめるよ が終るのを合図にカヨコは狭い総務部室のなかを東奔西走、七個のデスクを 口の字 の形につなぎ、缶ビールに耐ハイに泡盛、阪神タイガースの試合のABCラジオ実況中継で人気沸騰のコマーシャル マルエスの恋スルメ の小袋を七つ、サッサーッとデスクにならべ、

「焼酎はふつうの耐ハイですが、泡盛はいつもより

ワンランク上等の三年古酒ケイスイ、これでいいんですね、部長

さん」

ニッコリの笑みのうちに、カヨコの質問にたいするこたえ——いいんだよ、それで——が含まれているのを無言のうちに承認、

「午後の三時か、ちようどいいな！」

これまた愉快、颯爽の音調で全員に宣告した。

いまは午後三時、通常勤務の終る六時まで、たつぷり三時間を経費会社持ちの宴会をやる、諸君よ、おおいに楽しもうではないかと提案したのである。

「宴会のテーマは総務部解散、いや、総務部が解散するわけじゃないが、われわれ全員が辞職……いや、これは退職ってというのが正しいかな……まあ、名前なんかどうでもかまわないが、いなくなるんだから、ラビットクラブの総務部はしばらく姿を消す。そうだ、消滅だ、消滅を喜び、かつ朗らかに追悼する春の小宴である」

そこで部長、不満の表情で、

「じつをいうと、わたしには諸君全員の辞表をとりまとめる職責があるはずなんだが、忘れていた。企業組織における人事の手続として、こりゃ、まずかったかなあ？」

亘理勇一郎が、

「かまわないですよ、部長。どうせ、みんないっしょにやめるんだから」

そして、

「橋本専任さん、今日けふ今いま夕ゆふの記念として、なにかひとこと」

逆転事業専任の橋本ヒサシ、亘理の指名に応じてたちあがり、おもむろに

「洛中ライオンスクラブのイズモノオクニ像に対抗、あるいはオクニ像を凌駕しようと、われらラビットクラブ総務部一同、決起したわけだが、負けた。あっさりと負けたから、湿ぬっぽい敗北感ゼロなのがなによりの救い、いや、なによりの誇り。みなさんも、たぶん、そうじゃないかと察します。敗北をみとめたいま、この瞬間の、スッキリした気分の楽しさは、ほかの、どのようなものにも比べられない。あらためて宣言します、負けてスッ

キリ、ラビットクラブ。オクニさま、あなたの偉大は永遠なり！」

京都の壬生川通仏光寺はさほど繁華な地ではない。

それにしても、ゆき交^かう車の騒音で、ふつうなら、橋本の控えめな挨拶は聴きにくいはずだが、この日だけは総務部室にピシッと浸透した。

だれかが音頭をとったわけではないのに、一同、しずかに、期せずして同時に立ちあがり、

「イズモノオクニさま、あなたの偉大は永遠なり！」

斉唱して、ラビットクラブ総務部の、短いが、しかし輝かしい歴史を閉じたのであった。

四条大橋東詰の北、イズモノオクニ像のまえに敬^{けい}虔^{けん}な様子で額^{ぬかぶ}衝^ついていた女三人、やおら顔をあげ、

「アーツ！」

絶叫を突きつけられた別の男と女、これまた絶叫で驚愕・感激・意外・幸福の気分を返そうとしたが、そっくりそのまま同じでは格好が悪いとかんがえるだけの余裕はあった。

「キヤーツ」

ちょっとした変化形でお返しをし、いくらか気分がおちついたところで、

「橋本ヒサシさん、おひさしぶり。それも、オクニ先生の像のまえでお会いするなんて……」

土佐林悦子、顔の朱色がすこしずつ濃くなる。

ヒサシに寄り添う感じの女は初対面と気づいた竹田蘭子がちかづき、

「はじめまして。わたしは竹田蘭子、あちらは土佐林悦子、こちらはオクニ先生没後の弟子の三人目、服部アヤ

「」

「ランちゃん、エツちゃんのお名前は橋本さんからうかがっています。岩本カヨコです、よろしく」

ここまではスムーズにきて、ここで行き詰まる。

双方、いいたいことがある。

それ自体はむしろ楽しい話題になるはずだが、こちらのいいたいこと、あちらのいいたいこと、そっくり同じじゃないだろうか、双方に共通の思惑が搦ち合^かって、いいだすのを恐れている。

二者がたがいに競っているとき、価値あるものの開示は二番手が優位となるしきたり、または誤解のしきたりがあつて、双方が同時に同じ心境に陥^{やっかい}っているから厄介だ。

そこへ、

「エツちゃん、ランちゃん、お待たせ！」

橋の上を西から東へ、小走りにちかづく男の声。

これぞ第三者の登場。

どんなに困難な状況でも、第三者が登場すれば、なんとか解決の目処^{めど}はつく。

よかった！

やってきたのはタツンド、目方のありそうな紙の束を脇腹に抱えている。

「喜んでもらえるのはいいが、なにしろ、ヒエーツ、重くて」

橋本ヒサシと岩本カヨコ存在に気づかないまま、タツンドは紙の束をどさりと落とした。

「あら、それ！」

束を指さし、叫んだカヨコ、自分の紙袋から新聞紙を

ぬきだして、

「今朝の京都新聞、でしょ、それ！」

タツンドが落とした紙の束の横におき、「あたしも今朝の京都新聞、持ってるの」とくらべてみせる。

2013年（平成25年）2月19日の京都新聞、朝刊の一面左上の記事と写真、三個の見出しはかなり派手。

「鴨川河川敷に阿国ステージ」

「出よ型破りパフォーマー」

「府、整備へ 四条河原など候補地」

オクニの銅像の右前面から撮ったカラー写真に添えてキャプション。

「鴨川ベリにある阿国像。京都府が河川敷で自由なパフォーマンスに使える『出雲阿国ステージ』を整備する」

「イズモノオクニにたいする政策的関心は京都市よりも京都市のほうが強いんだなあ」とタツンド。

「鴨川を管轄するのは京都市じゅなくて、京都府なんだろう」と今川泰彦。

「まえの京都府知事の荒巻禎一さんが銅像建立のいきさつを書いたゆかりもあるんでしょう」と岩本カヨコ。

感想をのべた直後、カヨコが「しまった、大失敗！の表情を顔色に出した。

ほかのものは気がつかないが、失敗をとりかえさなければならぬと焦るカヨコは勇気を出し、

「ごめんなさい。服部アヤコさんが発言する番なのに、

あたし、アヤコさんを抜いてしゃべっちゃった！」

腰をかがめて無礼を詫びるカヨコ。

アヤコは膝をわずかに曲げて腰をおとし、あざやかな

手つきで懐から出した扇を右手でひらき、扇の先で地を掃うように左から右へ角度の強い円弧を描いて詫びをうけいれる仕草とした。

カヨコのからだだが、うしろへ反りかえった。

アヤコの仕草の風圧——そういうものがあるならば——に耐えられず、カヨコのからだだが反りかえったのだ。大きくひらいたままの顎が、圧倒されたカヨコの驚愕をしめしている。

ちょうど、そのとき、

「アヤちゃん、お手柄！」

暖かいのに、じつは鋭い声が天から降ったかとおもってももなく、

「まッ、オクニ先生！」

台座の上のオクニの銅像に酸素と血が通ったにちがいない、生身のオクニがするすると降りて、地をすべる足どりで一同のまえに立った。

悦子と蘭子、成瀬父子と今川が敬礼の姿勢をとったのは当然として、服部アヤコの敬礼の姿勢は格別に妖艶、傲然、そして華麗。

師の没後の弟子としての一座の一同が敬礼の姿勢をとるのは当然ながら、当然以上のものではなかった。

素人ならともかく、プロの芸人が師に敬礼するならば格別の奮闘の結果の敬礼の姿勢をとるべきであった。

そのなかで、服部アヤコだけは格別の芸をみせたとオクニは認めた。格別であると認めたからこそ、オクニは台座から降りて、

「お手柄！」

褒賞の声をかけた。

声をかけねばならないと判断したから、オクニは台座

から降りて地に立った。

ひとびとがオクニとオクニの弟子たち、成瀬父子や今川、橋本ヒサシと岩田カヨコをかこむ。

四条大橋の東詰北、ひとびとのが輪が大きくなる。

ひとびとの視線は、まず、地に立つオクニに、つぎに台座に当てられ、その結果として啞然呆然の感情のかたまりとなる。

なぜか？

オクニは台座から降りた。

台座の上はカラというか虚空というか、物体は存在しえないはずなのに、銅像のオクニは依然として、しっかりと台座の上に存在している。

右手に扇をひらき、左手で太刀を翳し、斜め上に視線を突きつけて。

—— はあ、わかった！

—— でたらめをいうな。これほど珍奇でミステリアスな光景の秘密が、あんにわかるはずはない。

—— それが、わかるんだ。いいか、台座の上のオクニさんの銅像はヌケガラ、ひとの女のヌケガラ。地に立っているのが脱皮した生身のイズモノオクニなのさ。

—— ふーん。そういえば、そうかな。

—— 銅像はすべてヌケガラである、そう定義してもいいんじゃないか！

オクニの指揮で、弟子オクニ三人が踊る。

オクニは北野天満宮の許可を得て、境内に常設の舞台を確保している。

京都におけるオクニ一座の人気は オクニといえれば北野 と連想されるほどだから、四条河原にこだわる必要

はないが、それでもオクニは四条河原にこだわる。

なぜかというと、遊女歌舞伎を名のる新しい座が四条河原になかば常設の舞台をつくり、オクニに対抗し、のりこえようとしている。

踊りだけなら、遊女歌舞伎に負けぬ自信がある。

だが、自信だけでは優勢をたもてない状況になってきた。

三味線である。

芸を飾る伴奏音楽、いや、ときには芸に先立ち、芸を誘導する三味線。

琉球から九州經由で京都にもちこまれた三味線、高低の変化の激しい弦げんの響きの魅力は芸能好きの庶民の耳にしみこんで、虜とりこにした。

オクニの舞台にも楽器は登場するが、笛か鼓、あくまでも芸の飾り、お供えそなでしかない。激しく空気を揺する

三味線には敵かなわない。

オクニが自分の銅像から 脱皮 して生身のオクニになり、いちばん新しい没後の弟子の「アヤ」の身振りをお手柄！」と称賛したのは、四条河原に屈強な男たちが登場、ドカドカと音をたてて遊女歌舞伎の舞台を架設しはじめたからだ。

遊女歌舞伎の芸人はもっぱら遊女である。

素人ではなく、夜は遊廓で客を接待する遊女。

男優もいるが、俳優の主力は遊女である。

三味線伴奏の遊女の群舞、それが遊女歌舞伎。

——トツカン、トツカン、

遊女歌舞伎の舞台を架設する工事の音が四条河原に響くと、あっちこつちからひとびとがあらわれて、できあがる舞台をとりかこみ、踊りがはじまるのを待つ。

成瀬父子、今川泰彦も、負けるものとオクニ一座の舞台づくりにかかるが、道具立てからして遊女歌舞伎に及ばない。

三味線が鳴り、遊女の女優が舞台にあらわれれば、ほとんどの観衆が遊女歌舞伎にあつまると予想される。

そうはさせまいと思うからこそ、成瀬龍人は京都新聞社にとびこんで2013年（平成25年）2月19日の京都新聞の朝刊の束をもらいうけ——配達がおわったあとのこのりの新聞紙はタタダ——四条河原の群集に配って歩く。

「由緒のあるのは、ほら、京都新聞さんもおっしゃるよ
うに、オクニ歌舞伎なんですよ！」

宣伝して、遊女歌舞伎に押されっぱなしの劣勢を挽回しようとする。

成瀬龍人や今川泰彦といっしょに橋本ヒサシも岩本力ヨコも朝刊を配って歩く。

「はい、どうぞ、オクニです」

「今日は新しいセリフつきの踊りをおみせするはず。もう一歩でも二歩でも、舞台のちかくへ、どうぞ」

勧誘する。

配られた京都新聞をにぎりしめ、オクニの舞台に魅入り、離れようとしないひとびとはすくなくはない。

三味線伴奏の遊女歌舞伎が人気をとろうと、とるまいと、オクニはオクニ、なのだ。

初代オクニ、いまは台座の上の銅像の身にもどり、高

い位置から没後の弟子三人の踊りと、三人の踊りに魅せられる観客の様子をみている。

イロの好みはイロえらび

(男役の蘭子 舞台中央の立ち姿 太刀を床に突き立て 左右を見まわして女をさそう)

あたしがえらぶ

(舞台の裏の遊廓……のつもり……から姿をあらわした遊女役の悦子 あたしをえらべるものなら選んでご覧 と啖呵を切る風情)

あなたがえらぶ

(アヤコがあらわれる 蘭子が近寄る 振られそうになった悦子 アヤコと蘭子のあいだに割ってはいろうとする 悦子の攻撃をさらりと交わした蘭子とアヤコ イロえらびの勝利者のしるし 手をつなぎ 胸を傲然と張って 退場)

えらんで

えらばれず

(トランド はだけた衣 滑稽な風情で登場 あとを女が追いかける 遊女に渡すカネの用意をしないなかったらしい カネの替わりに衣を脱いでゆけと迫られ あれこれのやりとり トランドはほとんどはだかで舞台を去る)

イロの好みはイロえらび

イロの好みはイロえらび

(俳優総員 そろって登場 愛嬌をふりまく)

——わたしの没後の弟子のオクニの芸は満点、なんの不足もないのに、オクニ一座の芸を観たがるより、遊女歌舞伎を観たがるひとの数が多い。時代がこうなったのだといえればそれまで、遊女歌舞伎に群がるひとびとに愚

痴をいうつもりはない。それにしても――

銅像のオクニは恐れている。

――わたしは江戸へ行った。徳川さまがお造りになる新しいお城の町の江戸なら、オクニ一座は遊女歌舞伎に負けない新しい芸のちからを身につけられるのではないかと、イチかバチかの勝負のつもりで江戸へ行った。

オクニは江戸へ行った。

そして、負けた。

遊女歌舞伎に負けたのではない。遊女歌舞伎は江戸までは足を延ばさなかった。

江戸へ行ったのは能の観世かんせや金春こんばるだ。

オクニは観世や金春の能に負けた。

いや、能を贖罪にしてオクニの芸の素晴らしさを認めない役人の怠慢、鈍感、悪意に負けた。

――江戸へ行った、あれが失敗だったのか？

――でも、あのまま北野天満宮に居すわっても、遊女歌舞伎に負けない保証はなかった。

――わたし、初代イズモノオクニは、いい。だけど、わたしを慕って没後の弟子になった悦子や蘭子、アヤコの将来は明るくはない、気の毒だ。

――あの女こたちには芸のちからがある。あたしより、

はるかに上手うわて。彼女たちの芸を、彼女たち自身のために活かせる途を遺のこしてやる、それが初代オクニ、わたしの役目なんだ！

自分の役目をはっきりと意識したとき、オクニは決心していた。

――彼女たちをつれて、もう一度、わたしは江戸へゆきます！

三日あと、夜になって、オクニはまた台座から降り、生身のオクニになった。

台座立っているのは前とおなじ、だれかがいうところのヌケガラのオクニの像だ。

生身のオクニは忙しい。

決意を、正確に、没後の弟子とサポーターの男たちに伝えなければならない。

オクニの顔が赤い決意に染まった。

察した悦子と蘭子は、もとラビットクラブ総務部員の橋本ヒサシと岩本カヨコにつたえた。

——オクニさまが、なにか、大切なことを、あたしたちにおっしゃりたいみたい。

ラビットクラブ総務部を辞めたヒサシとカヨコ、その後の居場所を知らないからちよつと苦労したけど、

「ピーンときたのよ、あたし」と蘭子が先にいい、

「ウフフ、エツちゃんのピーンはあたしのピーンとおなじ、じなやいかな、たぶん」と悦子がうけて、

それじゃ、オイッチニーのサン！ でいっしょに発表しようかと、これは言葉で打ち合わせたわけじゃない

が、

「いづもや！」

ずばり当たり、腹をかかえて大笑い。

四条大橋の西詰、先斗町KOBANの北隣、うなぎ料理のいづもやで働いているにちがいないと見当をつけ、

行ってみたら、ふたりいっしょに、うなぎ井や鱧重つなごりゅうをは

こんでいた。

「ずーっとここで働くつもりなら、それでいいんだけど、橋本さんがあたしたちにオクニ先生のことを教えてくれたのがあたしたちのドラマの、そもそものはじまり。は

じまりのご縁で、いっしょにオクニ先生の大切なおはなしをきくのもいいんじゃないかな」

「いづもや　のうなぎ丼も鰻重も美味の二乗、お客さんによるこんでもらえるのは嬉しいけど、オクニ先生のおはなしをきけるなんて、天にも登る心地っていうのがこれなんだ、きつと。ヒサシ、行くでしょ」

「行かずにいられるものか、カヨコ」

ふたりは　カヨコ　ヒサシ　と呼び合う仲だ。

夜、人通りのすくなくなった四条大橋東詰で成瀬父子、今川泰彦、悦子と蘭子とアヤコ、新入りの橋本と岩本が生身のオクニを囲んで、オクニのひそひそこえの決意表明に耳をかたむける。

決意表明というと、ふつうは大声、大声が絶叫となり、さらにレベルアップすると高性能マイクロフォンが登場するが、オクニの決意表明はあくまでも静かに、ひそひそと。

オクニの決意表明をききながら、竹田蘭子、

——この日、この時のオクニ先生のおはなしを後世につたえるのがあたしの役目なんだ！

ここに、きめた。

蘭子の記憶にのこるオクニの決意表明の言葉と表情はつぎのとおり。

「わたしの一座は慶長十二年（1607）に徳川さまの

江戸へゆき、神田明神の前の、かんじんのつ勸進能の常設舞台で踊りました」

寺や神社、橋などの公共施設を新設、修理する費用を調達する名目で公権力の許可をうけ、演芸をみせて観衆から料金をとる興行、これを勸進といった。能を興行するなら勸進能、猿楽なら勸進猿楽。

「勸進芸能のために常設される舞台は能や猿楽、田楽のための舞台であり、わたしのかぶき踊のような新しい芸能は神聖な目的のための勸進興行をする資格をみとめてもらえない。得^{えたい}体も由来も知れぬ汚らわしい芸能、そのようにしかみてもらえなかった」

オクニ先生のお顔が、怒りの気分で、おそろしいほど真っ赤に染まった。

「オクニ先生、神田明神で、どんなことが起きたんですか？」

ほかのオクニたち、成瀬さん今川さん、橋本さん岩田さん、みんなの胸にこの疑問が満ちたと思っただから、あたし、みんなを代表する気でオクニ先生に質問をぶつつけた。

先生に質問をぶつつけるなんて無礼このうえないことだけど、あのときのあたし、先生に叱られても仕方がない、質問しないわけにはいかないと、後へ引けない気持ちだった。

オクニ先生は赤い舌先で、くちびるを濡らした。

先生ご自身は気づかなかったと思う。

くちびるを濡らさずにはお言葉が出ないほど緊張なさっていたにちがいない。

「あなたたち自身の目でみてほしい。神田明神の前の勸進能の常設舞台のまわりで、なにが起きたのか、あなたたち自身の目で、しっかりとみてもらいたい」

思わず知らず、あたしの言葉は強くなった。

「ならば、あたしたちは、みんないっしょに江戸へゆくわけですね？」

「勇気を出して……勇気、みなさん、あるでしょう」

「勇気を出しまーす」

エッちゃが音頭をとって、あたしたち総員の江戸ゆき

がきまった。

もちろん、オクニ先生もごいっしょ。

(8 章 ・ 終)

終章 「江戸城で踊るオクニ」

あたしたちは四条河原にあつまった。

だから、あたし、四条大橋東詰からスタートして江戸へゆくとはかりおもっていたけど、ちがった。

オクニ先生、きつぱりと、

「四条大橋から江戸へ行けないことはないけど、あづま路の門出がとでにいちばんふさわしいのは三條大橋」

四条から上流の三條の橋をみやりながら、先生、

「太閤秀吉さんは三條の橋を立派で頑丈に作り直し、小田原征伐に出陣した。馬に乗り、つくりヒゲをなびかせて三條大橋の渡り初わためそをやり、小田原の北条氏をやっつけて凱旋した」

そして先生、クスツとお笑いになった。

「あたしたちが太閤さんの縁起にあやかろうなんて、おかしいけど、ね」

そしてまた、

「強いヒトのちからを頼りにするのは気分が悪いけど、縁起にあやかるのは悪くない。縁起にあやかって、良くなるか悪くなるか、あたしたち次第なんだから」

諭さとす口調、川越の中学の国語の男教師にそっくりの言い方。

四条河原から右岸を歩いて三條河原、三條大橋にかかるところで、オクニ先生、

「そこで、停まって」

あたし、そのとき、ふしぎな感覚に刺激された。

これまでの人生で経験したことのない、ほんとうにふしぎな感覚。

たぶん、これが 神秘 なんだ

不思議な感覚のスイッチをオンにしたのは、あたしたちの 脚が停まった 記憶。

ずいぶんむかし、四条大橋東詰を南から北へわたるとき、エツちゃんの脚が急に停まった、あれがこの物語のそもそものはじまりなんだもの。

オクニ先生の言葉であたしたちの脚が停まった。

エツちゃんの脚が停まったのは四条、あたしたちの脚が一斉に停まったのは――停められたのは――三条。

四条と三条と 条 がちがう、そこにもなんか意味がありそう。

古い物語の終り？

新しい物語のはじまり？

「ランちゃん、今日こんにち、ただいまから、あんたはイズモノ

オクニなんですからね。オクニの没後の弟子じゃなく、

ほんもの……ヘンな言い方だね、ほんもの、なんて

……初代オクニですよ。しっかりしてね！」

驚いて、からだが震えた。

あたしは驚いた。

ほかのみんなはどうか、っていうと、ぜんぜん驚かない。

ニコニコ、ほがらかに笑ってる。

みんなの、ほがらかな笑いのほうに、あたし、もっと驚いた。

そうかつ、みんな、知ってたんだ！

前まえ以もつて先生がみんなに説明し、みんながみんな 賛

成です とこたえて、あたしがほんものの初代オクニになるときまった。

—— おうけすべきである！
即断した。

遠慮する場合じゃない。

遠慮なんて、そんな格好の悪いこと、あたしが、竹田
蘭子が、やることじゃない！

「おうけします、先生、みなさん」

胸を張り、顔を斜め上にあげた。

左手に太刀、右手に扇をもってるつもり。

あそこにみえる、四条大橋東詰北のオクニ先生の銅像

の真似^{まね}。

こういう真似は元気が出る。

東山がみえる。

あの山の、ずーっと向うにアツマがある。

「行くよ、アツマへ、江戸へ！」

叫んだのはあたしなのに、あたしの声じゃないみたい。

そうか、これ、オクニ先生のお声なんだ。

三条大橋の西詰から東詰にわたったとき、オクニ先生
の姿がみえないのに気づいた。

そうだ、あたしたちが江戸へ出発したのを見届けて、

先生は四条大橋東詰の、ご自身のヌケガラのなかへおも
どりになった。

エツちゃんとあたしの家出、京都までは新幹線。

家出の新幹線の東海道の景色、ほとんど記憶にない。

無理もないよ、人生で最初の家出、途中の景色を眺め
る気持ちの余裕はないから記憶にもものこらない。

こんどは、ちがう。

みんなといっしょに下る東海道は賑やかで、楽しい。

徳川さんの大勢の家来——にちがいない侍——が忙し

そうに、張り切って東海道を上り、^坂下る。

三河そだちの徳川の武士が、太閤さんによって、それまで縁のない武蔵の江戸へ移住させられた。

新しい土地の水と空気のおかげで、徳川の主と家来はゆたかに、強くなった。

太閤さんもこれには驚いたろうが、後の祭り、息子の秀頼さんの行く末を案じながら死んだ。

徳川さんが秀頼さんを呑みこむつもりなのはまちがいない。

秀頼さんは、これ、気づいているんだろうか？

戦争になれば、秀頼さんは勝てないだろうなと、世間の噂。

あたしも、そうおもっ。

どっちかといえば秀頼さんに勝ってもらいたいけど、こればかりは、どうにもならない。

これ、いうのを忘れてたけど、成瀬タツンドさんもあたしといっしょにオクニ先生から、

「今日からほんとうのナゴヤサンザですよ」

はつきり告げられた。

これまでサンザの役をしていたお父さんの虎人さんはお役御免、交渉やオカネのことを担当する。

ほんとうのサンザの龍人さんが、ほんとうのオクニのあたしに念を押す。

「徳川家康、いまは將軍の座を降りて大御所ですが、浜松の城にいたむかし、オクニさんは家康に招かれ、いつても、まあ、オクニさんが強引に願ったからでしょうが、ややこ踊を演じたことがあるんだけど、おぼえていますか？」

オクニ先生がほんの子供のころに踊ったのはかぶき踊じゃなく、ややこ踊と呼ばれていた。

「おぼえていますよ！」

はつきりと答えられたのが、われながら不思議。

オクニ先生の没後の弟子の竹田蘭子の存在は希薄になり、そのかわりに、ほんものの初代イズモノオクニになりきりつつあるんだろうな、きつと。

「家康、踊りを楽しんだようにみえましたか？」

これもよくおぼえている。

「ニコニコと楽しんでましたよ」

「能は、どうでした？」

「あのころの家康さんの雰囲気から察すると、能を苦手としていたんじゃないかな」

「京都に暮らした経験がないと能はわからないっていうそうだけど、やはり、そうなんだ。浜松の城主のころの徳川さん、京都に住んだことはあるけど、織田信長や太閤さんと呼ばれて出ていっただけ、京都の住人じゃない。だから、能よりは、子供のころのイズモノオクニのややこ踊がお好みだった」

サンザさん、子供のころの　なんて強調して、あたしをからかって悦んでいる。

「いまは、ちがう」

「ぜんぜんちがう。家康さんの天下は信長や太閤さんの天下とはくらべものにならないほど広くて、大きい」

「となると、かぶき踊よりは能、猿楽」

「能を鼻唄にする気はなくても、鼻唄にしている風ふうを装

えばいい。それがやれるからこそ家康さんは大物おおもの」

「二代目の秀忠さんは、かぶき踊や能について、どんな？」

「サンザさんともあるうひとが、お忘れ？」

「お忘れって、なにを？」

「あたしが伏見のお城で踊ったのを、家康さんは二〇二〇と笑いながら楽しんでいたけれど、秀忠さんは姿をみせなかった」

「忘れてた。二代目の秀忠さん、お父さんとはちがってかぶき踊は好きじゃない」

「能が好きなのでもなさそうだけど、天下の主の二代目となってみれば、能が好きじゃないとはいえない」

「江戸でかぶき踊を広めるわれらオクニ一座、前途は多難」

「多難は覚悟のうえ、前途が多難だからこそ、いまのうちに、アツマで、ほんの少しでもかぶき踊を広めて根を広げておく、それが初代オクニ、あたしの計画」

あたし、くちびるをギョツと噛みしめた。

寒気に耐えるため、ばかりじゃない。

あたしたちの江戸到着と前後して、観世かんせと金春こんばるの太夫が京都から江戸に下った。

慶長十二年正月六日、江戸は大地震におそわれた。

江戸ばかりで他国へひろがらなかったのは不幸中の幸いだった。

七日から九日まで、神田明神で催された観世と金春の勧進能には地震の恐怖を忘れたい気分もあって庶民が芝居につめかけた。

だが、なんとまあ、初日の七日に神田の下町が火事に襲われ、芝居を埋めた庶民の観衆はわれささきにと逃げてしまった。

あたしたちは神田へは近寄らなかったから火事さわぎにまきこまれなかったけど、秀忠さんは火事を恐れず演技をつづけた能役者の勇氣に感心したでしょう、大層な下され物をふるまった。

江戸の街は豪勢な下され物の噂でもちきりになった。

観世の太夫と金春の太夫に銀子が百枚と綿百把、観世のワキ役に金三枚、金春のワキに金一枚、小鼓や太鼓、ツレに金一枚、狂言猿楽に銀二十枚と、途方もない大盤振る舞い。

それは、まあ、いいとする。

オクニ一座になんの下され物もないのは口惜しいけれど、我慢できないわけじゃない。

征夷大將軍の秀忠さんと大御所家康さんのお好みだというなら、それでいい。

江戸到着の日から、成瀬トランドさんとラビちゃん、カヨちゃんは 神田明神で踊らしてください と、その筋、その筋に交渉したけど、うまくいかない。

橋本ヒサシさんの愛称のラビちゃん、これはもちろんラビットクラブの由来からエツちゃんが付けた。

カヨちゃんは両親が付けた名前をそのまま、つまりエツちゃんやあたしとおなじだから愛称というには物足りないけど、カヨコっていうのがそもそも愛称みただから、まあ、いいかって、きまった。

虎人さんとラビちゃん、カヨちゃんがその筋、その筋に奔走したけど、結果としてはうまくいかなかった。

交渉が下手だから、じゃない。

交渉の相手になってくれた街の顔役みたいな町人も、すこしずつカヨちゃんに好意的になった。

それでも、うまくいかない。

オクニ一座の名は江戸でも知られていた。

名を知られていたのがかえってまずかったと、いえなくもない。

神田明神の芸能興行の取締責任者、ナントカっていう

旗本の下、たぶん神田の街を取り締まる顔役らしい町人、これが徳川さんの権威を笠に着て、

「かぶき踊のオクニ一座、下賤の民を相手の下賤な踊りに似合う舞台は神聖このうえない神田明神ではなく、街角でじゅうぶんではないか、ハツハツ」

ラビちゃんとカヨちゃんを嘲笑したそつだ。

あたしが現場にいたら、前を捲まくって腰を振り、白い脛すねから腿ももまでチラチラ、舞台さながらにからかってやつたはずだ。

だけど、あくまで冷静、賢明なカヨちゃん、

「京都にはオクニ一座の常設舞台があります。いつも大入り満員、オクニとサンザが登場すれば万雷の拍手で舞台も芝居も揺れる！」

「まさか、とはおもうが、オクニの常設舞台とやらは、京都のどこに？」

「キタノテンマングウテンジンの境内」

「はあ？」

「漢字で書けば北野天満宮天神」

「天満宮……？」

「菅原道真、ご存じありません？」

「知ってるけど、それと天満宮と、どういう関係が？」

知っているのに 知らない とウソをつくやつの正体を暴あはくのは簡単だけど、ウソもイツワリもなく 知らない と正直にいうやつを相手に真実を説いて納得させるのは疲れる。

待っているのはむなししい結果だけかもしれないとおもえば、出るはずの声も出ないだろうが、カヨちゃん、頑張った、『広辞苑』と『明解・爽快 日本史年表』をほ

とんど暗記する記憶力を武器として。

「醍醐天皇の延喜元年（901）、右大臣の菅原道真は

左大臣藤原時平との政争に敗れ、官を大宰権帥に下げら

て身柄を太宰府に遷され、三年目に亡くなった。道真の

怨霊が激しく皇室に祟ったので、朝廷は道真を神として

北野に祀った、それが北野天満宮」

「そうか、道真は朝廷に反抗して流罪された政治犯だっ

たのか。そんなやつを尊敬して祀る神社の常設舞台なら、

まさに下賤なかぶき踊にお似合いだな、ハッハ」

さーて、こうなればカヨちゃんの独壇場。

「あのねー、神田明神の祭神は、いったいだれだか、ご存じですか？」

「だれ、つて、明神さま……じゃないのか？」

「明神なんていう名の神さまは、存在しないの！」

「だって……」

膨れっ面の町人に、エツちゃんがぶつつける。

「神田明神の祭神は大己貴神と少彦名神の二柱、大己貴

は大国主命の別名、そのほかにひとり、重大な政治犯を

神として祀っているんだけど、ご存じないでしょうねー

え」

ねーえ と延ばしたのが相手を軽蔑して惑乱させる

エツちゃんの作戦の神髄、あたしには、わかる。

これで、たいていのひとは あたしが優位、あんたは

劣位 の上下関係に押し込められ、いかに蹴こうとも脱

出できない。

「政治犯、そいつは許せん！」

「でもね、許すも許さないも、手遅れだと、あたしおも

うんだけどなーあ」

エッちゃん、またまた、 けどなーあ と延ばして軽蔑のレベルをアップする。

「教えてくれよ、そのケシカラン政治犯で、だれ？ 名前は？」

「タイラノマサカド」

「マサカド……なーんだ、マサカドなら知ってるよ。知ってるけど、政治犯なんかじゃない、関東の英雄さ。英雄だから神田明神」

「朱雀天皇すざくの天慶二年てんぎょう……」

「はーあ？」

町人も真似して はーあ？ と延ばしたが、エッちゃんの威勢のいい けどなーあ には及ばない。

「マサカドは坂東征服ばんとうをくわだてて朱雀天皇に反逆し、常陸・上野・下野の国府を占領して われは新皇なりと宣言したが、追討軍に敗れて滅亡した」

「ふーん。そんなふうな話はきいていたが、ほんとうなのかな？」

「菅原道真も天皇によって官を奪われ、位を降ろされたんだから政治犯だけど、本来は朝廷No.2の右大臣、無位無官のマサカドとは桁けたがちがう。そのうえ、道真は没後

まもなく正一位しょういち・太政大臣たじょうだいじんになったが、マサカドはそのまま」

「うーむ」と唸こまねって手を拱こまねく町人、

「つまり、京都の北野天神の常設舞台が神田明神の舞台より格が高いといたいわけだ。えーと、あんたの名前はなんと叫こまねったかな？」

「橋本力ヨコ、通称は力ヨちゃん、夫の橋本ヒサシ、通

称ラビちゃんといっしょにオクニ一座の庶務係をやつて
ます」

町人の態度がやわらかくなった。

ヒタヒタと攻めるカヨちゃんを憎悪するどころか、反
対に、にわかには好感をもつたと、あたしにはみえた。

それでも、ダメだった。

いまさら推測するのも手遅れだけど、神田の舞台の管
理役、ナントカつていう旗本、火事さわぎの処置がまず
かったとおもつて自分を責める心境におちいつていた。

失態をとりかえすにはどうしたらよかろうかと、切羽
詰まっていたようだ。

下賤なかぶき踊の神田明神興行をゆるせば、火事さわ
ぎの処置の失態をさかのぼつて追及され、重い罪を着せ
られるのは必定、それはたまらんと、しばらくは神田明
神の芸能興行をみとめない腹積もりをきめたらしい。

神田明神の興行をみとめないと決断をくだしたそのあ
と、どうしたか？

ついに旗本は、神田明神ではなく、江戸城のなかで勸
進興行をおこなうのはどうだろうと大胆な計画を思いつ
き、上役にもちかけた。

「観世と金春の太夫をお城にお召しになられ、勸進能を
催されては如何でありますようか」

「なんと、お城で、勸進能！」

仰天する上役に、旗本はていねいに説明する。

「ご無礼と承知のうえでもうしあげますが、大御所さま
につきまして、ちかごろご容態よろしからず　との噂
が流れております。江戸にかぎった噂ならまだしも、西
国の大名の耳にもとどいておる気配。噂を打ち消すため
にも、大御所さまと当代さまの御名でお城で勸進能を催
され、旗本や諸大名には棧敷を作らせ、芝居には江戸の

民を招いて大御所さまのご健勝をみせつけてやる」

はじめは響めつ面しかできいていた上役、なかごろから機嫌を好くし、おわりには旗本を称賛しかねない様子。

「如何でございましょうか？」

「名案、そういつてよかるう。日ごろから大御所さまは江戸の民をお城にまねき、見物させてやりたいとおぼしめしであられた。それにしても、なにがしかの名目は要る、勸進能なら打って付け」

本丸と西丸のあいだに仮設の舞台がつくられ、諸大名が命じられて棧敷を建てた。大御所家康と將軍秀忠が能を見物する棧敷も建てられる。

舞台建設の費用は徳川家から支出されるが、諸大名の棧敷は領地の石高に応じて諸大名が支出する。

なんとありがたいことに、大御所さまと当代さまは諸大名が勸進能見物の棧敷をつくるのを、おゆるしにいられた。諸大名は奮発し、できるだけ幅の広い棧敷をつくって感謝のしるしとせよ、というわけだ。

棧敷の幅一間いっけんにつき永楽銭一貫文の割合がきまつて公示された。

懐具合がきびしい大名たち、なるべく狭い棧敷をつくって建設費用を安くしたいところが、そうするとお上にたいして不忠義とみなされ、叱責されるおそれがあるから、泣くなく幅の広い棧敷を建てなければならぬ。徳川家は、そこまで見通している。

残酷で有効な大名支配政策の一端なのだ。

江戸城の勸進能の期日は二月十三日から十六日まで、

「芝居拝観料・一人十銭」と書かれた高札たかざしが日本橋、浅

草橋、芝辻札、四谷辻札、神田明神の五ヶ所に建てられ、町人を喜ばせた、さすがは徳川さまと。

そこまでは良かったが、能の太夫が血相を変えて世話役の旗本に詰め寄った。

「一人十銭の木戸銭をうけるのは承服できませぬ。われらの能は神を言祝ぐ神聖な技、穢らわしいオクニ一座のかぶき踊と同列に見立てられるのははなはだ迷惑に存じます！」

能の拝見に一人いくらの定額をつけるのは能を下世話な着や湯飲みなみの商品とみなすしである、ケシカランという理屈だ。

なりゆき如何では役者の命にかかわりかねない反抗だが、なるほど、もっともない分と同情論が浮上、勧進銭徴収方式に変更された。

勧進銭に定額はない、お客さまそれぞれのこころざし
が勧進銭だから。

あたし、すぐに気がついた、オクニ先生はこの木戸銭事件をあたしたちに直接、体験させたかったのだ、と。

能役者が鼻高々で穢らわしいオクニ一座のかぶき踊と貶めるのを、あなたたちは許しますか、許せますか？

オクニ先生ご自身は、どうなさったか？

先生はお許しになった、いや、ちがう、お許しになったのではない、相手にしなかったのだ、能は能、かぶきはかぶき、別の道をゆく、と。

いまごろ、京の四条大橋の東詰で、オクニ先生がなにをおかんがえになっているのか、あたしには手にとるよ
うに鮮明にわかる、いや、みえる。

仲間のうちで、あたしのほか、これがわかるのは、た
ぶん、虎人さんだけだ。

そこで気づいて、虎人さんにたずねた。

「四条大橋東詰のオクニ先生が、いま、なにをなさり、
なにをおかんがえになっているか、想像したこと、あり
ますか？」

「わたしは反対に、ランちゃんが先生のことを想像した
ことはあるのかな、とたずねかった」

ふふふ、あたしのおもったとおりだ。

「さーて、ランちゃんはどうするかな。カーッと怒って
能役者に掴みかかり、徳川さんのご鼻屑が、それほど
嬉しいのか！　なんて叫ぶ、のかな？」

「女のあたしに馬鹿にされて口惜しいなら、こういう
身振り、やってごらん！　と、胸をグイーツと開け、二
の腕をむき出し、視線を朱の色に染めて能役者を誘って
みましようか」

「ランちゃんにはふさわしいけど、じっさいには、やら
ないな。そうだろ？」

「まあ、ね。なぜかっていうと、あるとき、いや、この
とき、オクニ先生は嬉しかったんですよ、きつと、まち
がいない！」

「ふん、ふん。もうちょっと、先へ進んで説明してくれ
ないかな」

「徳川家の江戸城、こんな大きな政治のちからに頼らな
ければ芸を演じられない観世、金春の太夫の実際を知っ
て、オクニ先生、　なんとまア哀れなひとたちなんだ
と、たっぴりの優越感を味わった。あたしにはそうとし

かおもえない」

「トランドさん、あたしの肩に両手を置いて、パンパンと叩き、

「さすが、オクニ先生が後継者に指名なさっただけのことはある、えらいぞ、ランちゃん！」

じっさいに、こういう会話が合ったわけじゃなく、あたしの勝手な想像だけど、トランドさん、あたしとおなじように事態を想像していたにちがいない。

あたしがみるところ、二月十三日から十六日まで四日の江戸城の勸進能は成功した。

観世や金春の能役者たちは、一人いちにんいくらの木戸銭を取らず、お客さまそれぞれのころざしの勸進銭徴収方式が実行された結果、穢らわしいオクニ一座の踊りと
のあいだにはつきりと差をつけたのを悦んだ。

それをみて、あたし、あんたたち、馬鹿なんじゃないの！ とぶつつけてやりたかったが、我慢した、岩本カヨちゃんが、

「ランちゃん、あたしに名案があります。名案が実現するか、失敗するか、はっきりするまで怒りをぶつつけるのは待ってください」

悲痛な表情で訴えたから、
「待ちましよう、カヨちゃん、時間がないわけじゃないんだ」

承知したとき、あたしの胸はほんとうに晴々としていた。

すっきり、あたたかく、快感のかたまり。

——「りゃ、きつと、うまいくぞ！」

名案実行の初日、どんな手でお城の門番を籠絡ろうらくしたか

わからないが、カヨちゃんが入城したのがわかった。

つぎの日、カヨちゃんから 明日か、あさつて、あの

旗本から知らせがあります と通知があった。

カヨちゃんは、お城の勸進能を世話した、あの旗本と交渉をはじめたのだ。

幸先、よし！

つぎの、そのまたつぎの日、

「ランちゃん、きまつたよ！」

カヨちゃんがあたしの胸に飛びついて、叫んだ。

「お城の、かぶき踊、ゆるされた！」

江戸のお城でオクニ一座のかぶき踊を興行する——これがカヨちゃんの 名案、徳川さんに許可されたんだから、すごいよ、こりゃ！

「カヨちゃん、よつぽどうまく交渉したんだね」

「よつぽど は誉められすぎだけど、まあね、頭の骨の下がヒリヒリするほど頭は絞ったの」

「頭を絞って、なにが出てきた？」

「かぶき踊は一人いくらの木戸銭を取るから下賤、能は勸進銭を取るから高級で神聖というわけですね と、あたし、あの旗本さんに念を押したの」

「で、どうなった？」

「あの旗本さん、沈思の様子も躊躇の顔色もなく、ただ、そうだよ と」

あたしの頭の中に光の線が走った。

うまくいくにちがいない予感の光。

「じゃあ……！」

「でしよう、ランちゃん、わかるでしょ」

カヨちゃんはまんまるの顔になって、

「オクニ一座は木戸銭じゃなく、勸進銭をいただいてお

城でかぶき踊を興行します。どうかお殿様の許しをいただいてくださいって頼んだら、旗本さん、目をシロクロさせて、それから……」

「どう、なった？」

「みごとな理屈である。上さまは、理屈の通ったことがたいそう好きなのだ　と　いつて奥へゆき、一刻ほどしてもどつてきて、　かぶき踊の勸進興行、お許しが出た　と。あたし、もう、うれしくって！」

「うれしいのはあたしもおなじ、いや、カヨちゃんよりもあたしのほうが二倍も三倍もうれしいんだけど、イチマツの不安がないわけじゃないの……あ、イチマツの漢字がわからないから片仮名でいつてるんだけど……」

カヨちゃん、「ちょっと待ってね」と、てのひらを向けてあたしを制し、『広辞苑』をひらいて、

「イ・チ・マ・ツ……あつた、イチは数字のイチ、マツは抹茶のマツ、抹消のマツ、意味は　ひとはけ、ひとなすり、多少、ちょっとしたもの　などなど。で、ランチやんの、そのイチマツの不安ていうのは？」

「オクニ一座を観にくるひとのほとんどは勸進銭より木戸銭のほうが好きなんじゃないかな。勸進銭の金額で自分の懐具合を他人に知られるのはイヤなものだし、他人の金額は気になるし、ね。木戸銭なら、だれでも同額だから気楽なもの」

「そりゃ、そのとおりよ」

「かぶき踊は観たいけど、勸進銭を払うのはイヤだといつて二の足ふむひとが多いんじゃないかしら。それが、あたし、心配」

あたしの顔をまじまじとみつめたカヨちゃん、喉の奥までみえそうなでっかい口をあけて、いきなり、

「プフアーツ！」

吹き出して笑い、

「あのね、これからというのがほんとうの意味でのあたしの名案なの。あたしを笑うのはかまわないけど、あんまり馬鹿々々しい名案だからって、あたしを軽蔑しないでね、お願いよ、ランちゃん」

カヨちゃんの お願いよ は真剣そのものの口調だけど、そもそも、あたしがカヨちゃんを軽蔑するはずはないし、そんなこと、カヨちゃん自身にもよくわかってるはずだから、なにがなにやら、こんがらかってしまつて、ややっこしい。

ややっこしい状況を突き抜けるには、

「はやく、その、ほんとうの名案ていうのはなにか、いつてよー！」

これしか、ない。

「おカネの入口と出口に別の言葉を書いておくの、まったくシンプルなことなの」

カヨちゃん、棒切れで地面に絵を書く。

四枚の細長い木の板を組みあわせた四角い長い箱のようなものを書いて、

「こつちがおカネの入れ口、こつちが出口。木戸口の表に出ている箱に 木戸銭 おひとり十銭、裏に出ている箱に 勸進銭 おこころざし と書いて斜めに置き、真ん中を幕で仕切る。表では 木戸銭 しかみえない、裏では 勸進銭 しかみえない」

「ていうことは……？」

「あの旗本さんは検番役として木戸の裏に立ち、勸進銭 と書いた箱の口からおカネがざらざらと出てくるのを確認する。表に 木戸銭 と書いてあるのはみえないの」

「ひょーっ！」

「ね、お客さんは 木戸銭 と書いてある木戸の表の箱の口へ木戸銭を投げ入れてくれる、木戸の裏の箱に 勸進銭 と書いてあるのはみえないの」

「木戸銭 が箱の中で 勸進銭 に変わっちゃうんだ！」
「旗本さんが カヨちゃんにだまされた！ と気づくに時間はかからないだろうけど、他人にはいえない。勸進かぶき興行の責任者がオクニ一座の庶務掛にだまされたとなると、たいへんな騒動になるからね」

—— こんどのお城のかぶき興行は勸進かぶきじゃなくて、一人十銭の木戸銭で観られるそつだ。

—— 木戸銭は、いいなあ。金持ちも貧乏人も、みんな同額の木戸銭で面白いかぶき踊が気楽に観られる。

だれでも同額、気楽に観られる、この二点が江戸の民をひきつけた。

二月二十日の一日だけの興行と触れがあったのも人気を煽あおった。

能の興行はこれからも観られるだろうが、このつぎにオクニかぶきを観られるのはいつか、わからない。

焦りの気持ちに押されたこともあったか、二月二十日、江戸のひとびとは本城と西丸のあいだに仮設された舞台の芝居を埋めつくした。

「押し寄せたものですかあ！ あなたは文字をお読みになる、この裏勢な人出、なんと表現なさるかな？」

「思いきって人数を大きさに見積もる手はありますが、何千とか何万といった数字をあげても却かえって印象を弱めてしまう」

「別のなにかに替える手があるでしょう、母の恩は大海

の」とし、とか」

「あ、それならですね、カキがあります。字に書けばツチヘンにモノで堵、音読はト、訓読はカキ、垣根とカキとおなじです。たくさんひとが集まって、まるで堵の」とし、などの常用句があります」

「いいですね、それ、使わしてもらいます！」

「あなた、芸能記者さん？」

慶長十二年二月二十日、江戸城。

オクニかぶきの芝居に騒めきが絶えることはない。

あちらに クスクスの騒めき、こちらに ゲワッの騒めき、ふたつかさなって ゲオン と響き、響きが消えぬうちに キャァッ と聞こえるのは子供の歓声と喧嘩の物音。

能は厳肅莊嚴、かぶきは猥雑滑稽ときめつけるのは不可能だ。

だが、

——能の舞台には存在するのに、かぶきの舞台には存在しないもの、それはなにか？

こういうふうの問題を設定するならば、こたえは意外に簡単に出てくる。

——権力との親近感、そういったものじゃないかな。もっと簡単にいうなら、舞台のうえに権力があるのか、ないのか、この相違。

能はあくまでも権力の装飾芸能である。

かぶきは権力を無視してはじめて成り立つ芸能。でなければ、権力を知っていても知らないふりをしてこそ可能な芸能。

——オクニ先生、みえますか！

——そこから、四条大橋東詰から、江戸のお城のオクニ一座の舞台をご覧になれますか！

オクニ先生に挨拶して、あたし、踊りだした。

これ、と目をつけた男めざして舞台をするすると近づいたとき、

——このままじゃ、いつもとおなじ、つまらない。あたしがつまらないと思う動きを、木戸銭払って観にきてくれた男が面白いと思うはずはない！

男の目をめざして一直線に近づくのがいつものやりかた、だけど、これじゃダメだと勘づいたあたし、咄嗟の機転というか、いや、わけがわからない衝動に衝かれてキリツと顔をあげ、天を仰いだ。

自分でかんがえて天を仰いだんじゃない。

「ランちゃん、こちら、こちらを見上げなさい、なにも怖いことはないのよ！」

オクニ先生が、あたしを天にお召しになる声のようにきこえた。

それで、どうなったか、自分の声でいうのは怖いんだけど、あたしのほかにいうひとはいないんだから、いいます。

あたしが目をつけた男が、あたしに惹かれて天を見上げるんじゃないか、特別の理由もなしにそう思っていたけど、ちがう。

芝居の男も女も、年寄りも子供も、みんないっしょにキリツと顔をあげ、天を仰いだの。

芝居には音もない、声もない。

みんな、しずかに、しかし緊張の表情ではなく、

——暖かい色の天だなあ！

暖色の天の空気を味わっていた。

成瀬トランドさんが、お城の興行を世話していただいた旗本さんに謝礼をさしあげた。

トランドさんの報告によると、旗本さん、いい感じの笑顔で、こういったそうだ。

——恩に著せるつもりはないが、いただいでおくよ。

役人は賄賂が好きと下世話の世間の相場がきまっている。あいつは賄賂に目が眩んで 木戸銭 と 勸進銭 の力ラクりに騙だまされ、オクニ一座の城内かぶき興行の世話を焼いた、こう思われるほうが、オクニ一座のためにも、わしのためにも具合がいいはずだ。

「旗本さん、ちゃんとしていたんですね」

「らしいね。賄賂を取らなければ、オクニ一座の味方だと判定され、出世のさまたげになる。賄賂を取れば、ふつこの役人の仲間に入れられて、無事に昇進というわけさ」

江戸の役人さんのうちに最小限ひとりのオクニ雇員がいるとわかって、エツちゃんが覚悟をきめた。

「ランちゃん……じゃなくって、オクニ先生……あたしは江戸にのこります。かぶき踊を江戸でひろめる役目をひきうけます、許していただけますね」

エツちゃんは鋭い視線であたしの目をつらぬいた、同級生で親友のあたしに「ノー」といわせぬ強い意志を込めた視線で。

「あたしは京都へもどって、北野のオクニの舞台で、死ぬまで踊りつづけます。これでお別れですね」

同級生どうしの馴れ馴れしい言葉で別れようかともおもったけど、そのほうが却って白々しい気がしたから、

あたしはオクニでエツちゃんの師匠、エツちゃんはあたしの弟子、の役柄で別れた。

「さようなら、またアシタ」

「またアシタ」

アシタとアシタがエツちゃんとあたしの別れの言葉になった。

（終章・終）

（大尾）